

中 対



1988. 3

兵庫県教育委員会

はじめに

わたくしたちの兵庫県は、北は日本海、南は瀬戸内海に面し、内には緑豊かな山々を合わせ持つふるさとであります。

このような自然条件のもとで、古くから文化が開け、多くの貴重な文化財が残されております。これらの文化遺産は、歴史を学ぶ上に、更には新しい文化を向上させるためにかかせないものであり、次代に申し送り活用を図ることが、我々の責務と考えます。

このたび、JR宝塚—新三田間の複線電化や舞鶴自動車道などの交通網の開通などを記念して、北摂・丹波の祭典“ホロンビア'88”が昭和63年4月から開催されます。三田市域では“活と自由あふれる交流都市”をテーマに21世紀公園都市博覧会が開かれ、この会場となる北摂三田ニュータウンからJR三田駅を結ぶ、都市計画街路三田幹線が計画されました。

この三田幹線の建設にあたり、三田市対中町所在の対中遺跡の発掘調査を兵庫県北摂整備局の委託を受け、兵庫県教育委員会が調査を実施しましたが、ここに調査の結果をとりまとめ、報告書を刊行いたしました。

この報告書が文化財保護と文化向上のため、お役にたてば幸いです。最後に、調査にあたりなにかとご指導、ご協力を頂いた多くの方々に、厚くお礼を申し上げます。

昭和63年3月

兵庫県教育長 井野辰男

例 言

1. 本書は都市計画街路三田幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で、昭和59・60・61年度に実施した兵庫県三田市対中町に所在する対中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は兵庫県北摂整備局の委託を受け、兵庫県教育委員会が主体となり、実施した。調査は、吉田 昇、岡田章一、深井明比古、別府洋二、中川 渉、甲斐昭光が担当した。
3. 本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影し、遺物については森 昭氏に依頼した。
4. 本書に使用した図のうち、遺構についての実測は調査員と補助員が行い、遺物については調査員と整理事業補助員が行った。
5. 製図は、調査員と和田早芳子が行った。
6. 出土遺物のうち、金属製品の保存処理は加古千恵子が、木製品の保存処理は別府が行った。
7. 本書の執筆分担のうち、遺物については、須恵器は吉田、陶磁器は岡田、土師器・弥生時代前期土器・縄文土器・石器は深井、木製品・金属器・骨角器は別府、弥生時代後期土器・古式土師器は中川、瓦器・黒色土器は山田清朝、奈良時代の土師器・須恵器は甲斐が担当した。その他遺構などの執筆分担は本文目次に示した。
8. 本書で使用した遺構番号及び、木製品・金属器の遺物番号は各地区毎に付けている。また挿図中の遺構略号は次のように(SD→溝、SE→井戸、P→柱穴)呼称を用いている。
9. 本書編集のうち、対中地区を吉田・深井、広畑・森下地区を別府が行い、総編集は深井が担当した。
10. 調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々の御指導と御教示を仰いだ、記して深く感謝の意を表するものである。
岡崎正雄、鬼頭清明、島地 謙、高橋 学、高島信之、丹治康明、林 昭三、松井 章、丸山 潔、光谷拓実、宮本長二郎、安田 滋、山根実生子(敬称略)

本文目次

第1章 調査に至る契機と経過

| | | |
|----------------------|--------|---|
| 第1節 遺跡の発見 | (高島信之) | 1 |
| 第2節 確認調査 | (吉田) | 3 |
| 第3節 対中地区の調査 | (深井) | 5 |
| 第4節 広畑・森下地区の調査 | (別府) | 6 |
| 第5節 整理作業 | (和田) | 8 |

第2章 遺跡の環境

| | | |
|-----------------|--------|----|
| 第1節 地理的環境 | (高橋 学) | 9 |
| 第2節 歴史的環境 | (吉田) | 11 |

第3章 対中地区

| | | |
|---------------------------|------|----|
| 第1節 調査の概要 | (深井) | 13 |
| 第2節 近世の遺構と遺物 | (深井) | 13 |
| 1. 溝 | | |
| 第3節 平安時代～鎌倉時代の遺構と遺物 | (深井) | 14 |
| 1. 掘立柱建物跡・包含層 | | |
| 2. 溝 | | |
| 3. 井戸1 | | |
| 4. 墓 | | |
| 5. 土壌 | | |
| 第4節 奈良時代の遺構と遺物 | (深井) | 67 |
| 1. 掘立柱建物跡 | | |
| 第5節 弥生時代の遺構と遺物 | (深井) | 69 |
| 1. 土壌 | | |
| 第6節 小結 遺物の考察 | | |
| 1. 土師器の分類と編年 | (深井) | 71 |
| 2. 瓦器・黒色土器について | (山田) | 80 |
| 3. 須恵器について | (吉田) | 83 |
| 4. 陶磁器について | (岡田) | 84 |

| | | |
|-------------------------|------|----|
| 5. 対中地区の墨書土器・呪符木簡 | (深井) | 87 |
| 6. 遺構の考察 | (深井) | 90 |

第4章 広畑地区・森下地区

| | | |
|------------------------------|---------|-----|
| 第1節 広畑地区の調査 | (別府) | 95 |
| 1. 概要 | | |
| 2. ステージ1 近世以降の遺構 | | |
| 3. ステージ2 奈良時代から平安時代前半にかけての遺構 | | |
| 4. ステージ3 古墳時代後期の遺構 | | |
| 5. ステージ4 弥生時代後期～古墳時代前期 | | |
| 6. ステージ5 弥生時代前期 | | |
| 7. ステージ6 弥生時代前期以前 | | |
| 第2節 森下地区の調査 | (別府) | 107 |
| 1. 概要 | | |
| 2. 遺構 | | |
| 第3節 広畑地区・森下地区の遺物 | | |
| 1. 中・近世の遺物 | (岡田) | 124 |
| 2. 奈良時代の遺物 | (甲斐・別府) | 125 |
| 3. 古墳時代の土器 | (甲斐) | 126 |
| 4. 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器 | (中川) | 128 |
| 5. 弥生時代前期の土器 | (深井) | 130 |
| 6. 縄文時代の土器 | (深井) | 131 |
| 7. 石器 | (深井) | 132 |
| 8. 木製品 | (別府) | 135 |
| 9. 金属製品 | (別府) | 135 |
| 第4節 小結 | (別府) | 136 |

第5章 まとめ

| | | |
|-------------------------|-------------|-----|
| 第1節 対中遺跡の性格 | (深井) | 141 |
| 第2節 三田盆地の地形環境分析 I | (高橋) | 143 |
| 第3節 対中遺跡出土木器の樹種 | (島地 謙・林 昭三) | 149 |

挿図目次

- 第1図 遺跡の位置図
- 第2図 調査地点図
- 第3図 明治中期の村中遺跡周辺
- 第4図 周辺遺跡分布図
- 第5図 村中地区基本土層図
- 第6図 村中地区平安時代～鎌倉時代
遺構図
- 第7図 掘立柱建物跡平面図-I
- 第8図 掘立柱建物跡平面図-II
- 第9図 掘立柱建物跡平面図-III
- 第10図 掘立柱建物跡・包含層土師器-I
- 第11図 掘立柱建物跡・包含層土師器-II
- 第12図 掘立柱建物跡・包含層土師器-III
- 第13図 掘立柱建物跡・包含層土師器-IV
- 第14図 掘立柱建物跡・包含層土師器-V
- 第15図 掘立柱建物跡・包含層土師器-VI
- 第16図 掘立柱建物跡・包含層土師器-VII
- 第17図 掘立柱建物跡・包含層瓦器
- 第18図 掘立柱建物跡・包含層須恵器-I
- 第19図 掘立柱建物跡・包含層須恵器-II
- 第20図 掘立柱建物跡・包含層須恵器-III
- 第21図 掘立柱建物跡・包含層須恵器-IV
- 第22図 掘立柱建物跡・包含層須恵器-V
- 第23図 掘立柱建物跡・包含層・溝
陶磁器
- 第24図 掘立柱建物跡・包含層 土鍬
- 第25図 包含層 温石
- 第26図 溝3 土師器・磁器
- 第27図 溝4 土師器・土鍬
- 第28図 溝4 瓦器・黒色土器・須恵器
- 第29図 溝8 土師器
- 第30図 溝8 須恵器
- 第31図 溝9 土師器・須恵器・土鍬
- 第32図 溝10 土師器・瓦器
- 第33図 溝10 須恵器
- 第34図 溝11 土師器・瓦器・黒色土器・
須恵器・土鍬
- 第35図 溝13 土師器・磁器
- 第36図 溝16 土師器・須恵器・磁器・
土鍬
- 第37図 溝22 土師器
- 第38図 溝23 土師器
- 第39図 井戸1 実測図
- 第40図 井戸1 土師器・瓦器
- 第41図 井戸1 須恵器-I
- 第42図 井戸1 須恵器-II
- 第43図 井戸1 磁器
- 第44図 井戸1 木製品
- 第45図 井戸1 木製品・骨角器
- 第46図 木棺墓 実測図
- 第47図 木棺墓 土師器・鉄釘
- 第48図 土壌1・2 土師器・須恵器
- 第49図 奈良時代掘立柱建物跡
- 第50図 掘立柱建物跡・包含層 須恵器
- 第51図 村中地区奈良時代及び弥生時代
遺構図
- 第52図 土壌2・8・包含層 弥生土器
- 第53図 村中地区墨書土器集成図
- 第54図 広畑地区調査区設定図
- 第55図 広畑地区東壁基本土層図
- 第56図 広畑地区ステーション1遺構図・南
壁土層図

- | | | | |
|------|-----------------------|------|-----------------------------|
| 第57図 | ステージ2・3 遺構図 | 第77図 | 遺物2 (奈良時代から古墳時代後期の土器) |
| 第58図 | 溝3 土層断面図 | 第78図 | 遺物3 (弥生時代後期から古墳時代初頭の土器-I) |
| 第59図 | 溝6 枝溝土層断面図 | 第79図 | 遺物4 (弥生時代後期から古墳時代初頭の土器-II) |
| 第60図 | ステージ4 遺構図 | 第80図 | 遺物5 (弥生時代後期から古墳時代初頭の土器-III) |
| 第61図 | 溝2 土層断面図 | 第81図 | 遺物6 (弥生時代後期から古墳時代初頭の土器-IV) |
| 第62図 | 溝10 土層断面図 | 第82図 | 遺物7 軒丸瓦 |
| 第63図 | ステージ5 遺構図 | 第83図 | 遺物8 (弥生時代前期・縄文時代の土器) |
| 第64図 | ステージ6 遺構図 | 第84図 | 遺物9 (石器-I) |
| 第65図 | 井戸1 | 第85図 | 遺物10 (石器-II) |
| 第66図 | 柱穴5 | 第86図 | 遺物11 (石器-III) |
| 第67図 | 溝10井堰 | 第87図 | 遺物12 (木製品-I) |
| 第68図 | 溝11井堰 | 第88図 | 遺物13 (木製品-II) |
| 第69図 | 溝14 土層断面図1 | 第89図 | 遺物14 (金属製品) |
| 第70図 | 溝14 土層断面図2 | 第90図 | 三田盆地地形分類図 |
| 第71図 | 森下地区調査区設定図 | 第91図 | 三田盆地等高線図 |
| 第72図 | 森下地区基本土層図 | | |
| 第73図 | 森下地区第1・2面遺構図 | | |
| 第74図 | 森下地区第3面遺構図 | | |
| 第75図 | 溝2 土層断面図 | | |
| 第76図 | 遺物1 (近世から奈良時代の土器・土製品) | | |

表 目 次

- | | | | |
|-----|-----------------------|------|-------------------|
| 第1表 | 対中遺跡調査一覧表 | 第9表 | 対中地区黒書土器一覧表 |
| 第2表 | 対中地区掘立柱建物跡一覧表 | 第10表 | 兵庫県下の呪符木簡出土遺跡一覧表 |
| 第3表 | 土器別円グラフ | 第11表 | 出土遺物からみた対中地区遺構の年代 |
| 第4表 | 土師器分類表 | 第12表 | 石器一覧表 |
| 第5表 | 土師器編年表 | 第13表 | 対中遺跡遺構年表 |
| 第6表 | 土師器 手づくね・糸切り土器 百分比 | 第14表 | 対中遺跡出土土器の樹種 |
| 第7表 | 瓦器・黒色土器編年表 | | |
| 第8表 | 瓦器・黒色土器器高指数表 | | |

図版目次

- カラー図版1 遺跡 1. 村中遺跡遠景 空中写真(南から)
2. 広畑地区 空中写真(北西から)
- カラー図版2 村中地区 掘立柱建物跡群 空中写真

- 図版1 遺跡 村中遺跡周辺 空中写真
- 図版2 村中地区 1. 村中地区全景(北東から)
2. 村中地区調査前全景(西から)
- 図版3 村中地区 1. 掘立柱建物跡群全景 空中写真(東から)
2. 掘立柱建物跡10、11(奈良時代) 空中写真
- 図版4 村中地区 1. 掘立柱建物跡10(北から)
2. 掘立柱建物跡11(北から)
- 図版5 村中地区 1. 溝4土器出土状況
2. 溝8土器出土状況
- 図版6 村中地区 1. 井戸1 全景
2. 井戸1 細部写真
- 図版7 村中地区 1. 井戸1 掘方
2. 井戸1 底に残るノミ痕
- 図版8 村中地区 1. 木棺墓1 完掘状況
2. 木棺墓1 断面
- 図版9 村中地区 1. 弥生時代後期 土壌群(南から)
2. 弥生時代後期の凹地と南壁
- 図版10 村中地区 1. 土壌2(南から)
2. 土壌5(北から)
- 図版11 広畑地区 1. 広畑地区全景(東から)
2. 広畑地区全景
- 図版12 広畑地区 1. 近世以降の遺構面(西から)
2. 暗渠排水(南から)
- 図版13 広畑地区 1. 溜池状遺構(南から)
2. 耕作痕(南から)
- 図版14 広畑地区 1. 井戸1(北から)
2. 井戸1(西から)

- 図版15 広畑地区 1. 溝3 (南から)
2. 溝7 (南から)
3. 土器溜り (南から)
- 図版16 広畑地区 1. 溝1 (北から)
2. 溝6 (南から)
3. 溝2 (南から)
- 図版17 広畑地区 1. 弥生時代前期遺構面 (東から)
2. 溝10・溝12 (北から)
3. 溝11 (北から)
- 図版18 広畑地区 1. 溝10 井堰 (北から)
2. 溝10 井堰 (西から)
- 図版19 広畑地区 1. 溝10 井堰断ち割り (北から)
2. 溝11 井堰断ち割り (北から)
3. 溝14 (北から)
- 図版20 森下地区 1. 森下地区全景 (南西から)
2. 第1面水田址
3. 確認トレンチ (南から)
- 図版21 森下地区 1. 第2面水田址 (南西から)
2. 第2面水田址 (北から)
- 図版22 森下地区 1. 第3面遺構 (北から)
2. 溝2 (南西から)
- 図版23 森下地区 1. 溝2 (西から)
2. 溝2 土層断面 (西から)
- 図版24 森下地区 1. 第1面水田畦畔 (北から)
2. 水田畦畔 (南から)
- 図版25 森下地区 水田面に残された足跡 (ヒト及び偶蹄目動物)
- 図版26 対中・広畑地区遺物 1. 白磁・青磁
2. 白磁
- 図版27 対中地区 遺物 土師器 小皿 A 1 (160) C 2 (35・43・383・466・467・468)
C 3 (560・567・574・581・586) C 4 (571・569・575・576) D 1 (93)
D 3 (78・104・431) D 4 (476) D 5 (477)
- 図版28 対中地区 遺物 土師器 大皿 B 3 (173・185・439) C 6 (174・489)
C 7 (590・592・593・594) 杯 E 2 (217) E 3 (524)
E 4 (202・444・490) 瓦器 小皿 (418)

- 図版29 村中地区 遺物 土師器 受皿(232) 杯E 1 (215) E 2 (413~415)
F (218~220) 甕(234~447)
- 図版30 村中地区 遺物 土師器 托状皿(229~231) 瓦器 小皿(237) 椀(238-239-
419~421-497-527-528)
- 図版31 村中地区 遺物 溝4出土 須恵器椀 溝10・包含層出土 須恵器 山茶椀(287-
290-510) 椀(512-519) 片口鉢(329)
- 図版32 村中地区 遺物 井戸1出土 須恵器 小皿・椀 墨書土器
井戸1出土 須恵器椀
- 図版33 村中地区 遺物 弥生土器 甕 土鏝
- 図版34 村中地区 遺物 井戸1出土 須恵器 墨書土器
- 図版35 村中地区 遺物 溝・包含層出土 須恵器 墨書土器
- 図版36 村中・広畑・森下地区 遺物 近世 染付碗(359) 土笛(1001) 面子(1002~1004)
須恵器 杯 墨書土器(1010-1094) 複弁蓮華文瓦
- 図版37 広畑地区 遺物 須恵器 高台杯(1005・1027) 杯蓋(1030-1031) 杯身(1032・
1037) 弥生土器・土師器 小型丸底壺(1069・1079) 広口壺(1039)
甕(1076)
- 図版38 広畑地区 遺物 弥生土器 細頸壺(1045) 広口壺(1057・1060~1062・1067・1068・
1074) 無頸壺(1073) 高杯(1044) ミニチュア土器(1077) 底部(1070)
- 図版39 広畑地区 遺物 弥生土器 鉢(1042・1043) 甕(1050・1051・1053・1054)
- 図版40 広畑地区 遺物 弥生前期土器 壺(1080・1082・1083) 甕(1084・1085)
縄文晩期凸帯文土器 深鉢
- 図版41 村中・広畑・森下地区 遺物 石器 温石(S 1) 石燕(S 1001) 短剣(S 1002)
石庖丁(S 1007) 石庖丁未製品(S 1008) 石斧(S 1010)
敲石(S 1012) 紡錘車(S 1013) 砥石(S 1014) 凹石(S 1017)
- 図版42 村中・広畑地区 遺物 鉄器 釘(M 1~5) 木棺墓出土釘(M 4・5・8・9)
用途不明鉄製品(M 6・7・10~13) 銅製容器 銅製丸柄 耳環
- 図版43 村中地区 遺物 木製品 木簡(W 1) 赤外線写真 板材(W12・15-16)
曲物底板(W18~20)
- 図版44 村中地区 遺物 木製品他 棒状木製品(W11) 箸状木製品(W 2~10)
鹿角(B 1) 槌の子(W22) 横槌(W23) 楸(W24)
- 図版45 樹種同定資料 顕微鏡写真(1)
- 図版46 樹種同定資料 顕微鏡写真(2)

第1章 調査に至る契機と経過

第1節 遺跡の発見

対中遺跡の発見は、昭和59年4月7日、北摂三田ニュータウン建設に伴う交通需要の増大に対応するため計画された都市計画道路三田幹線の新設工事現場を、三田市教育委員会文化財担当職員が立ち入り調査を実施した際に、対中町対中で発見された。

発見時の状況は、神戸電鉄三田線と並行して耕作土を、幅約15m、長さ約150mにわたって、重機によって削り取った東端部で、多量の土器片の出土が確認された。土器片は東西約5～6mの場所に集中しており、多量の須恵器片に伴って土師器片及び輸入磁器片が散布していた。また、付近には柱穴が多数認められ、建物跡が埋没していることが予想された。

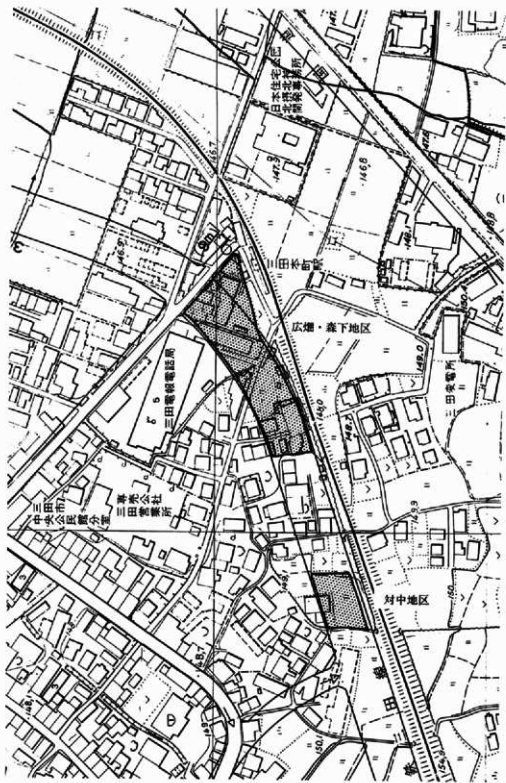
遺跡の取り扱いについては、4月9日に現地において、兵庫県教育委員会と兵庫県北摂整備局新都市部との間で立ち会いし、その取り扱いを決めることで調整された。

また、6月19日には、兵庫県教育委員会および三田市教育委員会の立ち会いで、対中遺跡（広畑地区）の下水道管理設用立坑部分で小型重機による試掘調査を行った結果、東西幅1m、深さ0.6mの弥生時代後期の溝状遺構が検出され、対中遺跡が広畑地区にまでおよぶことが確認された。

なお、三田市教育委員会では対中遺跡発見以降、周辺の市街地再開発による個人住宅、店舗住宅の新築、改築に伴う試掘調査を実施しているが、いまだ対中遺跡の詳細な範囲を知るに至っていない。



遺跡発見時の状況



第1図 遺跡の位置図 (S=1:2500)

第2節 確認調査

遺跡の発見が、工事に伴っての発見であった為、遺跡の拡がりを、逆に知る必要が出てきた。そこで、道路計画に伴って、対中地区と広畑地区で遺跡の有無を知るべく、確認調査を実施した。

対中地区では、既存道路から三田幹線への進入路部分であり、小型のバックホーによる掘下げの結果、遺跡の拡がりは見られなかった。

対中地区東では、対中全面調査区から、神戸電鉄「三田本町」駅の間に位置する丘陵部分を中心に、6カ所で確認の坪を設けて、小型バックホーを使って掘下げた。

結果、家屋の建築・移転等による擾乱が多く、わずかに、西寄り部分で、遺構検出可能な面を検出したが、遺構は存在しなかった。

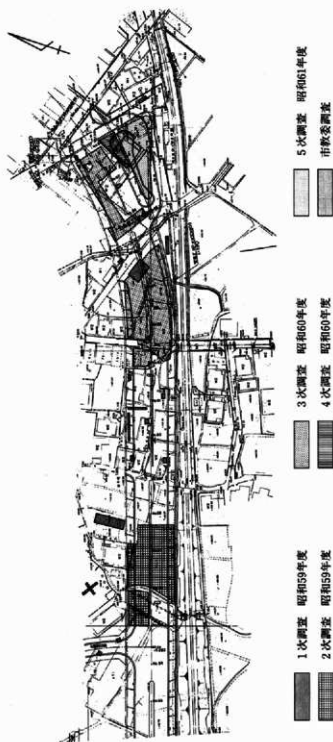
なお、この付近は、後日軒丸瓦が発見された地域であるが、確認調査の時点では、一点の破片すら見られなかった。

広畑地区については、特殊マンホール部分の調査時に広畑地区西の段丘崖付近まで遺跡範囲であると考えた。また東については3次調査の際にトレンチなどの確認調査を行い、全面調査に移行した。

森下地区では2次調査および3次調査の際に確認調査を行ない、3～5次調査で全面発掘調査を行った。遺跡は森下地区の北に延びていることが予想されるが、調査には至っていない。

第1表 対中遺跡調査一覧表

| 調査 | 期 間 | 対 中 地 区 | | 広 畑 地 区 | | 森 下 地 区 | | | | |
|----|--------------------|---------|----|-----------------------|----|---------|------|----|----|---------------------|
| | | 全面 | 確認 | 調査内容 | 全面 | 確認 | 調査内容 | 全面 | 確認 | 調査内容 |
| 1次 | S59.7.9 ～7.12 | | ○ | 遺物出土地以外を小型重機で確認 | ○ | | | | | 特殊マンホール部分を調査、溝発掘 |
| 2次 | S59.8.21 ～12.13 | ○ | ○ | 弥生～鎌倉遺構発掘、西方で一部トレンチ調査 | | | | ○ | | 三田本町駅前を確認 |
| 3次 | S60.5.13 ～10.3 | | ○ | 東端付近をトレンチ確認。遺構なし | ○ | | | ○ | ○ | 確認トレンチから一部全面で水田跡発掘 |
| 4次 | S61.2.17 ～3.4 | | | | | | | ○ | | 3次調査区の隣接地、水田跡発掘 |
| 5次 | S61.6.23 ～8.5 | | | | | | | ○ | | 三田本町駅前広場予定地発掘、水田跡発掘 |



第2図 調査地点図

第3節 対中地区の調査

対中遺跡対中地区は前述したように、不時発見されてから確認調査をされて、遺跡範囲がほぼ確定された。対中地区の遺跡の範囲は、武庫川右岸に広がる沖積地の南東部の段丘上に位置し、神戸電鉄三田本町駅の南西約200mにあたる。

全面調査は、南北は道路幅である24m、東西は遺構が検出された40mの長さにおいて実施された。

発掘調査は、昭和59年8月21日から実施し、ユンボによる表土層の掘削を始めた。ユンボ掘削は東方からはじめ遺物包含層上面或いは遺構面のほぼ直上まで掘削し、それ以下は人力掘削を行った。作業が進むにつれて、黄色の地山層に刻まれた各々の遺構が灰色や黒色土となって明確に現れた。また包含層からは多量の土器が出土し、その中には輸入陶磁器も含まれていることが判明した。

10月頃になり、遺構のほぼ全容をうかがえる状態までになってきた。时期的には平安末～鎌倉初期とした漠然とした時期でしか押さえることができなかったにせよ、掘立柱建物跡群、溝、土壇、井戸などが判明した。同一面上であるが奈良時代の掘立柱建物跡も検出されるに及んだ。

昭和59年11月、遺構ベース面を精査し、さらに下層をたち割ったところ、灰白色土の弥生後期の遺物包含層を確認した。その後、弥生後期面の確認トレンチを設けて、発掘した結果、約500㎡の広さに、弥生時代後期の流路や土壇などを検出した。

昭和59年12月、弥生後期の土壇内の土器を取り上げ、鎌倉時代初頭頃の井戸をたち割りし、井戸の部材などを取り上げ、12月13日、出土遺物等を魚住分館に運び入れ、無事発掘調査を終了した。

昭和59年度発掘調査の体制

| | | |
|--------|-----------|-----------|
| 調査主体 | 兵庫県教育委員会 | 社会教育・文化財課 |
| (調査事務) | 課長 | 西澤 良之 |
| | 参事 | 大西 章夫 |
| | 副課長 | 森崎 理一 |
| | 課長補佐 | 和田 富男 |
| | 埋蔵文化財調査係長 | 檀本 誠一 |
| | 技術職員 | 大平 茂 |
| (調査担当) | 主任 | 吉田 昇 |
| | 技術職員 | 深井明比古 |

- (補助員) 松本久美子・安福 節子
(作業員) 北本 一男・田中 実・小西 清・福井 祥治・岸下 節子
畑末千代子・畑末きみゑ・大勢 弥生・中島 清子・大北よし江
前中ともゑ・大垣すみゑ・北本あや子・小谷 幸子・古家みさを
塚本 敏子・今北 裕子
(運転員) 岸本 勉

第4節 広畑・森下地区の調査

広畑・森下地区は昭和59年度の対中地区の調査の際に、確認調査及び一部特殊マンホール敷設に伴う全面調査を実施した。その際、広畑地区では弥生時代前期の溝等の遺構が検出されたため、昭和60年度に全面調査を実施、弥生時代前期から近世に至る遺跡であることがわかった。この全面調査の際に、対中地区と広畑地区との間の部分の確認調査も再度実施している。森下地区では昭和59年度の部分確認調査に引き続いて、昭和60年度に坪掘り調査とトレンチ調査を併用して遺構の確認を行った。その結果、砂をかぶった水田跡が部分的に確認できたため全面調査を実施することになったが、既存建物の撤去の都合により8月と翌年2月の二期に分けて調査を行った。更に昭和61年度には隣接する三田本町駅前広場整備に伴って全面調査を実施した。

昭和60年度発掘調査の体制

調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

- (調査事務) 課 長 北村 幸久
参 事 森崎 理一
副 課 長 黒田賢一郎
課長補佐 和田 富男
埋蔵文化財調査係長 櫃本 誠一
技術職員 渡辺 昇

第1期(昭和60年8月)

- (調査担当) 技術職員 深井明比古
" 別府 洋二
補助員 高橋 学、岸田 浩治、広辻 明子、足立 倫子
事務員 東前 祐子
整理作業員 大前 厚美、西村サダ子、畑谷 敦子

運 転 員 岸本 勉
 作 業 員 井上 昇、西尾 精一、古中 久夫、田中 実
 福井 詳治、畑末千代子、畑末きみえ、中島 清子
 岸下 節子、前中ともえ、大勢 弥生、北本あや子
 小谷 幸子、塚本 敏子、戸出よし子、真達美千代

第2期（昭和61年2月）

(調査担当) 技術職員 別府 洋二
 " 甲斐 昭光
 補 助 員 高橋 学
 作 業 員 草野 文男、森 信昭、田村 聖光、田村 卓一
 永森 好晴、山田 一郎、松本 益雄

昭和61年度発掘調査の体制

調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

(調査事務) 課 長 北村 幸久
 参 事 森崎 理一
 副 課 長 黒田賢一郎
 課長補佐 福田 至宏
 課長補佐兼埋蔵文化財調査係長 大村 敬通
 主 査 井守 徳男
 (調査担当) 主 任 岡田 章一
 技術職員 別府 洋二
 技術職員 中川 涉
 補 助 員 高橋 学、伴 悦子
 中沢貴美子、蔵田 節
 事 務 員 石川 洋子

第5節 整理作業

昭和61年度の整理作業、水洗い、ネーミングは、魚住分館で行った。

接合以降の整理作業は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施した。コンテナ数は、土器類については約170箱。木器については40点あり、6月下旬より土器の接合復元を開始した。接合は、9月下旬までかかり、続いて復元を開始した。それと併行して和田早芳子、原香代美で、実測を行った。3月下旬～4月初旬に遺物写真の撮影を行った。

昭和62年度の整理作業、本年度は主にトレース、レイアウトを中心に作業を行った。

11月中旬より遺物のレイアウトを行い、12月中旬より写真図版の作成、12月下旬より遺物のトレース、レイアウトを行い、3月下旬2年間に渡る整理作業を終了した。

遺物は、魚住分館、遺構図写真等は兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて保管されている。活用されたい。

<整理事業体制>

| 昭和61年度 | 昭和62年度 |
|--------------------------|--------------------------|
| 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 | 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 |
| 課 長 北村 幸久 | 課 長 北村 幸久 |
| 参 事 森崎 理一 | 参 事 森崎 理一 |
| 副 課 長 黒田賢一郎 | 副 課 長 黒田賢一郎 |
| 課 長 補 佐 福田 至宏 | 課 長 補 佐 福田 至宏 |
| 課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長 大村 敬通 | 課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長 大村 敬通 |
| 主 査 小川 良大 | 主 査 小川 良大 |
| 技 術 職 員 渡辺 昇 | 主 任 岡田 章一 |
| (整理担当) | (整理担当) |
| 主 査 吉田 昇 | 主 査 吉田 昇 |
| 主 任 岡田 章一 | 主 任 岡田 章一 |
| 技 術 職 員 深井明比古 | 主 任 深井明比古 |
| 同 別府 洋二 | 技 術 職 員 別府 洋二 |
| 同 中川 渉 | 同 中川 渉 |
| 同 甲斐 昭光 | 同 甲斐 昭光 |
| (補助員) 和田早芳子、原 香代美 | (補助員) 和田早芳子、前田 陽子 |
| 金山 恵子、住本 広子、伊藤 昌子 | 井川 佳子、住本 広子、平林 育子 |
| 長原みゆき | 石野 照代、和田寿佐子、中納久美代 |

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

対中遺跡が発見された三田盆地は、兵庫県南東部に南に流下する武庫川の中流（河口より約25km）に位置している。この盆地を貫流する武庫川は、現在、丹波高地の白髪岳（標高741m）付近を源としており、約66kmで瀬戸内海へと至っている。

三田市の中心をなす市街地は、近世九鬼藩3万6000石の陣屋集落と武庫川左岸の三輪神社の門前集落とを核としたものであった（第3図参照）。1899年（明治32年）に阪神鉄道（現J.R.福知山線）が開通し、三田はそれまで利用されることのなかった武庫峡谷を通じて大阪方面と結ばれる。また、1928年（昭和3年）には神戸有馬電気鉄道（現神戸電鉄有馬線）が開通して、神戸方面への交通の便が良くなった。しかし、これらは結果として、後背農山村の中心であった三田の地位を相対的に低下させ、大阪、神戸などの諸都市へ従属的に結びつけたようである。それは、市制が施行された1958年（昭和33年）に3万6000人であった三田市の人口が、1980年（昭和55年）になっても変化していないことから判る。しかし、それらは決して人口流動の停滞を意味しているわけではなかった。すなわち、1964年（昭和39年）を除き、1969年（昭和44年）までは、毎年1500人あまりの転出があり、大都市域に対する労働力供給地としての性格が濃厚であった。これに対し、大都市近郊の都市化の進展にともない、転入人口は徐々に増加し、1970年（昭和45年）になると、ついに転出人口を上まわったのである。このように人口の停滞は、二つの相反した現象によって相殺された結果生じたものであった。ところが、1988年4月現在では、人口は4万6320人と急増している。J.R.複線化の完成や中国縦貫道の一部開通、そして、北摂ニュータウン構想の実現などが、最近、三田の様相を大きく変貌させつつあるのである。また、圃場整備事業の進展も、昭和62年度末には68%に達し、かつて盆地内に広く展開していた条里型水田は僅かに残存するにすぎなくなりつつある。

三田盆地における埋蔵文化財の調査は以上の様な状況の下に、進められているが、そのなかで、従来、ほとんど明らかでなかった平野部における埋蔵文化財の様相が少しずつではあるが判明し始めている。J.R.福知山線の複線化工事で発見された桑原遺跡⁽⁴⁾、武庫川の改修工事ともなって発掘調査された川除・藤ノ木遺跡⁽⁵⁾、圃場整備に関連して三田市教育委員会によって調査された貴志・下所遺跡⁽⁶⁾、貴志・樋戸遺跡⁽⁷⁾、貴志遺跡⁽⁸⁾、下深田遺跡⁽⁹⁾などがそれである。

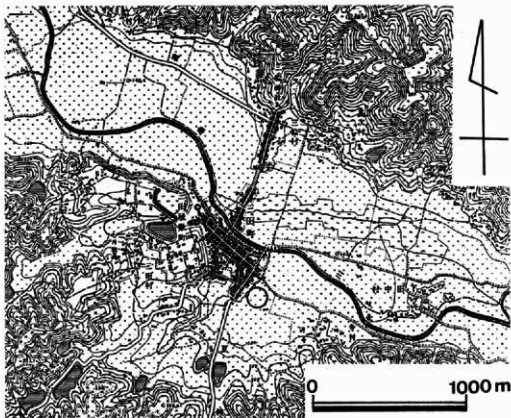
また、今回報告する対中遺跡も、都市計画街路工事に際し発掘された同様の遺跡である。

さて、一般に埋蔵文化財の調査の不十分な段階には、古墳を主とした山地や丘陵の尾根上などに立地する発見しやすい遺跡のみが目立されやすいが、調査が進展するにしたがって平野部に埋没している遺跡なども知られるようになってくる。このような点からすると、三田盆地における埋蔵文化財の調査は、第2段階に入りつつあるものと言えよう。

近年、発掘調査された平野部の遺跡のうち、三田盆地の地理的環境を考察する上で、桑原遺跡の調査は非常に重要である。それは、後に詳述するようにこの遺跡が、もっとも洪水の被害にあいやすく、しばしば湖が存在した場所とされる盆地の最も低い部分に立地するものだからである。すなわち、この場所に生活の痕跡が存在することは、盆地のほとんどのところで居住が可能であったことを示していると考えてよいのである。

〔註〕

1. 青野寿郎・尾留川正平編 (1973) 『日本地誌 第14巻 京都府・兵庫県』 二宮書店
2. 山口憲一郎編 (1975) 『日本図誌大系』 朝倉書店
3. 総理府統計局編 (1980) 『全国都道府県市区町村別人口概数』
4. 兵庫県教育委員会 (1986) 『桑原遺跡』
5. 兵庫県教育委員会 (1987) 『川除・藤ノ木遺跡現地説明会資料 I』
6. 三田市教育委員会 (1988) 『埋蔵文化財調査の記録 '81-'87』



第3図 明治中期の対中遺跡周辺 ○印 対中遺跡 (明治20年三田図幅・部分)

第2節 歴史的環境

昭和63年の北摂・丹波の祭典（ホロンビア'88）開催を控える三田市は、北摂・三田ニュータウン、近畿自動車道舞鶴線、福知山線複線電化、青野ダム建設などの開発が目白押しに実施されており、このような開発の飛躍的な増大の中にあつて、遺跡の発見・調査も飛躍的に増加している。

三田盆地は中央部を流れる武庫川を中心に、流域平野と右岸・左岸に位置する丘陵部から形成されており、遺跡の発見・調査は、丘陵地帯から平野部の時代へと変化している。

市街地の調査も例外でなく、当中遺跡は幹線道路及び再開発に伴つて実施された。周辺遺跡について、調査・発見の契機などを含めて記述する。

旧三田城（車瀬城）からは、有馬高校増改築工事に伴つて、中・近世の城館・陣屋に伴う遺構が見られる。城址の東、天神台地東端には古城遺跡があり、弥生時代中期の遺物を中心に、溝・ピットなどの遺構が見られ、遺跡の拡がりが想定される。同じ台地上に有名な天神遺跡が位置する。城址の南には、金心寺廃寺の推定地もあり、白鳳期の寺院址の実態が判明しつつある。稲田城居館址は、河川改修に伴い調査され、礎址が検出されている。

下所遺跡は園場整備に伴つて調査され、鎌倉時代の木棺墓が印を伴つて検出された。

下深田大山・奈カリ与・中西山・西山・奈良山などの遺跡及び古墳群は、北摂ニュータウン建設に伴い調査が実施され、下深田大山・奈カリ与遺跡では、弥生時代中期の集落が、中西山では横穴式石室墳が、西山では冠帽を副葬した前方後円墳などが見つかっている。現在、第2期調査期でもあり、ニュータウン予定地内の梶下ヶ谷・西山・平方などで調査が実施されており、縄文から弥生・古墳時代の集落及び竈跡が検出されている。

武庫川左岸では、6世紀末葉の横穴式石室墳の東野上古墳群や、埴敷古墳で著名な青龍寺裏山古墳群が見られる。川除古墳群は、学校建設に伴つて調査された。5世紀末～6世紀初頭の木棺墓墳であり、下の平野部には、武庫川河川改修に伴う調査で、60軒以上の弥生末～古墳時代初めの集落址が調査された。

福島長町遺跡は、新三田駅周辺の土地改良に伴い調査され、弥生中期後半の集落・土塚墓などが検出された。市道新設工事で発見された三輪宮ノ越遺跡は、三田駅の北、三輪明神のすぐ南に位置し、弥生中期から中世に及ぶ遺跡である。桑原遺跡は、弥生末～古墳時代初頭を中心とした集落であり、福知山線複線電化に伴う工事で調査が実施された。



第4図 周辺遺跡分布図

周辺主要遺跡地名表

- | | | | |
|------------|-------------|--------------|---------------|
| 1. 対中遺跡 | 2. 下田中古墳群 | 3. 墓山古墳 | 4. 金心寺廃寺推定地 |
| 5. 古城遺跡 | 6. 天神遺跡 | 7. 下深田大山遺跡 | 8. 稲田城跡輪址 |
| 9. 貴志遺跡 | 10. 貴志隠戸遺跡 | 11. 下所遺跡 | 12. 奈カリ与遺跡 |
| 13. 貴志古墳群 | 14. 奈良山古墳群 | 15. 西山古墳群 | 16. 平方遺跡・平方築跡 |
| 17. 中西山古墳群 | 18. 東野上古墳群 | 19. 青龍寺裏山古墳群 | 20. 福島長町遺跡 |
| 21. 大塚城跡 | 22. 川除古墳群 | 23. 川除遺跡 | 24. 川除・墓ノ木遺跡 |
| 25. 三輪古墳群 | 26. 三輪宮ノ越遺跡 | 27. 桑原古墳群 | 28. 桑原遺跡 |

第3章 対中地区

第1節 調査の概要

対中地区は武庫川右岸に広がる沖積地のさらに南東方向の段丘上に広がる遺跡である。今回の調査は三田幹線建設用地内に長さ40m、道路幅24mを発掘したにすぎない。

調査は三田幹線の計画基準杭を利用し、東西方向は1m毎に数字で表記し、5m毎に区分けのポイントを設定した。南北方向は1m毎にアルファベットをつけ、6m毎にD・J・P・V・A・Bの区分けポイントを設定した。そしてX・Y軸は5m×6mの範囲を1区画として、例えばD-5区とか、J-20区などと呼称した。

調査区における基本的な土層は第5図のようである。III層灰色細砂中礫混じりとIV層黒褐色極細砂に平安時代後期～鎌倉時代初頭の土器が多量に含まれており、V層暗灰黄色土上面に遺構が検出された。また、VI層浅黄色シルト質極細砂からは、弥生時代後期の土器が出土し、VII層黄色細砂をベースとしている状態で遺構が検出された。なお、遺構内の埋土の違いによって同一の建物か否かの判定はできないことが判明した。

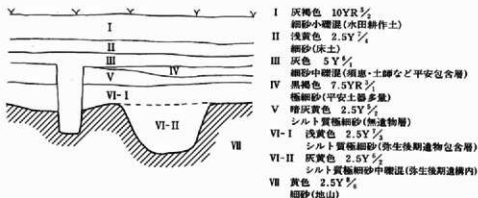
遺構の時期は近世(溝)、平安後期～鎌倉時代初頭(掘立柱建物、溝、井戸、墓、土壇など)、奈良時代(掘立柱建物)、弥生時代後期(土壇)であり、以下各々説明する。

第2節 近世の遺構と遺物

1. 溝

〔遺構〕 対中遺跡対中地区区内の近世の遺構としてはD-5区にて溝1が検出された。

溝1は幅60cm、深さ40cm長さ2m以上のもので東西方向に流れをもつものである。東端



第5図 対中地区 基本土層図

は溝の方向に対して直角に終る。出土遺物は、磁器などが若干出土した。

この他、J-0区にて、1.9m×1.8m、深さ1.0mの方形の土壌が検出された。土壌内には灰色シルトが堆積しており、直径10cm程度の大礫が多く混在した。これは段丘上の水田や畑に使用する灌漑用の野井戸の一種と考えられる。

〔遺物〕 3009は染付磁器碗の底部である。高台は細く比較的高く成形される。内・外面とも施釉され高台畳付の軸はカキ取られている。形態からみて、肥前系染付磁器の広東碗タイプのものに類似し、19世紀前半の時期が考えられる。

〔註〕

- (1) 大橋康二 1984 「肥前陶磁の交通と出土分布—発掘資料を中心として」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館

第3節 平安時代～鎌倉時代の遺構と遺物

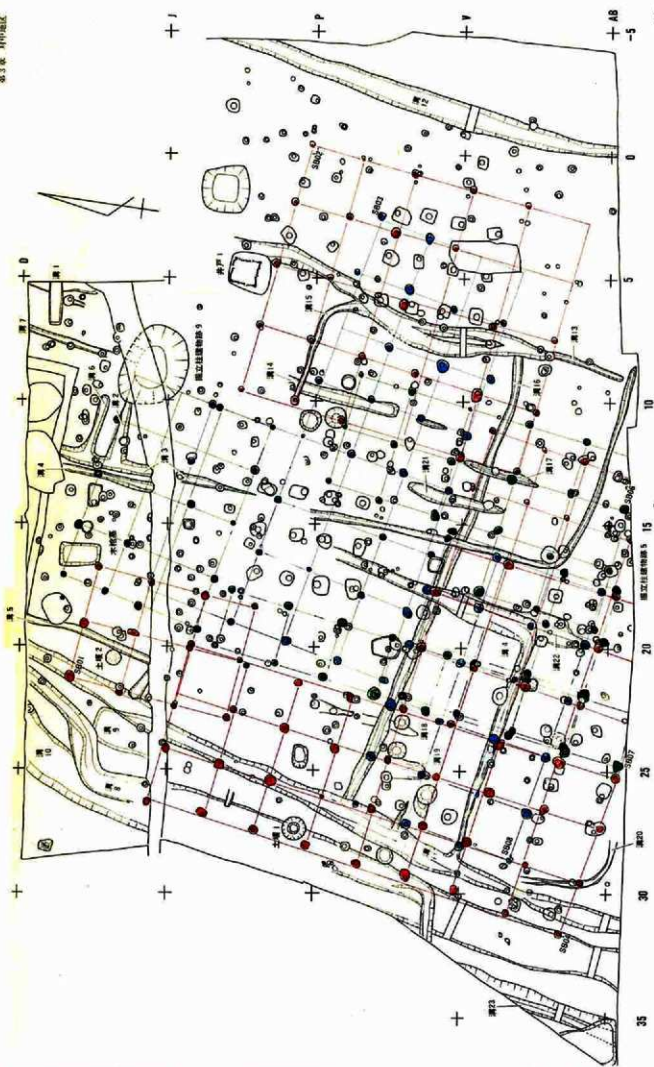
1. 掘立柱建物跡・包含層

対中地区における平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡は一覧表にあるように、9棟検出された。これらの掘立柱建物跡はⅢ・Ⅳ層の包含層を除去した段階で検出されたものであるが、遺構内に堆積した土色だけでは建物の想定・復元が困難で、ひたすら、平面的に柱間をさぐる状態で想定したものである。また、比較的短い時期に掘立柱建物が集中して建てられた様子で、方向性を同じくして幾重にも検出されたことから、建物の復元が困難であった。

また遺物については柱穴から出土したものはあるが、その柱穴から出土したことが建物の時期を決定できる資料としては扱えない。また実際に建物で使用されていた遺物はほとんど包含層中のものであると理解し、その遺物と合わせて考察したい。

第2表 対中地区 掘立柱建物跡 一覧表

| 掘立柱建物跡No | 間数 | 規模 | 方位 | 掘方 | m ² | 時期 | 備考 |
|----------|--------------|-----------|---------|-----|-------------------|-----|---------------|
| 掘立柱建物跡1 | 2×3 | 4.7×6.7 | N-6°-E | 円 | 32m ² | 平～鎌 | 北東隅柱が木棺蓋と切合 |
| 掘立柱建物跡2 | 4×5 | 10.5×11.9 | N-8°-E | 円 | 126m ² | 平～鎌 | 溝2・3・12が圓柱 |
| 掘立柱建物跡3 | 7×5 | 17.6×10.4 | N-12°-E | 円 | 147m ² | 平～鎌 | 溝5・16が南側雨溝か。 |
| 掘立柱建物跡4 | 8×8 | 18.5×17.8 | N-8°-E | 円 | 228m ² | 平～鎌 | 曲り家。溝13・23が付属 |
| 掘立柱建物跡5 | 3×4 α | 7.0×9.0 | N-10°-E | 円 | 48m ² | 平～鎌 | 部分的に柱が不明。 |
| 掘立柱建物跡6 | 3×5 α | 7.15×12.1 | N-8°-E | 円 | 68m ² | 平～鎌 | 溝13・15が付属か。 |
| 掘立柱建物跡7 | 1×7 | 2.35×17.3 | N-9°-E | 円 | 42m ² | 平～鎌 | 中央部で間隔が広がる。 |
| 掘立柱建物跡8 | 5×3 | 6.8×11.5 | N-10°-E | 円・方 | 78m ² | 平～鎌 | 一部柱不明 |
| 掘立柱建物跡9 | 5×3 | 8.8×6.0 | N-13°-E | 円 | 53m ² | 平～鎌 | 溝5が付属か。 |
| 掘立柱建物跡10 | 2×3 | 3.5×4.15 | N-1°-E | 方 | 15m ² | 奈良 | |
| 掘立柱建物跡11 | 2×3 | 3.6×4.1 | N-2°-E | 方 | 14m ² | 奈良 | |
| 掘立柱建物跡12 | 2×1 | 3.2×4.8 | N-6°-E | 円・方 | 19m ² | 奈良 | 南北1間4.8mと長い。 |



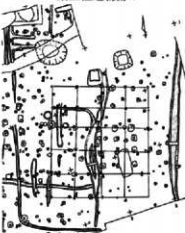
第15图 晋中地区 平遥新石器时代遗址平面图

掘立柱建物跡1 掘立柱建物跡1は調査区北西方向のD-15・20区、J-15・20区に位置する。この遺構は東西の梁間2間(4.7m)で、南北の桁行3間(6.7m)である。柱間は東西2.4m、南北2.2mである。建物は総柱建物で12本の柱からなり、その内の4本の柱底の木質が遺存していた。柱の掘形は直径25~40cmで、柱痕は直径15cm程度であった。この建物跡は北東の木棺墓と接しており、この建物の方が新しく木棺墓を切っていることが判る。なお、この建物に付属する庇や、雨落ち溝は検出されなかった。



掘立柱建物跡1

掘立柱建物跡2 掘立柱建物跡2は調査区東方のJ-(5)・0・5・10区、P-(5)・5・10区、V-0・5・10区にまたがって位置する。この遺構は東西の梁間4間(10.5m)で、南北の桁行5間(11.85m)である。総柱で、ほぼ正方形を呈する建物である。建物の柱間は東西2.5~2.7m、南北2.4~2.5mである。柱は総柱30本で構成されていると考えられるが南東の一部が不明である。柱の掘形は円形で、直径20~50cm、柱痕は12~15cm程度のものであった。この建物は井戸と接する位置関係にあり、また溝2・3・12が四方を取り囲むような状態である。これらの溝がこの建物の雨落ち溝であったのか、建物の区画溝であったのかは不明である。なお、柱穴の堆積土はⅢ・Ⅳ層などの土が混入しており統一的な土質は観察できなかった。



掘立柱建物跡2

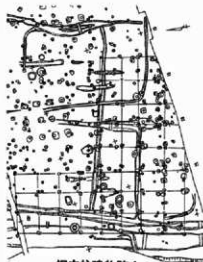
掘立柱建物跡3 掘立柱建物跡3は調査区中央のJ-10・15区、P-0・5・10・15・20区、V-0・5・10区にまたがって位置する。この遺構は東西の桁行7間(17.6m)で、南北の梁間5間(10.4m)の規模である。建物は東西に長い3間×7間で北東部に2間×3間がつくようなもので総柱と考えられる。建物の柱間は東西2.3~3.0m、南北2.0~2.3mで部分的に東西方向が半間で柱を持つ所がある。柱の掘方は円形で直径20~40cm、柱痕は15cm程度である。この建物は北西部の張り出しの柱が不明な所が多く、若干無理があるかも知れない。また溝16が建物の南に併行しており、溝5が西側に併行している。雨落ち溝の可能性もあろう。なお、柱穴の埋土はⅢ・Ⅳ層などの土が混入しており、色調による建物の柱穴を判断することは無理であった。



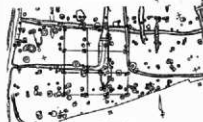
掘立柱建物跡3

掘立柱建物跡4 掘立柱建物跡4は調査区西方のD-25区、

第7図 掘立柱建物跡平面図-I



独立柱建物跡4



独立柱建物跡5



独立柱建物跡6



独立柱建物跡7

第8図 独立柱建物跡平面図-II

J-20・25区、P-20・25区、V-10・15・25・30区、AB-10・15・20・25・30区にまたがって位置する。この遺構は南北の梁間8間(17.8m)東西の桁行8間(18.5m)の規模であり、L字を呈する曲がり家である。建物の柱間は東西2.0~2.6m、南北2.2~2.4mである。柱は総柱と考えられるところから、61本の柱から成っているはずだが、部分的に不明な所がある。柱の掘方はいずれも円形で、直径25~40cm、柱痕は15cm程度のものであった。この建物に付属する溝としては位置的な関係から東に溝13、西に溝23が考えられよう。この建物の柱穴の埋土はⅢ・Ⅳ層である。

独立柱建物跡5 独立柱建物跡5は調査区の南西方向、P-15・20区、V-15・20区、AB-15区にまたがって位置する。この遺構は東西の梁間3間(7.0m)、南北の桁行3間(7.0m)の規模で総柱建物である。建物は正方形であるが、建物の切り合い関係が多く、南に続く可能性がある。建物の柱間は東西方向2.1~2.3m、南北方向は2.2~2.3mである。建物の柱は部分的に不明であり、柱の掘方は円形で、直径20~40cm、柱痕は12~15cm程度である。また建物の付属遺構は不明である。建物の柱穴15ヶ所のうち13ヶ所がⅣ層黒褐色土で2ヶ所がⅢ層灰色土の埋土であった。

独立柱建物跡6 独立柱建物跡6は調査区中央南方、P-5・10区、V-10・15区、AB-10・15区にまたがって位置する。この遺構は東西の梁間3間(7.15m)で南北に桁行5間 α (12.1m)の規模である。建物は西側の北寄りの柱が不明であるため、2間 \times 5間 α の建物の西側に1間 \times 2間を付けた様な平面形を呈する。建物の柱間は東西2.1~2.4m、南北2.2~2.5mである。柱の掘方は円形で、直径25~65cm、柱痕は12~20cmとばらつきがある。この建物の東と北側に位置する溝13・15は付属する遺構である可能性もある。また柱穴埋土はⅢ・Ⅳ層の土が混在する。

独立柱建物跡7 独立柱建物跡7は調査区中央南方のJ-15・20区、P-15・20区、V-20区、AB-20区にまたがって位置している。この遺構は東西の梁間1間(2.35m)、南北の桁行7間 α (17.3m)の規模であり、南北方向に細長い建物である。建物の柱間は東西2.35m南北2.2mが基本であるが、途中3.5mの間隔になる部分がある。門などの出入口に相当する所かも知れない。

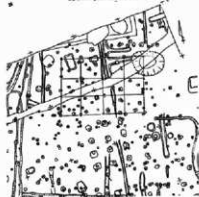
柱の掘方は円形で直径30~40cm、柱痕の直径は15cm程度である。この建物跡に関連する遺構は不明で、回廊などの遺構の可能性も考えたが、平面的に長く続く柱穴のみあたらなかった。

掘立柱建物跡 8 掘立柱建物跡 8 は調査区南西方向、P-15・20・25区、V-15・20・25区にまたがって位置する。この遺構は南北の梁間3間(6.8m)で東西の桁行5間(11.5m)の規模で、総柱建物である。建物は東西方向に長く、1ヶ所の柱は不明だが全体の規模がほぼ明確な建物である。柱の掘方は円形が大半で、直径25~35cm、柱痕は15~25cm、方形のものは僅かに1ヶ所で、掘方の一辺35cm、柱痕は15cmである。またこの建物に付属する溝などの遺構は不明である。この建物の柱穴23ヶ所のうち、14ヶ所がIII層灰色土、9ヶ所がIV層黒褐色土の埋土であった。

掘立柱建物跡 9 掘立柱建物跡 9 は調査区北方、D-5・10・15区、J-5・10・15区にまたがって位置する。この遺構は南北の梁間3間(6.0m)で、東西の桁行4間(8.8m)東西方向に長い建物である。建物は部分的に近世の溝などで掘削されているため、柱の不明な部分もあるが、ほぼ総柱建物であろう。柱の掘方は円形で、直径25~30cm、柱痕は15cm程度である。この建物の西に位置する溝5は建物の西辺の南北方向と併行に流れるもので、雨落ち溝或いは区画溝かも知れない。また柱穴埋土はIII・IV層の土が混在する。



掘立柱建物跡 8



掘立柱建物跡 9

第9図 掘立柱建物跡平面図-III



掘立柱建物跡全景

〔遺物〕 ここで示す遺物は掘立柱建物跡の柱穴とⅢ層～Ⅰ層の灰色細砂層及びⅣ層黒褐色極細砂層からの出土である。これらの遺物は掘立柱建物跡の時期を決定する上で、柱穴出土の遺物は混入が多く必ずしもその建物の時期を示すものとは言えないものが多い。また、柱穴が密集している所では掘立柱建物跡が明確に把握できなかったことから、混乱を避けるために一括したうえでタイプ別に分けて扱った。

土師器（1～235） 土器類の中では土師器が235点で全体の65%を示め、2位の須恵器104点29%を大きく離している。土器類の中でも土師器の占める割合がおおきい。

土師器には小皿、大皿、杯、托状皿、受皿、甕、小壺が出土している。特に皿や杯類については形式分類を行い説明をしたい。（第4表参照）

皿は大型品と小型品とに区別できる。小型皿の中には1段・2段ナデを施す皿の他、高台をもち扁平に開く托状皿がある。また口縁部が屈曲する受皿が存在する。

小皿Aタイプ 160・163・166はA1タイプの「て」字状口縁をもつ小皿である。口径は9.2～10.5cm、器高は1.0～1.5cmと扁平である。口縁部は著しく屈曲し、外方に突き出る。154～156・158・162・164・167・168はA2の「て」字状口縁の小皿である。口径は9.5cm前後、器高1.5cm前後である。口縁部はA1ほどではないが、屈曲する。外面の屈曲は強いナデへと変化する。157・159・161・165はA3の「て」字状口縁の小皿である。口径10.0cm前後、器高1.0～1.5cm前後である。口縁形態は屈曲が弱くなり、段がなめらかになる。「て」字状口縁の退化形態であろう。胎土はいずれも精製され、色調は褐色を呈する。

小皿Bタイプ 18・30・36・52～58・60・62・65・66はB1タイプであり、2段ナデが施された小皿である。口径は8.5～10.0cm、器高は1.5～2.3cmで小皿としては高い。Aタイプ同様で胎土は精製されており、色調は褐色や黄褐色を呈する。

小皿Cタイプ 5・45～51はC1タイプの1段ナデの小皿である。口径は8.8～10.5cm器高は1.5cm前後である。器形は体部に1段の屈曲部をもち、同時に1段ナデを施し、口縁にかけて外反、或は外傾する。底部は尖りぎみである。4・7・14・15・17・22・23・27～29・31～35・37・39～44・59・61・63・64・67はC2の1段ナデ小皿である。口径は8.2～10.0cm、器高は1.3～1.8cmとやや扁平である。口縁はナデが明確で段を持ち僅かに内彎し、底部は丸底を呈するものが多い。1～3・8～13・16・21・24・25・38はC3の1段ナデ小皿である。口径は8.0～9.5cm、器高は1.0～1.5cmである。口縁は内彎し端部は丸い。また1段ナデは弱くなり、稜は見えにくい。底部は丸底が多いが、25は凹んでいる。6・19・20・26はC4の1段ナデ小皿である。口径は9.0cm前後、器高は1.5cmである。口縁には面取りがあり、上方に尖る。また1段ナデも弱く口縁にかけて内彎する。

このタイプの小皿も精製された胎土を示すが、僅かに赤グサリ礫を含む土器も含まれ、色調は前者が褐色、後者は赤褐色を呈する。

小皿Dタイプ 93・109・110・123・129・152・153はD1タイプの糸切小皿である。口径は8.3～9.2cm、器高は1.2～1.5cmと扁平である。口縁はゆるく外反するものと強く外反するものに分かれる。いずれも糸切りされた底部が広く、口縁端部は丸い。136～151はD2の糸切小皿である。口径は8.0～9.5cm、器高は1.5cm前後である。小さく糸切された底部は僅かに高台状の段が残し、口縁は外反し、端部は細く、シャープな感じがある。68～78・80～87・90～92・96・97・101～106・108・111～113・116～119・121はD3の糸切小皿である。口径は7.8～9.5cm、器高は1.0～1.5cmと扁平である。口縁は外傾し底部は厚い。88・89・94・95・100・120はD4の糸切小皿である。口径は8.8～10.2cm、器高は1.2～1.5cmと扁平である。口縁は外傾し端部は丸く器壁は均一である。79・98・99・107・114・115・122・133～135はD5の糸切小皿である。口径は8.2～9.2cm、器高は1.5cmである。口縁は若干内彎し端部は丸く、器壁は厚い。124～128・130～132はD6の糸切小皿である。口径は9.0cm前後、器高は1.7～2.0cmと高い。口縁は僅かに外反し端部は丸く、器壁は全体に厚い。

このDタイプ小皿は、赤クサリ礫を含む胎土で、砂粒が目立ち、色調は赤褐色や黄褐色を呈するものが大半である。

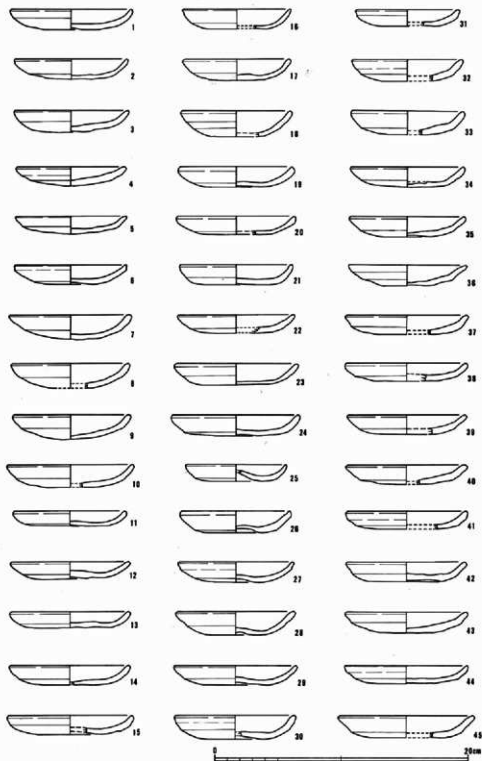
229～231、438はGタイプの托状皿である。口径は8.8～10.0cm、器高は2.0～2.5cmである。器形としては、大きく開いた皿部と糸切りされた高台からなる。229、230は口縁端が上方に立ち上がる。

232はHタイプの受皿である。口径は9.8cm、器高1.1cmと扁平なものである。体部から口縁にかけては大きく広がった後、端部で内側に屈曲するもので当遺跡ではこの1点しか出土していない。

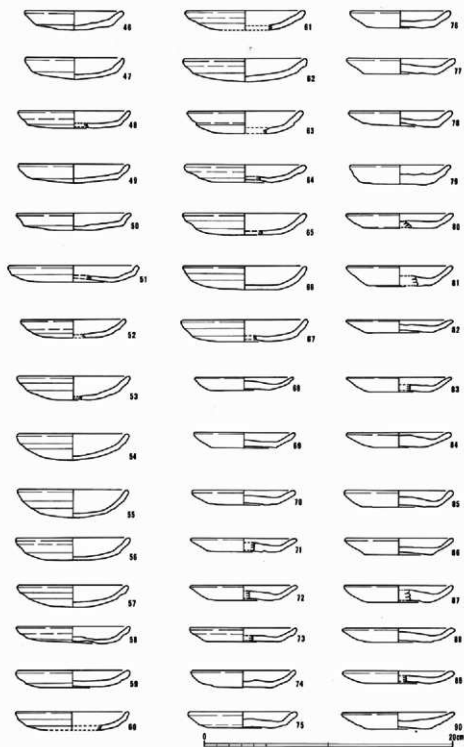
大型の皿としては手づくねのもので、6タイプに分類できた。

大皿Bタイプ 194はB2タイプの大皿である。口径15.3cm、器高は推定3.2cmである。また2段ナデ調整された手づくねの土器で、口縁は僅かに外反し器壁は薄く端部は尖る。173・179～182・185・186・188・190～193はB3の2段ナデ大皿である。口径は15cm程度器高は2.7～3.5cmで比較的高い方である。2段ナデは上下共しっかりナデられ、口縁は内彎し、端部は丸い。183・184・187・189はB4の2段ナデ大皿である。口径は13.5cmが1点あるほかは、15.0cmで、器高は2.0～2.5cmで低い。2段ナデの上は弱く、下が強い。口縁は内彎し、端部は丸い。このBタイプの大皿は胎土が精製され、色調は褐色を呈する。

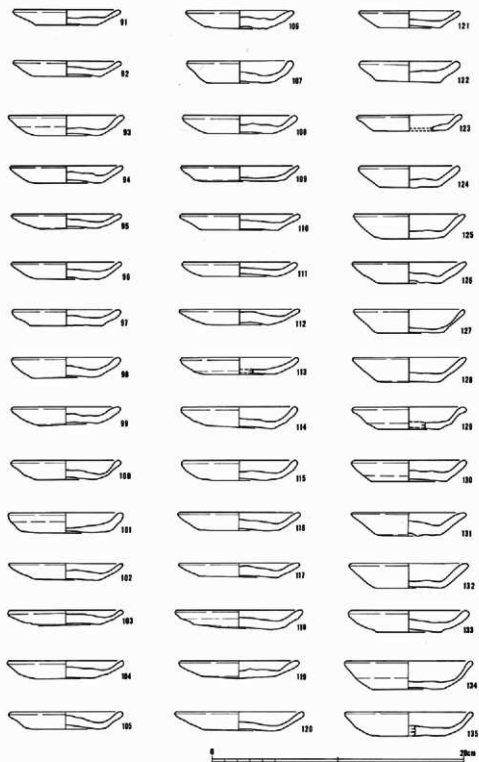
大皿Cタイプ 175・176・195～198はC5の1段ナデ大皿である。口径は14.5～16.0cm器高は2.5～3.3cmである。1段ナデにより稜が生じ、口縁にかけて僅かに外反する。端部は尖りきみで、器壁は薄いものが多い。この中で、197は口縁が屈曲し、体部も屈曲している。C5の中にあっても特殊な存在である。170～172・174はC6の手づくね大・中皿である。口径は13.0cm、器高は2.5～3.0cmの中型と、口径15.5cm、器高2.5～3.5cmの大型があ



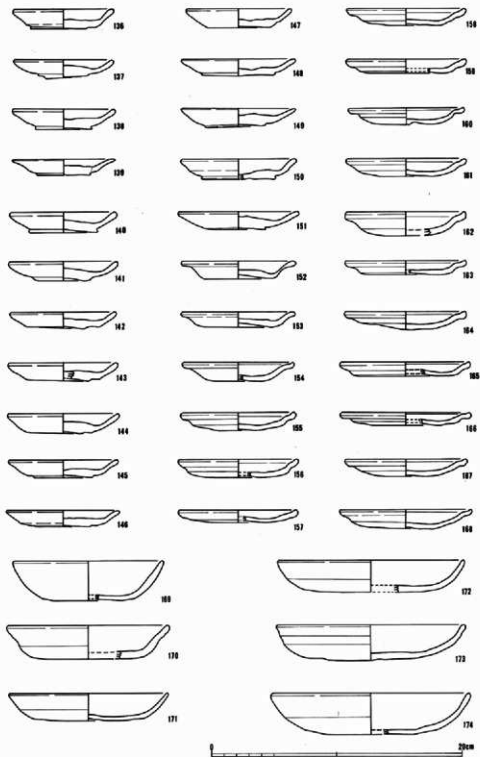
第10図 掘立柱建物跡・包含層 土師器-I



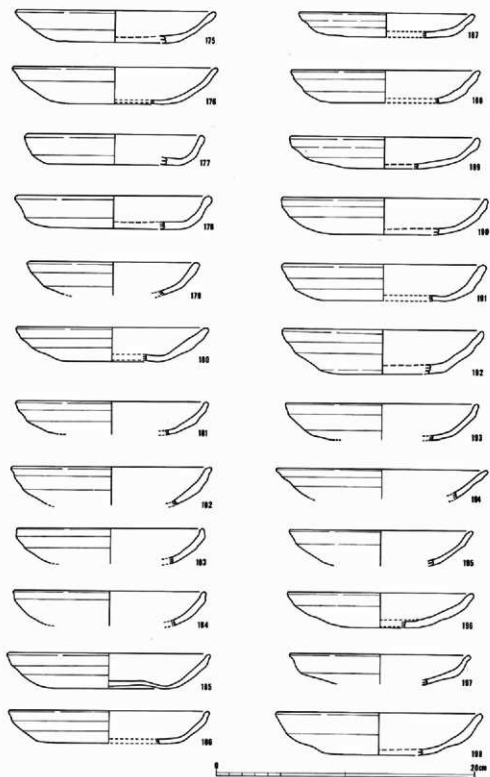
第11図 掘立柱遺物跡・包含層 土師器-II



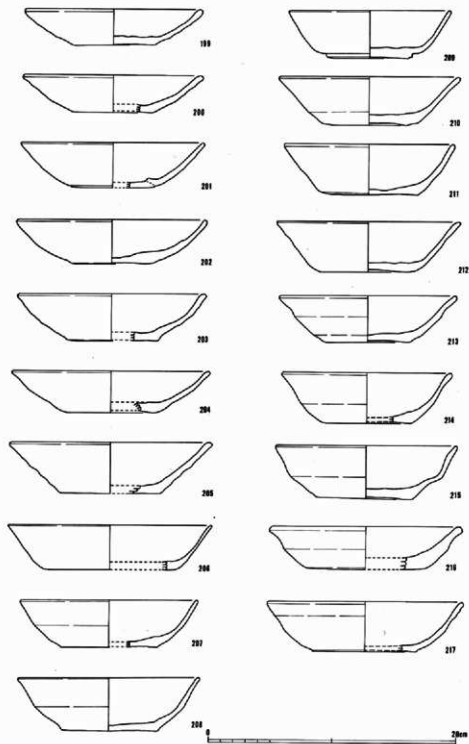
第12図 掘立柱建物跡・包含層 土師器-III



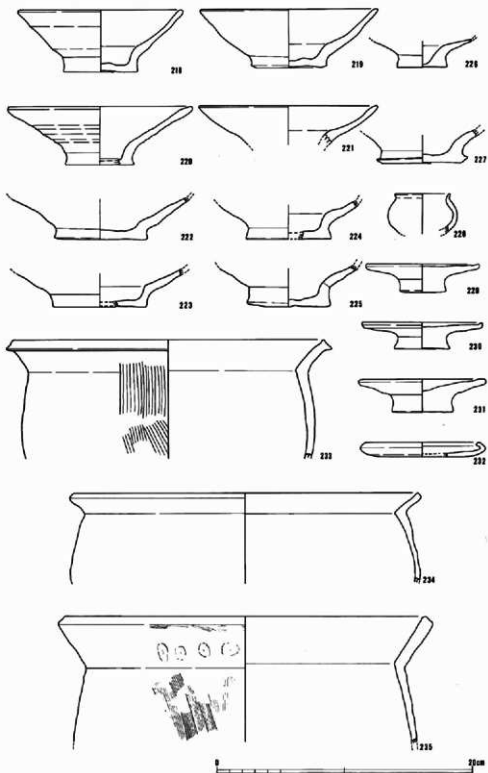
第13图 掘立柱建物跡・包含層 土師器-IV



第14図 掘立柱建物跡・包含層 土師器-V



第15图 掘立柱建物跡・包含層 土師器-VI



第16図 掘立柱建物跡・包含層 土師器-VII

る。1段ナデにより体部には稜があり、口縁が内彎し、端部は丸い。177・178はC7の手づくね大皿である。口径は14.0～15.0cm、器高は2.4cmである。1段ナデは弱く、稜線が僅かにある。口縁は直線的に開き、端部は面取りされる。

Cタイプの中・大皿も胎土は精製され、色調は褐色を呈する。

杯Eタイプ 215はE1タイプの杯である。口径は14.6cm、器高は4.2cmと高い。底部は段をもつ糸切りで、体部で屈曲し、口縁にかけて外反する。口縁端部はやや尖り、全体に器壁が薄い。207・208・214・216・217はE2の杯である。口径は14.0～16.0cm、器高は3.8～4.3cmで器高指数は高い。糸切りされた底部はしっかりして、体部中央付近に稜をもつ。口縁は僅かに外反し、端部はやや尖りぎみである。203・205・206・209～213はE3の杯である。口径13.0～16.5cm、器高は4.0cm前後である。底部は糸切りで、体部との境はなだらかなになる。口縁にかけては、多くはやや外反し、端部は丸い。199～202・204はE4の杯である。口径は15.0cm前後、器高は3.0～3.5cmであり、器高指数は低い。底部は糸切りで、口縁は大きく開き、内彎ぎみで、端部は丸い。

Eタイプの杯は胎土に赤グサリ礫が混じり、色調は褐色や黄褐色を呈する。

Fタイプの218～227は口径12.8～14.6cm、器高4.5～4.8cmであるが、226のような小型のものから、222の大型まで種々存在する。底部は糸切りで高台風の平底をもち、外観は高いように見えるが実際は体部の厚さと同様である。体部は外方に直線的に開く口縁を有する。内面の底部と体部の境には屈曲する段があるが、緩やかにカーブする。220・222・225・227がある。また体部外面にはナデによる段がみられる。

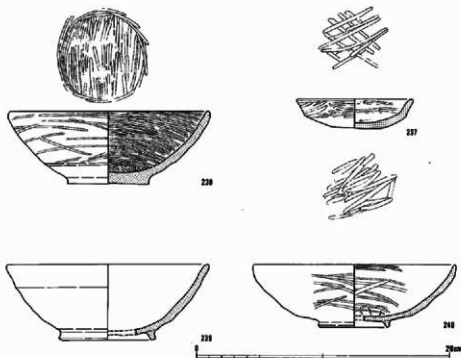
甕は口径25～30cm前後の破片である。233は口縁端が拡張されたもので、胴部最大径が上半にある。234は口縁が短く外傾し、内外共屈曲する段をもつ。235は口縁がやや内傾しながら上方に広がり、頸部外面には指押さえ痕が残っている。いずれも口縁に比べ、体部の器壁が薄く仕上げられている。

小型壺228は口径4.3cm、器高3.5cmの手づくね土器で、胴部中央に最大径をもち、短い頸部から口縁がつく。

これらの遺物については各掘立柱建物跡や包含層から出土しているため、時期幅は大きい。中でも古いと考えられるA1タイプ「て」字状口縁の土器は11世紀後半で、新しいと考えられるC4タイプは13世紀前半頃と考えられる。他のタイプはこれらと同時期或いはこの間に入るものであるが詳細は小結にゆずることとする。

瓦器・黒色土器 瓦器碗238はP-10区ビット34から出土している。口径15.6cm、器高5.7cmを測り、器高指数は37である。

この瓦器碗は、形態上・調整技法上他の遺構出土の瓦器碗といくつかの点で異なる特徴を有している。



第17図 掘立柱建物跡・包含層 瓦器

まず、体部は内彎気味に立ち上がり、端部を丸く収めているが、口縁部を強い横ナデ調整しないため、外面に段は認められない。底部は糸切りにより切り離され平高台である。高台高は0.5cmである。

暗文は、内面については大変密に上下2段にわたる暗文が施されているが、外面については、内面に比べて一部にしか施されていない。また、ミガキの単位についても内面に比べて太めである。見込みにおけるミガキは、他のミガキより太めで、平行方向に施されている。

瓦器碗239はP-20区のビット3から出土している。

口径15.8cm、器高5.9cmと深い碗形を呈し、器高指数は37である。体部は直線的に斜上方にのび、口縁部において強い横ナデ調整によりわずかに内側に屈曲し、外面には段が形成されている。器壁は比較的厚く、0.5cmを測る。高台は、断面方形のしっかりしたもので、外方に踏ん張り、内端面で接地している。高台高は0.6cmである。

この土器は内外面とも器表面の磨耗が激しく、暗文は観察できない。ヘラ状の圧痕が内外面に認められ、ミガキ調整が施されていたことは確実である。

瓦器碗240は、口径15.8cm、器高4.9cmを測り、器高指数は31である。

本遺跡出土の瓦器碗の中では最も浅い碗形を呈するもので、口縁部端部は指一腹分が弱

い横ナテ調整により内彎気味である。他の瓦器碗のように外面に明瞭な稜は認められない。内外面ともミガキ調整が施されているが、両面とも比較的粗い仕上げである。見込みにおいても格子状のミガキが認められる。

高台は、断面三角形を呈し、高台高は0.5cmである。

瓦器小皿237は、P-15区、ビット12から出土し、口径8.9cm、器高2.3cmを測る。

底部は不安定な弧状を呈し、口縁部は短く斜上方向に立ち上がり、端部を丸く収めている。口縁部は強い横ナテ調整により、外反気味である。底部・口縁部内外面ともミガキ調整が施されており、底部外面は平行方向、内面は格子目状、口縁部は内外面とも横方向である。特に、口縁部内外面のミガキ調整は良好に観察でき、その単位は細筋で密に施されている。

須恵器 最も多量に出土している所であるが、器種としては小皿、碗、鉢、甕のみである。中でも鉢、甕は1～2点のみであり、小皿、碗が圧倒的に多い。

小皿には、底部が突出するタイプと、底部と体部の境に明瞭な稜を持つタイプとに大きく区分できる。量的には後者の方が多い。前者は体部が内彎気味に立ち上がるが、後者には、内彎、外彎の両者が見られ一概に言えない。口径は8cm前後を中心に、大きいものでは9.2cmのものもある。器高は2cm前後で一定しているが、底径は5cm前後を中心として、ばらつきが見られる。

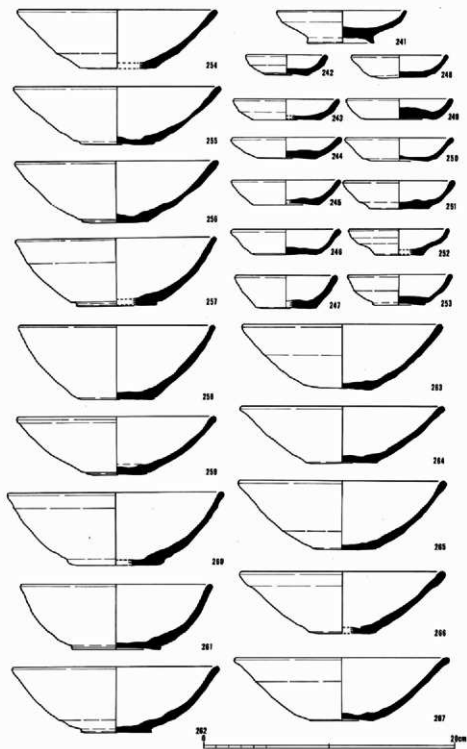
241・290は溝10でも見られた高台を持つ山茶碗である。

また、287は高台を持つタイプではあるが、口縁部が丸く仕上げられており、前者とは粘土・つくり共に異なる。山茶碗をまねたつくりの作品とも考えられる。

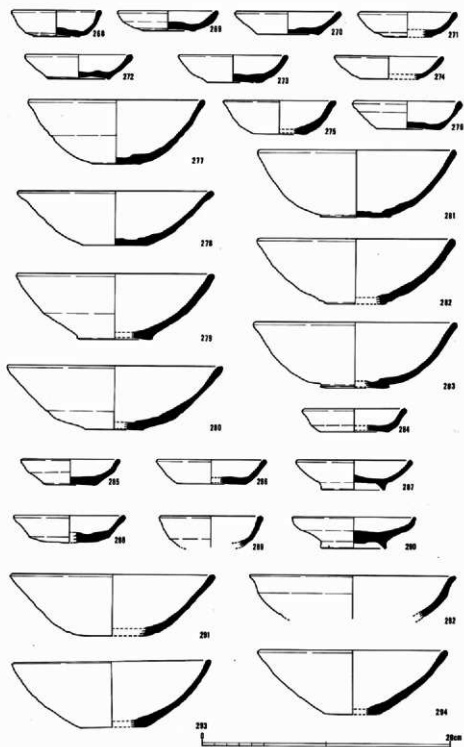
碗には、底部の突出の見られるタイプと、突出がほとんどなく、底部と体部の境に稜を持つタイプのもの、底部から丸味を持って体部へと続くタイプのものが見られる。全体的に体部は内彎気味に立ち上がる。おおよそ突出するタイプには、特に下腰れの傾向が強い。口径は15.6cmを中心に大きいのは17.2cmまで見られ、器高は5.2cmを中心に、低いものは4cmから見られる。底径では4.3～7cmまでばらつきが見られる。口縁端部の肥厚されているのが目につく。329はいわゆる片口の鉢であり1点しか出土していない。口縁端部が陥み出されたタイプであり、明瞭な稜を形成している。底部には少し突出の痕が同え体部にかけて内彎気味に立ち上がる。つくりは丁寧である。口径は18.2cm、器高7.2cm、底径7.7cmを測る。神出窯の製品と考えられる¹⁰⁾。

321は短い口縁が大きく外反する甕であり、口縁部内面に小さな凹みを持つ。体部外面には、肩部に幅の広い凹線が見られ、その両側を斜方向の平行タタキ目で調整している。口径20.6cmで肩が張る。神出窯の製品と考えられる¹⁰⁾。

磁器 345は白磁碗である。口縁部は玉縁状に肥厚する。内・外面とも施釉され、色調は

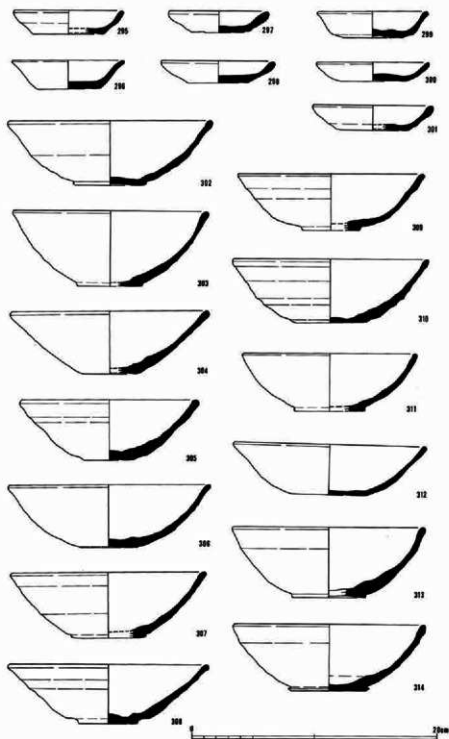


第18図 掘立柱建物跡・包含層 須恵器-I

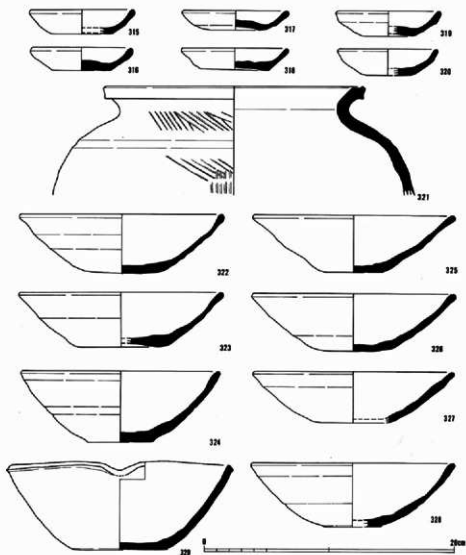


第18図 掘立柱建物跡・包含層 須恵器-II

第3節 平安時代—鎌倉時代の遺構と遺物



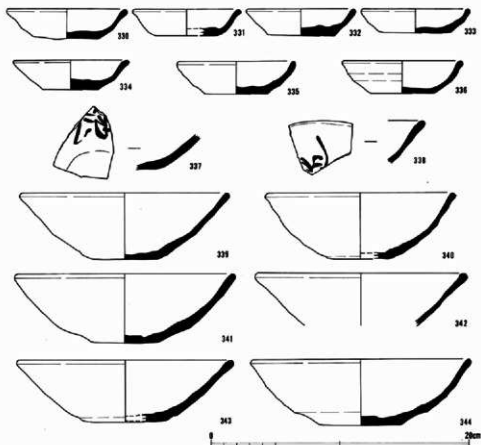
第20図 掘立柱遺物跡・包含層 須恵器-III



第21図 掘立柱建物跡・包含層 須恵器-IV

灰色を帯びた白色を呈する。器面には気泡及び釉垂れが認められる。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類白磁碗IV類に相当するものと考えられる。

346は白磁皿である。幅広く削り出しの浅い高台をもつ。体部はやや内彎気味に立ち上がり、体部中位で屈曲して直線的に外上方へ延びる。口縁端部はやや尖り気味に収まる。内面の底部と体部の界に、低い段をもつ。内・外面共施釉されるが、外面の体部下半以下は露胎である。色調は灰色を帯びた白色を呈し、器面には気泡及び細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類白磁皿II-1-a類に相当するものと考えられ



第22図 掘立柱建物跡・包含層 須恵器-V

る。

347は白磁皿である。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。内面の体部と底部の界に低い段をもつ。内・外面共施釉されるが底部外面は露胎である。底部外面には、ロクロから切り離した後ナデ調整が加えられる。色調は黄色味を帯びた白色を呈する。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類白磁皿V類に相当するものと考えられる。

348は白磁皿である。底部は平底で体部は内彎気味に立ち上がる。内面の底部と体部の界に沈凹線を廻らす。内・外面共施釉するが、外面の体部下半以下は露胎である。色調は黄色味を帯びた白色を呈し、器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から見て、森本分類⁽⁶⁾白磁平底皿III類に相当するものと考えられる。

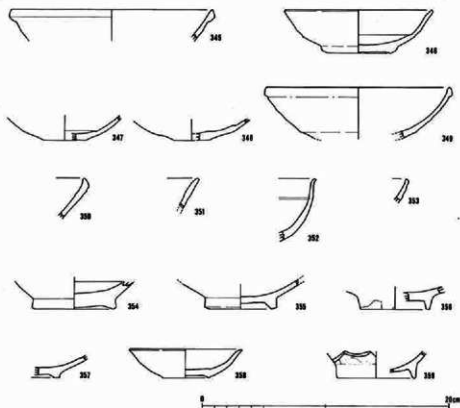
349は白磁碗である。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は比較的小さな玉縁状に成形する。内・外面共施釉され、色調はやや黄色味を帯びた灰白色に発色する。器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から、横田・森田分類白磁碗II類に相当するものと考えられる。

350は白磁碗である。口縁部は典型的な玉縁状を呈さず、上方につまみ上げた形態を呈している。内・外面共施釉され、色調は灰色を帯びた白色を呈する。器面には気泡が認められる。形態的には、横田・森田分類白磁碗IV類の範疇に属するものと考えられる。

351は白磁碗の口縁部である。口縁部は直立し、端部はやや尖り気味に収まる。内・外面共施釉され、色調は灰色を帯びる白色を呈する。器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類白磁碗V類もしくはV類に相当するものと考えられる。

352は白磁碗である。体部は内彎気味に立ち上がり口縁部は外反する。内面の体部中位よりやや上に1条の沈線を施す。内・外面共施釉され、色調は白色を呈する。器面には気泡が認められる。形態及び技法上の特徴から見て、横田・森田分類白磁碗V-1類に相当するものと考えられる。

353は細片で、器形等は断定出来ないが、恐らく、白磁碗の口縁部であろうと思われる。色調は黄色味を帯びる灰白色を呈し、器面には細かい貫入が認められる。



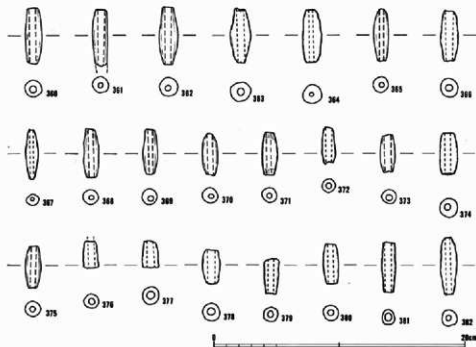
第23図 横立柱遺物跡・包含層・溝 陶磁器

354は、白磁碗の底部である。底部の削り出しは浅く、器肉は厚い。施釉は内面のみで、外面は露胎のままである。色調は黄色味を帯びた灰白色を呈し、器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類白磁碗IV-1類に相当するものと考えられる。

355は白磁碗の底部である。高台は外面を垂直に内面を斜めに削り出す。施釉は内面のみで外面は露胎である。外面露胎部では篋削り調整が認められる。色調は灰色を帯びた白色を呈する。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類白磁碗II-1類に相当するものと考えられる。

356は白磁碗の底部である。断面台形の比較的細く高い高台をもつ。高台壘付及び底部外面（高台裏）以外には全て施釉され、色調は白色を呈する。器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から、横田・森田分類白磁碗IV類に相当するものと考えられる。

357は白磁皿の底部である。幅広で削り出しの浅い低い高台をもつ。内・外面共施釉されるが、外面の体部下半以下は露胎である。色調は灰色を帯びた白色を呈し、器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から、横田・森田分類白磁皿II類に相当するものと考えられる。



第24図 掘立柱建物跡・包含層 土器

358は白磁皿である。底部はわずかに高台状に削り出す。全体的に器壁は薄く、体部から口縁部にかけては薄く成形される。内面の体部と底部の界に低い段を有する。内・外面とも施釉されるが、底部外面には施釉されない。

釉調はやや青味を帯びた灰白色を呈し、器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴からみて、横田・森田分類白磁皿V類に相当するものと考えられる。

土製品 土製品としては土鉢がある。土鉢は23点出土しており土師質360～376と須恵質377～382がある。形態としてはいずれも胴部にふくらみもち、中心に穴をあけ紡錘形をした管状土鉢である。土鉢の長さは3.0～4.5cm、重量は5g～9gに納まる。

対中遺跡の北側には武庫川が流れており、その他の小河川においても、このような土鉢をつけた漁網によって漁をしていたことが考えられる。

石製品(S1) 石製品としては温石1点のみが出土した。この温石は滑石製の石鍋を加工したもので、7.0cm×6.0cm、厚さ1.5cmをはかる。中央寄りに径8mmの穿孔がある。また上端と図の左辺は再利用時に磨製された面が残っている。内外の整形はノミ状工具が使用されたことをうかがわせる痕跡が明確にしている。

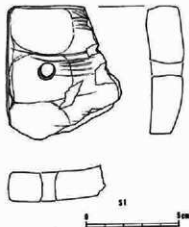
この温石は滑石製の石鍋であるが、おそらく、縦型の耳をもつタイプと考えられ、石鍋の古い様相を示す。この石鍋の制作地として長崎県西彼杵郡の滑石の岩石地帯が知られており、ホグット製作遺跡では多くの石鍋未製品が発見された。この温石はおそらく西彼杵半島で製作された石鍋が当地方まで流通し、破損した後は温石として再利用されたものと思われる。温石は当時、石を温めて“カイロ”として使用されたことが『大鏡』第2巻に記載されている。

兵庫県下の温石出土例は龍野市福田天神遺跡⁽³⁾、揖保川町宝林寺北遺跡⁽⁴⁾、揖保郡太子町前山出土例⁽⁵⁾、兵庫県山崎町菅野遺跡⁽⁶⁾などがある。

2. 溝

対中地区における平安時代～鎌倉時代の溝は23本にのぼる。いずれも、Ⅲ・Ⅳ層の包含層を除去した段階で検出されたもので、掘立柱建物跡などの遺構と同じ検出面である。

溝には明らかにコーナーをもつものや、直角方向に枝分かれするものなどがあることから、掘立柱建物跡に伴う雨落ち溝や、区画を意味する溝などがあると考えられる。その他、



第25図 包倉層 温石

集落を区画するための溝、或いは、排水溝など種々の用途を考えねばならない。

それでは各々の溝を説明してゆくが、建物跡との位置関係は全体図を参照されたい。

溝2 この溝は調査区中央北方のD-10区で検出された。溝の幅は最大80cmで東端は30cmと細くなる。深さは8cm、長さは2.5m以上のもので、東は土壌によって掘削されている。土壌内の埋土はⅢ層灰色土であった。流れは東西方向であり、溝3と直角の関係にある。また溝3と通じて、溝6と併行している。掘立柱建物跡2の北辺の雨落ち溝の可能性がある。

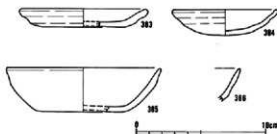
遺物としては須恵器、土師器が若干出土したものの、図示しえるものはなかったが、平安時代末～鎌倉時代に比定できる資料が存在する。

溝3〔遺構〕 溝3は調査区中央のD-10区～V-15区にかけて南北方向に延びた後、東に直角方向に曲がり、AB-5区まで延びる溝である。溝の幅は30～50cm、深さ18cmで埋土はⅢ層灰色土やⅣ層黒褐色土が確認された。前述したが、溝3からは、溝2、溝6が直角方向にとりついている。また溝12が東端に位置するが、溝3南北方向とは併行している。

掘立柱建物跡2を囲むように溝2・3・12が存在することから、溝2同様、雨落ち溝の可能性もある。

〔遺物〕 溝3からの出土遺物は土師器が3点図示できたのみで、その他、須恵器の細片が若干出土したにすぎなかった。

土師器 (383～385) 383・384はB1タイプの小皿である。383は口径



第26図 溝3 土師器・磁器

は口径8.2cm、器高2.0cmで、底部は小型で丸い。385はタイプ不明の杯で、口径12.0cm、器高3.3cm、体部から口縁にかけて僅かに内彎している。

磁器 386は白磁皿である。体部下半はやや屈曲し、口縁端部はやや尖り気味に収まる。比較的薄手に成形され、色調は乳白色を呈する。口縁部のみの残存で詳細は不明であるが、形態及び技法上の特徴から、横田・森田分類の白磁皿類に相当するものと考えられる。

溝4〔遺構〕 溝4は調査区の中央、D-10区～V-15区にかけて南北方向に延びた後、西に直角方向に曲がりV-25区で溝11に合流するものである。溝の幅は30～100cm、深さ10～13cmで、埋土にはⅢ層灰色土及びⅣ層黒褐色土がある。溝4の東西方向西端は溝11と直角方向に合流するものと考えられる。しかし、この溝に対応すると考えられる掘立柱建物跡の柱列は考えられなくもないが、確定的でない。

〔遺物〕 溝4出土の遺物として土師器、瓦器、須恵器、土鍾が出土した。その他金属製品として青銅容器片（第89図M1 詳細は135ページ）1点が出土した。

土師器（387～416） 土師器の器種は小皿・大皿と杯によって構成され、他の遺構に比べて図示できた個体が多かった。

407はA1タイプの「て」字状口縁の小皿で、口径10.2cm、器高1.7cm、屈曲した口縁は外に突き出て、端部がつまみ上げられる。404～406はA2の「て」字状口縁の小皿で、口径9.5cm、器高1.7cm、口縁屈曲部は強くナデつけられる。内面の段もしっかりしている。

408はB1の2段ナデ小皿である。口径は9.2cm、器高1.6cmである。

A・Bタイプ小皿は胎土は精製され色調は褐色を呈する。

403はD1の糸切り小皿である。口径9.2cm、器高1.3cmと扁平で、口縁は外反し、端部は鋭い。387～397・401はD2の糸切り小皿である。口径は8.0～9.2cm、器高は1.2～15cmと扁平で、底部の痕跡を残し、口縁は外反し、端部は鋭い。いずれもD2タイプの良好な一括資料である。398～399・402はD3の糸切り小皿である。口径は8.5～9.3cm、器高は1.3～1.7cmである。底部が厚く、口縁は398が内彎、399・402は外反する。400はD5の糸切り小皿である。口径は8.8cm、器高1.8cmで、底部が厚く、口縁は内彎する。

Dタイプの小皿は、胎土中に赤グサリ礫を含み、色調は赤褐色を呈する。

410はB3タイプの大皿である。口径14.2、器高2.8cmで、体部は2段ナデ手法で底部は丸く仕上げられている。

411はタイプ不明の杯である。口径13.2cm、器高3.5cmで底部と体部の境はやや丸い。

412～415はE2タイプの杯である。口径は13.8～15.3cm、器高3.5～4.0cm、体部中央に稜をもち、口縁にかけて僅かに外反する。414は特に典型的なE2タイプである。

416はFタイプの杯である。体部上半は失われているが大きく開くものだろう。

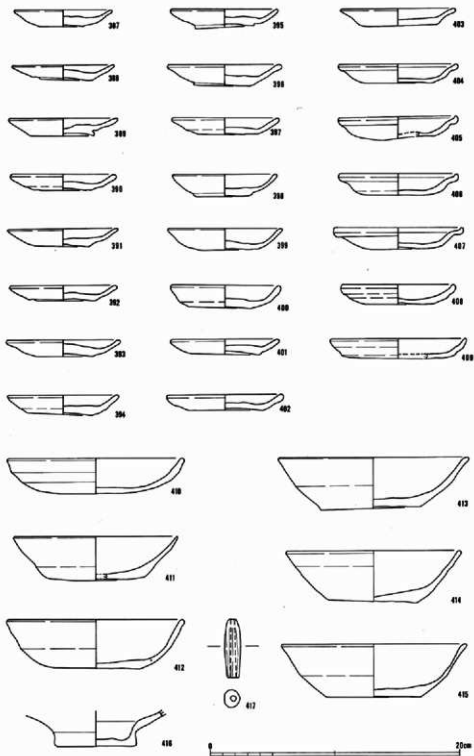
瓦器・黒色土器 瓦器碗3個体(419～421)、瓦器小皿1個体(418)、黒色土器1個体(236)が出土している。

瓦器碗 3個体とも形態的・調整法の特徴において共通する点も多く認められる。一方、細部において異なる点も認められる。

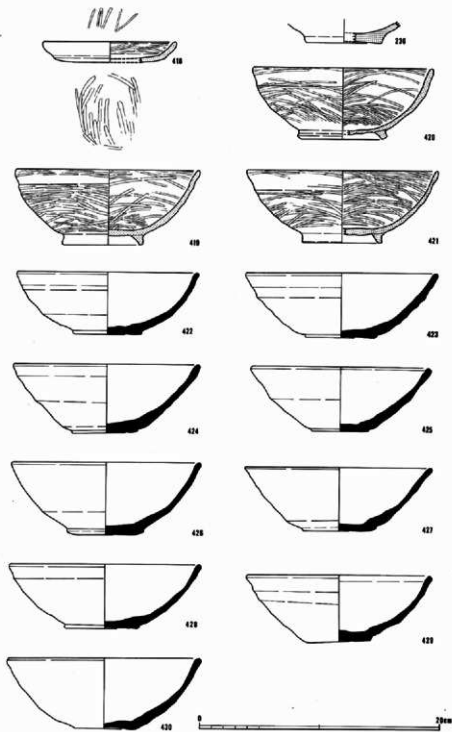
421は、口径15.8cm、器高6.0cmを測り、器高指数は38である。

体部は深い碗形を呈し、口縁部端部指一腹分は強い横ナデ調整により仕上げられ、外面は明瞭な段を形成する。器壁は0.3cmと薄く仕上げられている。底部は、幅0.4～0.5cmと重厚で、断面方形を呈する輪高台である。高台は、外方に踏ん張り、高台高は0.7cmを測る。

体部内外面にはヘラミガキ調整が施されている。内面は比較的密に施されているが、外面については、かなり粗い仕上げで、未調整部分が目立つ。ミガキの単位は比較的細筋で、丁寧に施されている。見込みにおいても一定方向のミガキ調整が施されているが、土器自



第27図 溝4 土師器・土鏡



第28图 清4 瓦器・黑色土器・須恵器

体の残存状況がよくないため、詳しくは観察できない。

419は、完形の土器である。口径15.1cm、器高6.2cmを測り、器高指数は41である。

体部は421同様深い碗形を呈するが、口縁部端部は強い横ナデ調整により明瞭に屈曲している。外面の段も明瞭である。また、421と比べて器壁が厚く仕上げられ、0.5cmを測る。底部は、421同様、幅0.5～0.6cmと重厚な断面方形の輪高台である。高台は、外方に踏ん張り、高台高は0.8cmを測る。

内外面とも横方向のミガキ調整が施されているが、421とは逆に外面のほうが若干密に施されている。個々のミガキは比較的丁寧に施されているが、幅が0.2cmと太めである。

見込みにも一定方向のミガキが施されている。個々のミガキは体部に比べて太く、それぞれが短いタッチで雑に施されている。

420は、約半の残存状況であるが、口径14.8cm、器高5.9cmを測り、器高指数は40である。

421・419同様、深い碗形を呈するが、口縁部端部における横ナデによる屈曲は明瞭ではなく、外面にわずかに段が認められる程度である。器壁は、底部からの立ち上がり部においては薄く仕上げられ0.3～0.4cmであるが、横ナデを施された部分においては0.5～0.6cmと対比的に厚くなっている。

高台は、他の瓦器碗同様、厚さ0.6cmと重厚な断面方形のものである。ただ、高台高が0.5cmと若干低くなり、内端面で接地している点において他と異なる。

内外面に横方向のミガキ調整が施されている。両面とも同程度の密度で施されているが、他の瓦器碗に比べて全体的にむらが目立つ。個々のミガキそのものは比較的丁寧で細筋である。見込みにおいても、一定方向のミガキが観察される。個々のミガキについては、短いタッチで施されているのが特徴である。

以上3個体の瓦器碗について観察してきたが、細部においては個体差が認められたが、碗形の深い体部である、重厚でしっかりした高台である、内外面と見込みにミガキを施すという3点において共通しており、ほぼ同時期の資料と考えられる。

瓦器小皿418は平底の底部から斜上方にわずかに内彎気味にのび、端部を丸く収めている。口縁部の器壁は比較的厚く仕上げられている。

口縁部内面には、横方向のミガキ調整が施されており、ミガキの単位の幅は0.15cmと瓦器碗のそれよりも細めである。底部はへらおこしによっている。

個々のミガキは比較的丁寧であるが、密には施されていない。また、底部内外面にもミガキ調整が施されており、内面はジグザグ状のものである。外面については、ミガキが施されていることは観察できるが、その単位・方向等についてはまでは判読できない。なお、口縁部外面については、ミガキは観察できなかった。

黒色土器 236の1個体で、底部のみである。底部は平高台で、糸切痕が認められる。内

外面とも黒色であるが、暗文については器面の磨耗が激しく観察できない。

須恵器 椀は底部に突出が見られ、体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部付近で外反気味に終るタイプである。422～425は体部中央付近に稜を持つものである。底部は糸切り未調整である。

口径は15.8cmを中心に15～16cmの間に、器高は5.3cmを中心に5.2～6cmまで、底径は6cm前後となっている。430は底部に突出が見られない。底部内面の凹凸ものも見られる。

土製品 土製品として土鍾417がある。長さ4.6cm、径1.2cm、重量6gの完形品で端部はヘラミガキされている須恵質の管状土鍾である。

溝5 溝5 調査区北方のD-15区～D-20区にかけて南北方向に延びる溝である。溝の幅は30cm、深さ5cmで埋土はⅢ層灰色土であった。溝5と密接な関係をもつ溝はないが、南に同方向に延びる溝18は方向からみれば同一溝の可能性があろう。また掘立柱建物跡3の西辺に位置し、溝18が溝5の延長と仮定するならば、雨落ち溝の可能性もあろう。

遺物としては、須恵器・土師器の小片が出土したのみであった。

溝6 溝6は調査区北方のD-10区で検出された。溝は東西方向に2.4m延び、西端は溝3と直角方向にとりつく。東端はD-10区内でおさまっている。溝は幅30～50cm、深さ6cmで埋土はⅢ層灰色土が入っていた。この溝に関連する溝2・3の他、掘立柱建物跡などの遺構は不明である。

遺物には須恵器・土師器の小片があったが、図示しえるものはなかった。

溝7 溝7は調査区の北東方向のD-5区に位置する。溝の幅は20～30cm、深さ7cmで南北方向に延び、埋土はⅢ層灰色土が入っていた。南側については削平が著しく、延長部には、その溝を追えなかった。またこの溝と関係する掘立柱建物跡などの遺構は、調査区の隅ということもあり、不明であった。

遺物としては土師器の小片が出土したのみであった。

溝8〔遺構〕 溝8は調査区西方のD-20・25区J-20・25区、D-25・30区にかけて南北方向に延びた後、西方向に曲がっている。溝の幅は50～110cm、深さ30cmで、埋土はⅢ層灰色土であった。この溝8は溝10と切り合い関係をもち、溝8が新しいことが判明した。また掘立柱建物跡4の西端の柱穴群と切り合い、掘立柱建物跡4が新しいことが判明した。

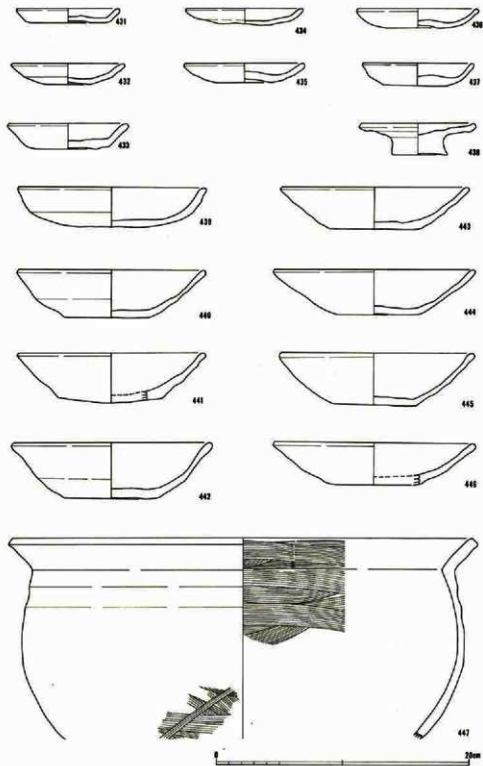
〔遺物〕 溝8出土の遺物として土師器、須恵器が出土した。小規模な溝であるが、一括品としての遺物が出土した。

土師器(431～447) 土師器の器種には大皿、小皿、托状皿、杯、甕によって構成されている。

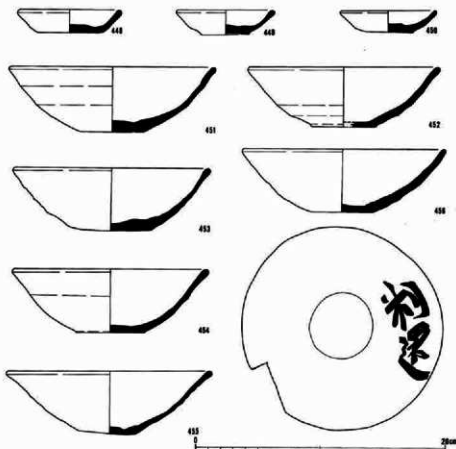
432はB1タイプ小皿である。口径9.0cm、器高1.6cmで、2段ナデ手法がうかがえる。

431はD3の糸切り小皿である。口径は7.1cm、器高1.1cmで、小型で口縁はたちぎみであ

第3節 平安時代～鎌倉時代の遺構と遺物



第29図 溝8 土師器



第30図 溝 須恵器

る。434～436はD 4の糸切り小皿である。口径は9.5cm前後、器高は1.2～1.5cmで底部から口縁はなだらかである。437はD 5の糸切り小皿である。口径は8.8cm、器高は1.8cmで底部の器壁は厚い。433はD 6の糸切り小皿である。口径は9.5cm、器高1.2cmで、口縁が外反し、器壁は厚い。438はGタイプの托状皿である。口径9.2cm、器高2.5cm、口縁端部が僅かに持ち上げられている。

439はB 3タイプの大皿である。口径15.0cm、器高3.1cmで1段ナデア手法で整形されたもので精製された胎土をもつ。

440～442はE 2の杯である。口径は15.0cm前後、器高は3.5～4.5cmで、いずれも体部中央付近に稜をもつ。445はE 3の杯である。口径15.2cm、器高は4.0cmで口縁にかけて僅かに内彎する。443・444・446はE 4の杯である。口径は15.0～16.0cm、器高は3.4cm前後で器高指数は低い。

447は大型の甕破片である。口径37cm、頸部から大きく開いた口縁部となる。外面上半に

は指ナデによる凹凸がみられ、下半には不定方向のハケ目が残る。

須恵器 小皿は底部が突出気味に稜をもつ449と、平底から稜を持って体部へと続く448・450が見られる。前者の底径は小さいが、器高はさほど変わらない。底部は糸切り未調整のままであり、口縁端部は丸く納められている。

柄は底部の突出がほとんどなくなり、平底から稜を持って、内彎気味に体部の立ち上がるタイプである。口径15.4cm、器高5cm、底径5.1cmを中心に、底部は糸切り未調整のままに終っている。器高はほぼ一定しているが、455のように口径が大きく、底径の小さなものも見られる。口縁端部が肥厚されている453～455は、体部の器壁は薄い。

456は外面に墨書が見られる。

溝9〔遺構〕 溝9は調査区の北西部のD-20区に位置し、南北方向に検出された。幅は1.6m、長さ2.5m以上で深さは15cmである。埋土は茶色土である。この溝の南方では溝が削平された様子で、検出されなかった。しかし検出状況から、あまりに浅いことから、溝として機能したかどうかは不明である。

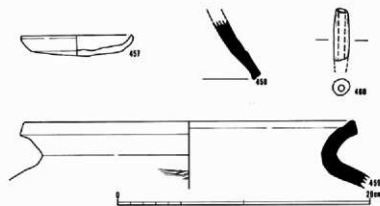
〔遺物〕 溝9からの遺物としては土師器、土製品、須恵器が少量ある。

土師器 土師器は457のC3タイプの小皿がある。口径8.8cm、器高1.6cm、体部に1段ナデ手法を用い、口縁は内傾している。

土製品 土製品として460の土鏝がある。長さ4.1cm、最大径1.3cmの破片で、紡錘形を呈した須恵質の円管土鏝である。

須恵器 458は器台の脚部と考えられる。外反する脚部端部の端部を拡張し、垂直に踏ん張るものであり、残存部で1条の沈線を認めることができる。

459は腰口縁部付近の破片である。短く外反する口縁の上端を上方に突き出している。体部外面は横方向の平行タクキメによる調整が認められる。三田周辺地域の生産品であろう。



第31図 溝9 土師器・須恵器・土鏝

溝10〔遺構〕

溝10は調査区西方の、D-20・25区、J-25、P-25・30区、V-30区にまたがり、南北方向に流れていることがわかる。溝幅は1.8～2.0m、深さ40cmで南北方向に続いている。

埋土はⅢ層灰色土が堆積していた。この溝はほぼ直線的に掘られたもので、その規模もほぼ均一な状態であることから、建物群の西端を区画する溝である可能性が高い。また溝8と切り合っているが、溝8より古いことが判明している。

〔遺物〕 溝10からの遺物には土師器、瓦器、須恵器がある。溝出土の遺物としてはその量は多い。

土師器 (461~496) 土師器の種類には小皿・大皿・杯・高杯によって構成されている。461・462・470は1タイプの2段ナデ小皿である。口径は7.5~9.5cm、器高は1.5~1.8cmで、461・462の器高指数は高い。464・466~469・473はC2の1段ナデ小皿である。口径8.8~9.8cm、器高は1.3~1.7cmで、ナデは強い。463はC3の1段ナデ小皿である。口径8.8cm、器高1.4cmで口縁は内彎し、端部は丸い。

484はD1の糸切り小皿である。口径8.8cm、器高1.3cmで、口縁は大きく外反する。

465・471・479はD3の糸切り小皿である。口径は9.2cm、器高は1.3~1.6cmで底部はやや厚く、口縁は内彎ぎみである。472・474・476・480・481はD4の糸切り小皿である。口径は9.0~10.8cm、器高1.5~1.7cmである。口縁は外傾し、器壁は均一である。477・478・486はD5の糸切り小皿である。口径9.0cm、器高1.5~2.0cmで、口縁は内彎し、器壁は厚い。482・483・485はD6の糸切り小皿である。口径は9.5cm前後、器高は1.6~2.0cmで高く、口縁は外反し、器壁は厚い。

487~489はC6の1段ナデの大皿である。口径は13.3~15.5cmで、器高は2.6~3.6cmである。ナデは強く、口縁は僅かに内彎し、端部は丸い。492・494はE3の杯である。492は口径15.0cm、器高4.0cmで体部上半で僅かに屈曲する。494は口径16.3cm、器高4.2cmで、口縁が僅かに外反する、490・491・493はE4の杯である。口径は15.2cm、器高は3.2~4.0cmで、口縁は外傾する。

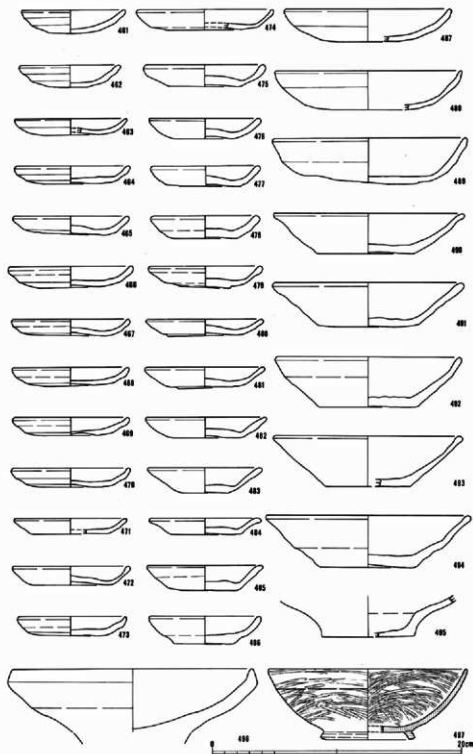
495はFタイプの杯である。口縁部はなく破片ではあるが、口縁が開く大型のタイプであると考えられる。

496は高杯の杯部である。杯部の口径19.3cm、深さ4.7cmで杯部はやや深い。器壁は厚く口縁端部は上方につまみあげられている。当遺跡出土の高杯はこの1点のみであり、同時期の他遺跡資料中にも少ないものである。

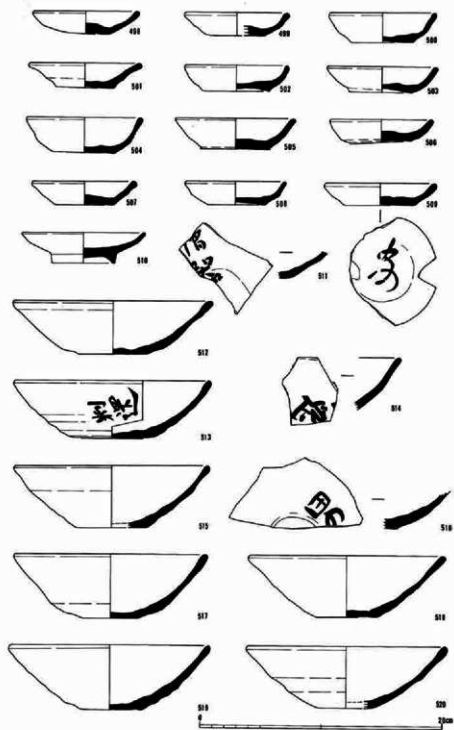
瓦器 497の瓦器碗が1個体出土している。口径15.8cm、器高5.6cmを測り、器高指数は35である。

高台は、重厚な断面方形を呈し、外方に踏ん張り内端面が接地する安定感がある。

体部外面の整形は指押さえ調整によるが、丁寧でなく、指頭圧痕が顕著である。口縁部は強い横ナデ調整により外面に段が認められる。また、その段に対応する内面においては、凹線とまではいかないがわずかなくぼみが認められる。形態的に器高が高く、深い碗形を



第32図 溝10 土師器・瓦器



第33图 清10 須恵器

呈する。

体部内外面、見込みに暗文が施されている。まず内外面のヘラミガキであるが、個々の単位がやや太めである。見込みのミガキは、平行方向である。底部の残存状態が良好でないため、そのミガキについても詳細に観察できないが、口縁部と同程度の粗雑さとみられる。

須恵器 小皿は平底の底部から丸味を持って体部に立ち上がる498を除いて、全て底部と体部の境に、明瞭な稜を持つタイプである。大きく外反する501を除き、体部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げられている。口径8.6cm、器高2cm前後、底径5cm前後が中心となる。

510は高台の付くものであり、口縁端部はシャープに仕上げられている。山茶碗であり搬入品と考えられる。

碗は底部の突出しがほとんど見られなく、平底から稜を持って、体部が立ち上がるタイプである。口径16cm前後、器高5cm前後、底径5cm前後が中心である。520は底部の稜が明瞭でなく、底部から丸味を持って立ち上がる。小皿・碗共に墨書の見られるものを含んでいる。

溝11（遺構） 溝11は調査区西方のD-20区、J-20・25区、P-25区、V-25・30区にまたがり、南北方向に直線的に検出された。溝幅は40～120cm、深さ40cm程である。溝にはIII層灰色土が堆積していた。溝11に直角方向に延びる溝として溝4や16がある。溝の規模からみて、建物などの区画溝かも知れない。

〔遺物〕 溝11の出土遺物は、土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・磁器・土製品が出土した、土器量としては決して多くないが、土器の種類が多く、土器構成を考えるうえで重要な資料となった。

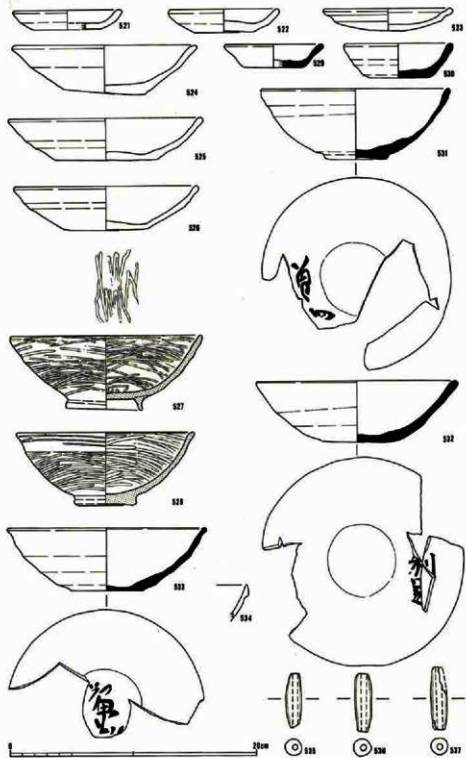
土師器 (521～526) 土師器の種類には小皿・杯がある。

523はA 2タイプの「て」字状の小皿である。口径10.5cm、器高1.8cm、底部は若干尖りぎみで精製された胎土をもっている。521・522はD 5の糸切り小皿である。口径8.9cm、器高1.7cm、体部には僅かな屈曲がある。

524～526はE 3タイプの杯である。口径15cm前後、器高3.5～4.0cmの糸切り底をもち、体部には屈曲部があり稜をもっている。525・526は器高指数が低く、扁平なものである。

瓦器・黒色土器 527は完形の瓦器碗である。口径15.3cm、器高5.8cmを測り、器高指数は38である。高台は断面形が基本的には方形であるが、全体的に厚く、下端部が肥厚し下方へ踏ん張るやや変形したものである。高台高は0.8cmを測る。

体部は碗形を呈するが、口縁部は比較的直線的である。口縁部端部は、強い横ナデ調整により外面に明瞭な段が認められる。また、それに対応する内面においてもわずかな窪み



第34图 清11 土師器・瓦器・黒色土器・須恵器・土鏡

が認められる。体部の器壁は若干厚めである。

体部内外面および見込みにヘラミガキが施されている。体部のミガキは内外面とも同程度に比較的密に施され、その幅も2mmと細筋である。これに対して見込みは、磨きの単位は体部のそれに比べて太く、むらが多く雑である。一部観察しにくい箇所もあるが、基本的には平行ミガキである。

528は、完形に復元されるB類の黒色土器である。口径14.2cm、器高5.7cmで器高指数40と瓦器柄に比べて、若干深い碗形を呈する。口縁端部は、指一腹分の強い横ナデ調整により大きく外反させ、外面に明瞭な段が認められる。底部は平高台で、糸切りにより切り離されている。高台高は0.7cmである。

ヘラミガキは、両面とも比較的密に施されている。見込みについては、底部の残存状況が不良のため、明らかにしえない。

須恵器 529は口径7.8cm、器高1.9cm、底径4.9cmの小皿である。平底から大きく屈曲して体部へと続く。530は口径8.4cm、器高2.75cm、底径4.8cmの小皿であり、全般的に鈍い感じのする土器である。当遺跡では稀な大きさであるが、窯業地では良く見られる。

柄は3個体出土しているが、三者三様である。

531は突出する底部から下腹れ気味に体部が立ち上がるものであり、口径15cm、器高5.6cmを測り他に比べて底径が小さく、口縁端部は肥厚されている。

533は底部と体部の境に稜を持つタイプであり、体部にも稜が見られる。口縁端部は外反気味となり、内面にヘラ沈線が見られる。口径15.8cm、器高5cm、底径5.8cmを測る。

532は底部から丸味を持って体部へと続くタイプであり、口径16cm、器高4.9cm、底径5.9cmを測る。全て糸切り未調整のままで終っている。

磁器 534は白磁碗である。薄手に成形され、口縁部は細長い玉縁状を呈する。内・外面共施釉され、色調は灰色を帯びた白色を呈する。器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から見て、横田・森田分類白磁碗II類に相当するものと考えられる。

土製品 (535～537) 土製品として土鎌がある。535～537は長さ4.2～5.0cm、最大径1.3cmで紡錘形を呈している。

溝12 溝12は調査区の東方のJ～V-(5)区にかけて南北方向に延びる溝である。溝の幅は50～100cm、深さ30cmで、埋土はIII層灰色土である。掘立柱建物跡2の東辺に位置する関係から、建物の区画溝の可能性がある。

遺物としては、須恵器・土師器の小片が出土したのみであった。

溝13〔遺構〕 溝13は調査区の中央寄りのJ-0区、P-0・5区、V-5区にかけて、南北方向に延びる溝である。溝の幅は30～80cm、深さ30cmで、埋土はIII層灰色土であった。この溝は掘立柱建物跡4の東辺溝、或いは掘立柱建物跡6の東辺に位置することから両落

ち溝、或いは区画溝の可能性がある。また東西方向に延びる溝15が南方に曲っていることから、溝13の二又に分岐している東辺の凹地は溝15の続きかも知れない。



第35図 溝13 土師器・磁器

〔遺物〕 遺物としては須恵器・土師器等が出土した。

土師器 538はB1タイプの2段ナデ小皿である。口径8.8cm、器高1.7cmで器壁は薄い。539はD3の糸切り小皿である。口径8.8cm、器高1.5cmで口縁は僅かに内彎し底部は厚い。

磁器 540は青磁碗の口縁部である。口縁端部はやや丸味を帯び、体部外面には、ヘラ描きで蓮弁文を施文した後、櫛描き文を施す。内・外面共施釉され、暗黄緑色に発色する。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6類に相当するものと考えられる。

溝14 溝14は調査区中央のJ-5区、P-5-10区にかけて南北方向に延びる。溝の幅は50cm、深さは15cmで埋土はⅢ層灰色土であった。この溝に関連する建物については不明であり、性格についても、不明である。遺物については、僅かに土師器・須恵器の細片が出土したのみであった。

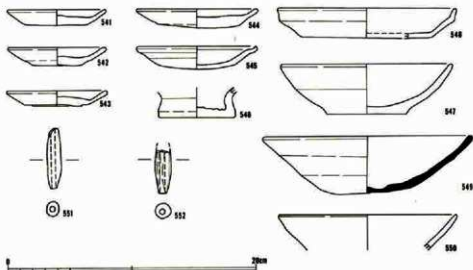
溝15 溝15は調査区中央のJ-5区、P-5区にまたがって東西方向のものがコーナーをもち南に曲がって検出された。溝の幅は30cm、深さは20cmで埋土はⅣ層黒色土が堆積していた。この溝は南北方向に続く溝13と交差しており、溝13の二又に分かれる東側が溝15の続きである可能性が高い。またこの溝15に対応する遺構として、掘立柱建物跡6がある。この建物に対して北辺と東辺に併行しており、雨落ち溝の可能性が考えられる。

溝16〔遺構〕 溝16は調査区中央からやや南寄りのV-5-15区、P-15-25区にかけて、17mにわたり、東西方向に延びる溝である。溝幅は30-50cm、深さは40cmでⅣ層黒色土が堆積していた。この溝に関連する遺構は掘立柱建物跡3があり、この建物の南辺に併行しており、雨落ち溝の可能性が高い。しかし、西方向に建物の延長上に続き、南北方向に延びる溝が検出されなかったことなど若干疑問点がある。

〔遺物〕 溝16の出土遺物には土師器・須恵器・磁器・土製品がある。

土師器 (541-548) 土師器には小皿・大皿・杯がある。

545はA2タイプの「て」字状の小皿である。口径9.7cm、器高1.8cm、口縁端部が上方へつまみあげられ、体部下半に屈曲部をもち稜がある。また底部が尖りどみである。541・542・544はD3タイプの小皿である。口径8.0-9.8cm、器高1.3-1.5cm、いずれも底部が厚く、542は体部外面に稜があり、他に比べて、体部が長く、口縁に大きく開きがみられる。543



第38図 溝16 土師器・須恵器・磁器・土鉢

はD 2タイプの小皿である。口径8.2cm、器高1.2cmの扁平なもので、糸切りの底部から直線的に口縁が開く。

546はC 5タイプの大皿である。口径14.5cm、器高2.4cm、底部は平底で体部上半で屈曲し、段をもち上方にのび口縁にいたる。里には珍しく直線的な資料である。

547はE 2タイプの杯である。口径13.8cm、器高4.0cmでE 2タイプとしては底径が小さく、口縁も内彎さみである。

548はFタイプの杯である。底部は糸切りで、大きく開く口縁がつくと考えられる。底部のみの資料である。

須恵器 549は糸切り未調整の椀であり、口径16.6cm、器高4.6cm、底径6cmを測る。底部から丸味を持って体部に続くタイプである。全般につくりは粗い。

磁器 550は、青磁碗の口縁部である。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収まる。内・外面共施釉され色調は、淡い黄緑色を呈する。焼成が不十分な為か、釉にはムラが認められる。形態及び技法上の特徴から、横田・森田分譲越州窯系青磁碗Ⅱ類に相当するものと考えられる。

土製品 (551・552) 土製品として土鉢がある。551は長さ4.7cm、最大径1.1cm、552は残存長3.3cm、最大径1.3cm紡錘形を呈した土師製の円管土鉢である。

溝17 溝17は調査区の中央やや南寄りのV-10区にあり、南北方向に3mにわたり検出されたものである。溝幅40cm、深さ20cmで、埋土はⅢ層灰色土であった。溝の残りは悪く、僅かなもので、対応する遺構・性格などは不明である。

溝18 溝18は調査区やや西方のP-20区で南北方向に4mにわたり検出されたもので

ある。溝幅30～50cm、深さ15cmと残りは悪く、埋土はⅢ層灰色土であった。この溝に明確に対応する遺構はないが、掘立柱建物跡3・5・7の西辺に併行しているところから、関係がないとも言えない。

溝19 溝19は調査区西方のP-20～25区付近にあり、南北方向に2m伸びる溝である。溝幅70cm、深さ20cmと浅く幅広いものであり、埋土はⅣ層黒色土である。この溝は残りが悪いところから、溝であるとの判断材料が少ない。このようなことから、明らかに対応する遺構もみあたらない。

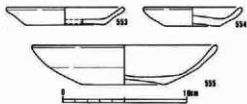
溝20 溝20は調査区南西隅のV-25区付近に位置し、南北から東西方向に曲がるコーナー部にあたるものである。長さ5m、幅30cm、深さ20cmで埋土はⅢ層灰色土であった。この溝に対応する遺構は不明であるが、特にこの調査区付近は建物の配置が重複しており、調査区端ということもあり、見逃している可能性がある。規模から雨落ち溝の可能性があらう。

溝21 溝21は調査区中央からやや南寄りのP-10区、V-10区にかけて南北方向に4mにわたって検出された。溝幅30～50cm、深さは20cm、埋土はⅢ層灰色土であった。この溝に対応する明確な遺構はないが、掘立柱建物跡2・5・8と併行しており、雨落ち溝の可能性もあると考えられるが検出規模が少なく不明な点が多い。

溝22〔遺構〕 この溝22は調査区南西寄りのV-15区に南北方向に5mにわたって検出されたものである。溝幅70cm、深さ20cmで埋土はⅢ層灰色土であった。この溝は溝4の南北方向と近接して併行しており、大きく重なる部分がある。この溝と明確に対応する遺構はないが、掘立柱建物跡7の東辺に併行しており、関連があるかも知れない。

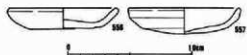
〔遺物〕 溝22からの出土遺物は土師器のみで、小皿2点と杯1点である。

553はD3タイプの糸切り小皿である。口径9.5cm、器高さ1.5cmで口縁は僅かに外反する。554はD5の糸切り小皿である。口径7.9cm、器高さ1.5cmで、底部の器壁が厚い。555はE4タイプの杯である。口径14.8cm、器高さ3.2cmで体部に稜をもち、全体に器壁が薄い。



第37図 溝22 土師器

溝23〔遺構〕 溝23は調査区南西隅のV-30区において南北方向に6mにわたって検出された。北は現水路にかかっているため削平されていると考えられる。溝幅は50cm、深さ30cmで、埋土はⅢ層灰色土であった。溝10・11と併行し、柱穴群が途切



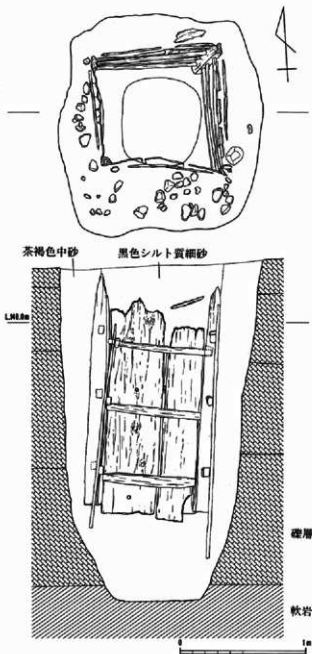
第38図 溝23 土師器

れており、建物の区画溝、或は用水路などの性格が考えられよう。

〔遺物〕 溝23の出土遺物は土師器小皿2点のみである。557はB1タイプの小皿である。口径9.0cm、器高2.0cm、2段ナデ手法を用いたもので、底部が薄くなる。556はD5タイプの小皿である。口径8.9cm、器高1.8cmと扁平である。

3. 井戸1

〔遺構〕 この井戸は調査区東方のL-5付近に位置する。井戸の掘方は1.7m×1.65mの隅丸方形を呈し、僅かに内傾しながら底に至る。深さは2.75mで底は63cm×72cmの隅丸方形を呈する。この掘方内に隅柱と縦板と横棧で組まれた井戸枠がある。隅柱は4本で一辺12cmの方形を呈する。この隅柱に縦長のホゾ穴が穿たれ、隣辺は交互に段差を有する横棧がめぐる。この横棧は断面長方形で約55cm毎に設けられ、4段認められた。またこの横棧とホゾ穴のすき間をつめるためのくさびも出土した。横棧の外側には縦板が前後にすき間を覆うようにたてかけられている。北側では内側2枚、外3枚、東・南・西側で内側は3枚、外側3枚ずつで構成されている。この縦板は前列には幅が広く厚さも太いものが使用され、後列



第39図 井戸1 実測図

はそのすき間をおぎなう程度の薄いものを使用している。これらの板材には幅44cm、厚さ7cm長さ172cmという大きな板材がある。

これらの板材で構成された井戸枠は内辺で80cm、深さ220cmをはかり、掘方の底までは40~70cm程度の空間がある。またこの井戸材は南西側から力がかわり、北東方向へ傾いているところから、発掘中に崩壊するに及んだ。

井戸内には、上層で暗茶色の細砂が堆積し、下層では黒灰色シルトが堆積していた。また、腐食した竹が多く存在した。これは井戸を埋める呪いを行ったものであろう。

井戸は黄色シルト質細砂や下層の黄褐色礫層を掘り込み、さらに基盤である緑灰色の軟岩層を掘り込んでいる。この軟岩層ではノミ状工具で掘削した痕跡が観察できた。

掘方の裏込めは中礫混じりの土砂を埋めており、若干の土師器・須恵器が出土したのみであった。

〔遺物〕 井戸1からの出土遺物には土師器・瓦器・須恵器・磁器・木製品・骨角品などが一括した状態で良好に出土した。

土師器 (558~594) 土師器は小皿・大皿と、皿類がまとまって出土した。遺物は井戸内出土で保存状態も良く、小皿などは灯明皿として使用されたことを示す口縁部の赤色変色を顕著に認めた。

558・560・561・564・565・567・570・574・579・581・582・586~588はC3タイプの1段ナデ小皿である。口径は9.0cm前後、器高は約1.5cmである。口縁は内彎し、端部は丸い。調整については、588のようにナデのやや強いものが混じるが、ほとんどが、弱く、区別がしにくい。559・562・563・566・568・569・571~573・575~578・580・583~585はC4の1段ナデ小皿である。口径は9.0前後、器高は約1.5cmである、ナデは弱く識別しにくく、口縁は内彎する。また口縁端部は面取りされ、上方に尖っている。

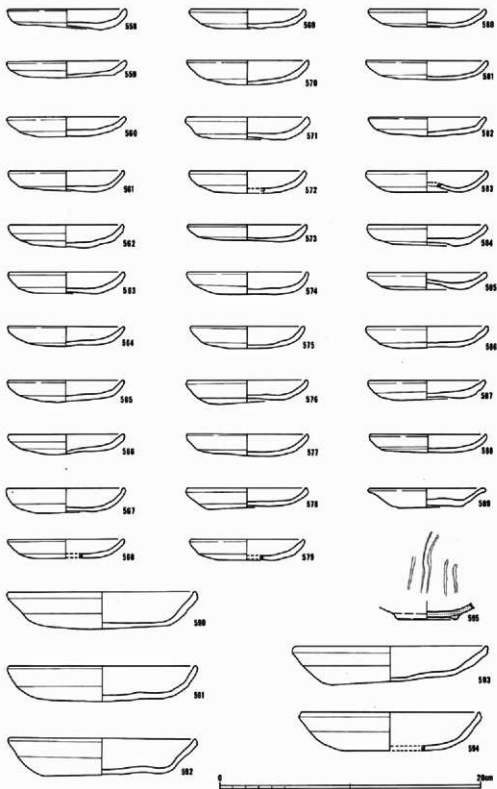
589はD1タイプの小皿である。口径9.0cm、器高1.5cmで、糸切りされた底部から、外反する口縁にいたるものである。井戸1からはこのタイプはこれ以外には出土していないことから混入品かも知れない。

590~594はC7タイプの1段ナデ大皿である。平らな底部で、若干内彎する体部から口縁にいたる。口縁端部は面取りされ、器面は僅かに凹凸が生じている。

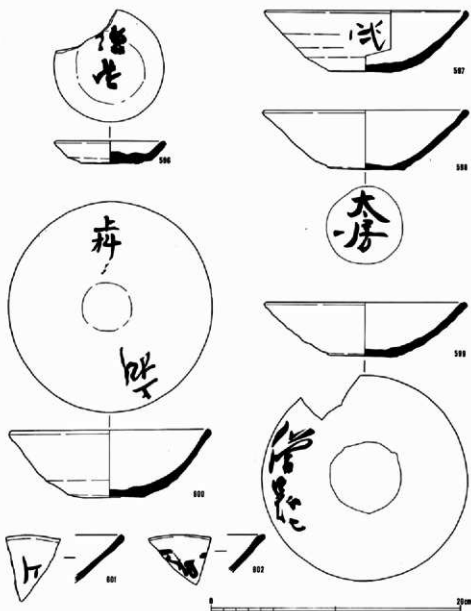
瓦器 瓦器柄595の高台は、断面逆台形を呈し、内端面で接地する。高台高は0.2cmにとどまる。暗文は見込みで観察でき、平行ミガキである。

須恵器 小皿は底部と体部の境に明瞭な稜を持つタイプであり、口径8.6cm、器高1.8cm、底径4.95cmを測る。底部は糸切り未調整で、内面に墨書が見られる。

柄には底部の突出がほとんど見られなく、平底から明瞭な稜となって体部に続くタイプであり、体部から口縁にかけて内彎気味に立ち上がる。口径は15.8cmを中心に大きくて



第40図 井戸1 土師器・瓦器

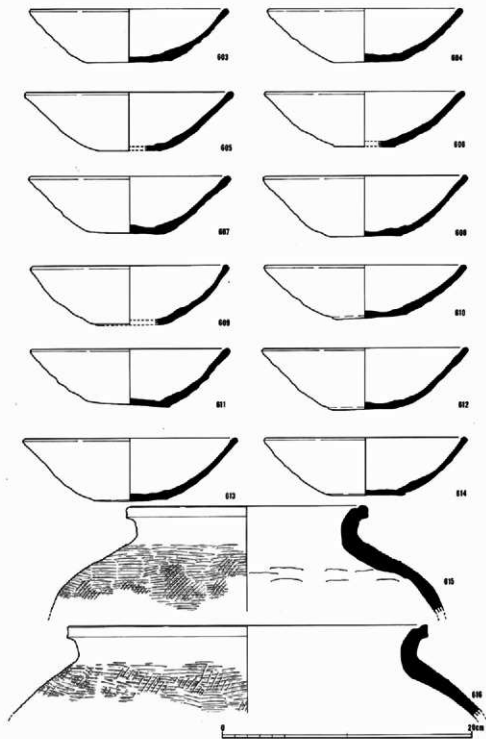


第41図 井戸1 須恵器-I

16.85cm、器高は4.3cmを中心に全て5cm未満である。底径は6cm前後となっており、底径が大きく、器高の低い傾向が伺える。口縁端部の肥厚されているものが多い。底部は糸切り未調整で終わっている。小皿・椀共に墨書が見られる。

裏は2点出土している。共に短い口縁が大きく外反するものであり、口縁内面が一部凹んでいる。口縁端部は上方に、引っ張り気味に拡張されている。体部外面は頸部直下まで

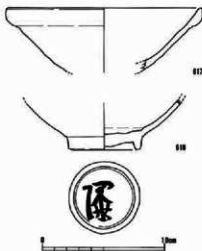
第3節 平安時代～鎌倉時代の遺構と遺物



第42図 井戸1 須恵器-II

横方向の平行タタキメを基本に、一部斜方向のタタキメを重ねた形で調整している。615のタタキメは一定方向を持たない。616は内面に粘土のつき目痕が見られる。口径は616が28.7cm、615が18.4cmとなっている。

磁器 617は白磁碗である。体部はやや内彎気味に立ち上がり口縁部は玉縁状に大きく肥厚する。内面の体部と底部の界には浅い段を有する。内・外面とも施釉されるが外面の体部下半以下は露胎である。色調は灰色を帯びた白色を呈し器面には釉ムラ及び気泡が認められる。胎土中には黒い細粒が含まれる。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類白磁碗IV-b類に相当するものと考えられる。



第43図 井戸1 磁器

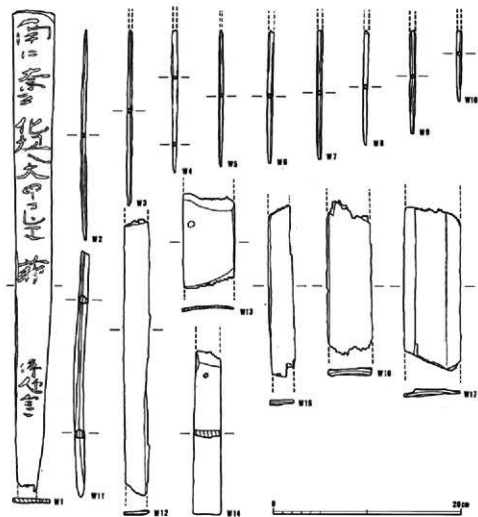
618は白磁碗の底部である。比較的細く低い高台をもち体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。内面の体部と底部の界に段を有し、その段の内側の釉を輪状にカキ取っている。内・外面とも施釉するが、外面の高台部以下は露胎である。底部外面（高台裏）には墨書が認められる。形態及び技法上の特徴から、横田・森田分類白磁碗VII-2類に相当するものと考えられる。

木製品 木筒(W1)下端部を欠損している。現存長50.3cm、上端幅4.2cm、下端幅2.2cm、厚さ0.5cm。ヒノキの板材を使用しているが、木取りが不整方向であるため裏面は木目に沿って凹凸がある。表面は平らに整形されている。上端は角を落としたりや丸みを持って作り上げられている。表面には墨書で文字が書かれており15字確認できるが、約20字書かれていたものと思われる。文字の後半に「蘇」と「符」の文字が読み取れるため「蘇民持来」札と同種の呪符木筒と考えられる。この他にもW12~17に図示したような板材が出土しており木筒の一部ではないかと考えていたが、墨書も確認されず、また樹種同定の結果コウヤマキ・モミであることが判明したため、木筒である可能性は極めて薄くなった。また曲物とも使用している樹種が異なっている。W13・14は各々一箇所に穿孔が見られる。

箸(W2~10)一本を除いて全て欠損している。W2は長さ22.0cm、幅・厚きとも0.5cmで断面は方形を呈している。他のものは断面が丸か長方形に近い方形を呈しており、太さも0.4~0.7cmである。完形のものは両端を削って尖らしている。ヒノキである。

棒状木製品(W11)一端を欠損している。現存長25.6cm、直径1.0cmの棒状をなしているが断面形は一定していない。先端を削って筈状に尖らしている。

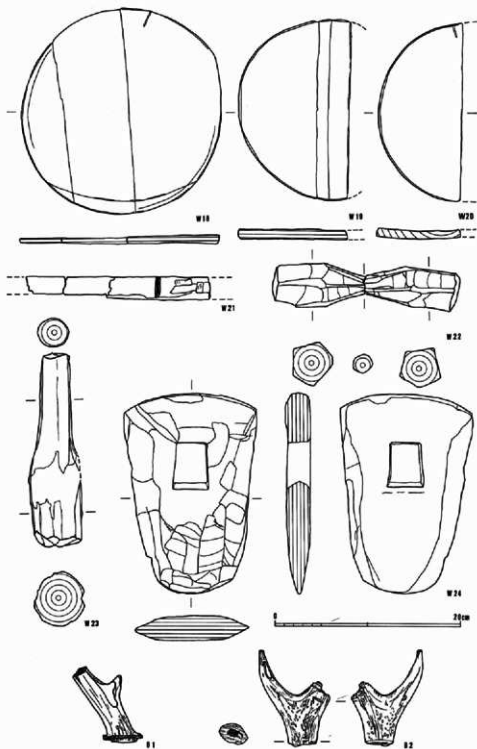
曲物(W18~20) W18~20は曲物の底板である。W18の直径は21.8cm、厚さ1.0cm。ヒノ



第44図 井戸1 木製品



骨角器写真



第45图 井戸1 木製品・骨角器

キの板目材を使用している。側面に一箇所目釘の穴が見られる。W19は約1/2を欠損しているが直径17.5cm、厚さ1.0cmのヒノキの板目材を使用している。W20は約1/2を欠損しているが直径18.9cm、厚さ1.0cmのヒノキを使用しているが木取りは不整方向である。W18と同様一箇所目釘の穴が見られる。W21は曲物の側板の一部である。幅約2.4cm、厚さ0.2cmのヒノキ板目材を使用しており、二重に重なった部分を幅0.7cmの樹皮で綴っている。綴方は図示してあるように2地点7箇所^{EF}に切れ目を入れている。曲物の側板にしては高さが低いため、おそらく本来の側板の外に籠状にあつたものか蓋であろう。

樋の子 (W22) 長さ20.0cmのクヌギの心持ち材の全面をカットして作っており、中央部を直径2.0cmまでくりこんでいる。

横樋 (W23) 持手部側を欠損している。残存長20.3cm、直径5.7cmのケヤキの心持ち材を使用している。持手部側は直径3.3cmまで削って作り出しており、先端部付近も面取りを行っている。中央部は未調整である。使用痕は不明である。

鎌 (W26) 長さ21.1cm、基部幅14.1cm、刃部幅8.6cm、厚さ2.6cm。アカガシ亜属の板目材を使用している。刃先部分にはわずかに段が作られており、鉄製刃先を装着するものかもしれない。小型であり、使用痕は認められないため、形代として使用した可能性もある。この他に図化できなかつたが、下駄が出土している。

またニホンジカの角座やイノシシの環椎（第一頸椎）が出土している。鹿角は落角と思われるが、先端を切断しようとした痕跡や、刃物で削った痕跡が認められる。刀子の柄等に利用される部位ではあるが、用途は不明である。

4. 墓

木棺墓〔遺構〕 この木棺墓は調査区北方のD-15区、F-16に位置する。木棺の掘方は南北168cm、東西88cm、深さ26cmの長方形を呈する。掘方の主軸は、N-7-Wで、ほぼ南北方向である。掘方内の埋土は上層から、I層灰褐色細砂層、II層暗灰色土層、III層黒色炭層であった。特にIII層の炭層は掘方の底面に敷かれた状態でその厚さは3～4cmであった。

この遺構が木棺墓であると判断できたのは僅かながら人骨片が出土したことから墓であることが判り、鉄釘が出土したことから、木棺が納められていたことが判明した。

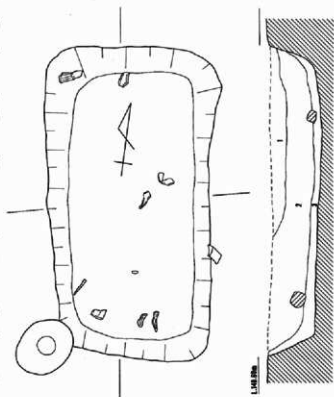
また掘方発掘中には木棺の痕跡はまったく検出できなかったことから、その規模は不明である。

〔遺物〕 木棺墓からは土師器皿3点と鉄釘4点がある。

土師器(619～621) いずれも破片ではあるが、供獻土器と考えられる。619はC2で1段ナデの小皿である。尖りぎみの丸底を呈する。620はC3の1段ナデ小皿で丸底を呈する。621はC7の1段ナデ大皿で体部と底部は屈曲し、平底を呈する。

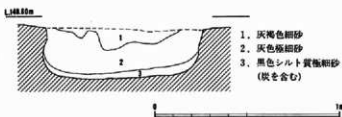
鉄製品 木棺に使用されていたと考えられる釘は5点あり、一部炭化した材が付着している。これらの内、M5はM2あるいはM4と同一のものの可能性がある。

これらの釘は全て断面方形の所謂角釘で、M1~4は厚さ幅とも4~5mmで同じ規格のものと考えられる。全長は完形のものがないため不明であるが、M1の現存長5.1cmを測る。これらの釘の頭部はまず平に叩き伸ばされた後に、折り曲げて作られている。

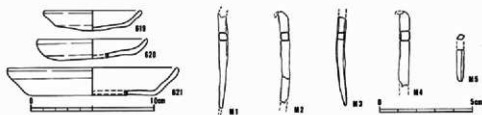


5. 土壌

土壌1〔遺構〕土壌1は調査区の東端付近J-25区、O-27に位置する。この土壌は直径約95cmの円形を呈し、中央にはさらに径45cmの2段掘りになっており、深さ

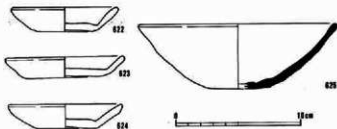


第46図 木棺墓 突測図



第47図 木棺墓 土師器・鉄釘

35cmのものである。土壌の堆積土はⅢ層灰色土である。この遺構は掘立柱建物跡4の推定範囲に入っているが、この建物に伴うかは不明である。



第48図 土壌1・2 土師器・須恵器

〔遺物〕 遺物には土師器・須恵器があり、土師器2点が図示した。

土師器 622・623共D6の糸切り小皿で外面には屈曲はなく外傾しており、器壁は厚い。口径は8.6～9.6cm、器高は1.7～1.8cmである。

土壌2〔遺構〕 土壌2は調査区の北西付近のD-20区、H-20に位置する。この土壌は直径約60cmのほぼ円形を呈し、中央にはこぶし大の礫が存在した。深さは約25cmで浅いものである。この土壌の堆積土はⅢ層灰色土である。この土壌は掘立柱建物跡4の推定範囲に入っているが、この建物に伴うものかは不明である。

〔遺物〕 遺物には土師器・須恵器があり、土師器1点、須恵器1点が図示した。

土師器 624はD6の糸切り小皿で口径9.2cm、器高2.0cmである。外面に屈曲はなく、口縁は外反し、器壁は厚い。

須恵器625は口径15.4cm、器高5.2cmの碗である。底径5.2cmの底部から、僅かに稜を持って体部が立ち上がるタイプである。

〔註〕

- (1) 愛知県小牧の羅岡塚と考えられる。森田 稔氏御教示による。
- (2) 神戸市立博物館、森田 稔氏の御教示による。
- (3) 註2に同じ。
- (4) 森本朝子 1984 『博多出土貿易陶磁分類表』『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』福岡市教育委員会
- (5) 市村高規他 『福田天神遺跡』龍野市教育委員会 1982
- (6) 渡辺 昇他 『宝林寺北遺跡』兵庫県教育委員会 1986
- (7) 註5所収
- (8) 松下 勝・西口和彦 『菅野遺跡』『中国縦貫自動車建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 1976
- (9) 註1に同じ。
- (10) 横田賢次郎・森田 勉 1978 『太宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として一』『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

第4節 奈良時代の遺構と遺物

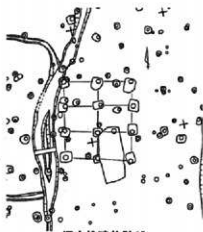
1. 掘立柱建物跡

〔遺構〕 対中地区の奈良時代の遺構は掘立柱建物跡10～12の3棟を検出したのみである。これらの遺構の他に僅かに柱穴を検出したが建物跡とはならなかった。またこれらの建物跡はどれも大型の柱穴で構成されており、平安時代末～鎌倉時代の建物の小型の柱穴とは明確に判別できるものである。

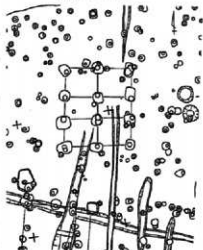
掘立柱建物跡10 掘立柱建物跡10は調査区の東方のP-0・5区、V-0・5区に位置する。この遺構は東西の梁間2間(3.5m)で、南北の桁行3間(4.15m)である。柱間は東西1.7～1.9m、南北1.3～1.5mである。建物は総柱で、12本の柱からなっていた。柱の掘方は一辺40～70cm、柱痕は直径20～25cmであった。この建物は、他の平安末～鎌倉時代のものとは柱の規模が大きく違う。また、柱の切り合い関係からも古いことが判る。なお、この建物の埋土はすべて灰茶色土であり、柱痕も太いものであった。またこの建物に付属する施設は検出されなかった。出土遺物は掘方内から須恵器、高台杯が出土し、奈良時代であると考えられる。

掘立柱建物跡11 掘立柱建物跡11は、調査区中央のJ-10・15区、P-10・15区に位置する。この遺構は東西の梁間2間(3.6m)で、南北の桁行3間(4.1m)である。柱間は東西1.7～1.9m、南北1.1～1.6mである。建物は総柱で、12本からなっていた。柱の掘方は一辺50～70cm、柱痕は直径20～25cmであった。この建物は掘立柱建物跡10と同様で、他の平安時代末～鎌倉時代のものとは柱の規模が大きく違う。また、柱の切り合い関係からも古いことが判る。なお、この建物の埋土はすべて灰茶色土であり、柱痕も太いものであった。またこの建物に付属する施設は検出されなかった。出土遺物は小片ながらも、須恵器高台杯が若干出土したことから奈良時代の遺構と考えられる。

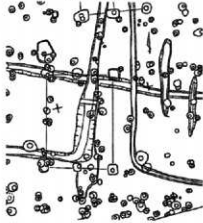
掘立柱建物跡12 掘立柱建物跡12は調査区南方のP-15・20区、V-15・20区に位置する。この遺構は南北の梁間1間(4.8m)で、東西の桁行2間(3.2m)である。柱間は東西1.7～1.9m、南北4.9mである。建物は南北に長いもので、6本の柱からなってい



掘立柱建物跡10



掘立柱建物跡11



掘立柱建物跡12

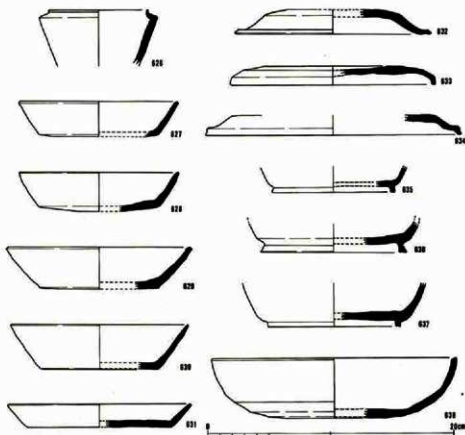
第49図 奈良時代 掘立柱建物跡

た。柱の掘方は一辺40～60cm、柱痕は直径20～25cmであった。この建物は他の例同様、平安末～鎌倉時代のものとは柱の規模が大きく違う。また、柱の切り合い関係からも古いことが判る。ただ、南北の1間分が4.9mもあることは、他の例になく、不明な点もある。なお、この建物の埋土は灰色・黒褐色が混在しており、掘方も太いものであった。またこの建物に付属する施設は検出されなかった。出土遺物は柱穴掘方から須恵器、高台杯が出土しており、奈良時代の遺構と考えられる。

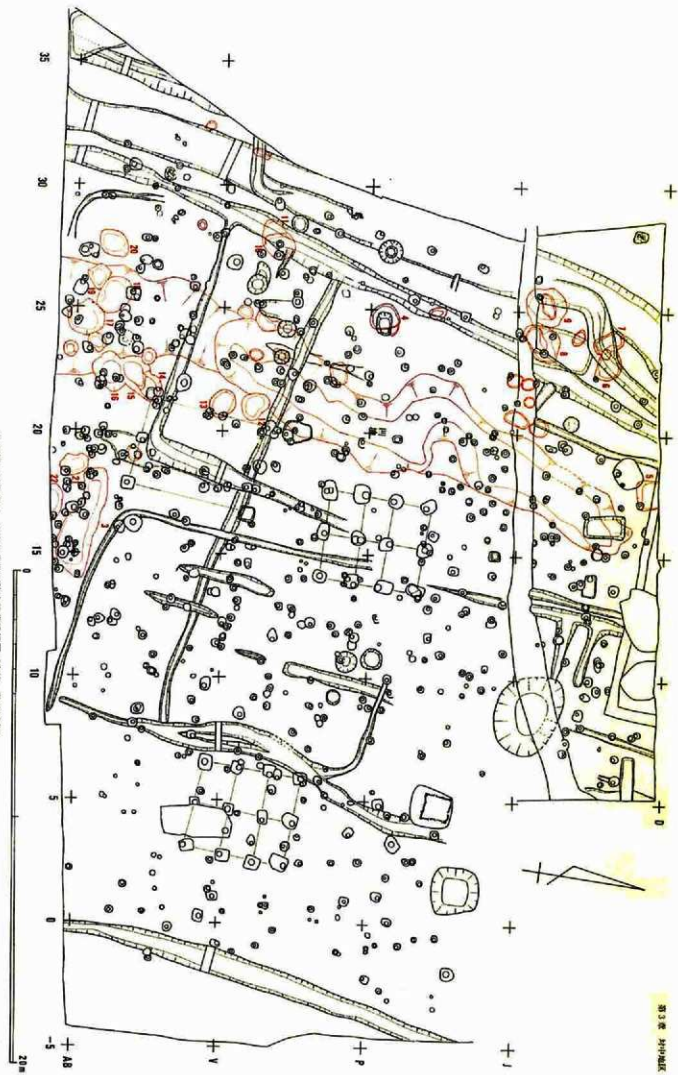
〔遺物〕 奈良時代の遺物は包含層や柱穴から、須恵器と土師器の細片が出土した。

短頸壺(626)は広口短頸の小型壺であり、口径は8.0cmである。

杯A(627～630)は高台をもたない杯である。口縁部はいずれも直線的に外傾する。底部は完全な平底のものが多いが、中央がやや下方に張るもの628がある。底部外面にはヘラケズリを施したものはなく、628・629はヘラ切りののち、ナデ調整を行っている。630は他に比べて器壁が薄い。径高指数(器高/口径×100)は22から25の間におさまる。



第50図 掘立柱建物跡・包含層 須恵器



第31图 河内地区 奈良时代及平安时代遺跡図（本図 赤土封じ）

杯B (635-637) は高台をもつ杯である。底部の調整は杯Aと同じである。635・637は高台が外方に踏ん張らず、低い。

杯B蓋(632-634) 632は扁平な頂部をもち、端部は外反する。口径は15.6cm。やや新しい時期のものかもしれない。634は扁平な頂部と屈曲する縁部をもつ。口径20.6cmとやや大型のものである。

皿(631) 端部は丸くおさめる。底部の調整は杯Aと同じである。

碗(638) 大型の碗。内彎しながらちあがる口縁部をもつ。底部には逆時計回りの回転ヘラケズリが施されている。口径は19.9cmである。

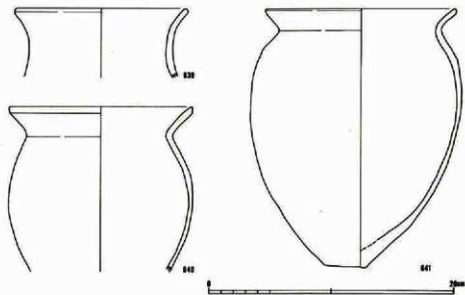
第5節 弥生時代の遺構と遺物

1. 土壌

対中地区ではV層黄褐色土をベースとして奈良時代及び平安-鎌倉時代の遺構が存在した。その遺構のたちわりの際にVI層から弥生土器が出土することが判明し、下層の確認調査を実施した。

確認調査は対中地区の西方を中心にトレンチ調査を行った。その結果、南北はD-A Bまで、東西は14-32までの約360mの範囲で遺構が検出されることが判明した。

〔遺構〕 全面発掘調査の結果、D-15区からAB-25区にかけて凹地が検出され、その



第52図 土壌2・8・包含層 弥生土器

両側が微高地になる。その微高地に至るやや緩やかな斜面地及び凹地に土壌が検出された。

土壌は長方形を呈する土壌1の他は、ほぼ円形或いは不定形の1m程度のもので20基検出された。その他、径30～50cmの小土壌も20基検出された。いずれも深さは10～30cm程度で浅いものだった。

これらの土壌のうち、土器が出土したものは土壌1・2のみで、他は小片が混入していた程度であった。またその他の遺物は出土しなかったことから、性格は決定できなかった。また、住居跡の痕跡をとどめる遺物はなかったが、付近の微高地に集落の本体を求めることができよう。

〔遺物〕 対中地区の弥生土器は土壌や包含層からわずかに出土した。

広口壺 639は土壌8から出土した。口径は13.8cm、口縁はゆるやかに外反し、胎土には粗い砂粒を含む。器壁は磨滅しており、調整は不明である。後期に属するものと思われる。

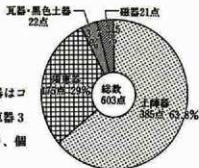
甕 641は土壌2から出土した。口径は15.2cm、器高23.0cm、磨滅が非常に激しく、内面の調整は不明であるが、外面は左下がりのタタキと思われる。胴部最大径は中位より若干上にあり、後期中頃の時期を示している。

甕 640は包含層から出土した。口径は14.8cm、口縁は「く」の字に外反し、端部に面をもつ。磨滅が非常に激しいが、外面の調整は左下がりのタタキと思われる。時期は後期中頃である。

第6節 小結 遺物の考察

1. 土師器の分類と編年

対中遺跡から出土した古代末～中世にかけての土器はコンテナで約30箱ある。そのうち土師器が約6割、須恵器3割、瓦器、黒色土器、陶磁器などが1割をしめており、個体数のうえからも土師器が目立っている。



土師器には、皿類、杯類が圧倒的に多く、僅かに、高杯や甕が存在する。特に底が丸く手づくねの皿については平安京を中心とする土師器の編年が確立する中で、対中遺跡の同様の皿数を検討した結果、平安京の変遷と同じ状況になることが判明した。これらの土器は、口縁形態を主とする形状差や、調整手法を中心に分類表を作成した(第4表参照)。またこの作業に伴い、平安京の土器様相とは異種の土器群があることがわかった。これは小皿D類、E類、杯F類である。これはいずれも底部糸切りで、胎土中に赤ガサリ礫を多く含む土器である。これらの糸切りを施す土器群は前述の手づくねの土器群よりも数的には多く、その比率は約70%に達する。

これらの土師器を分類し、さらに編年できるものであると考えられることから、土師器編年と遺構の推移を試みた。まずは基本となる分類から説明する。













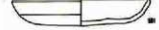

(1)土師器の分類と変化

土師器の皿・杯類は器形や口縁形態・調整によって第4表のように分類できる。







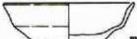


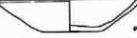



分類表では大分類としてアルファベットで示し、小分類を数字で示した。また例として当遺跡の遺構内出土の代表的な遺物の実測図を掲げたが、掘立柱建物跡の柱穴出土のものや、包含層出土のものも扱っている。手法については器種や形状・調整など特徴的な事項をまとめている。土器の覧は、このタイプに相当する土器ナンバーを示しているが分類として、そのタイプにグルーピングできるという意味で、例にあげた土器と形態がまったく一致するというものではない。

〔Aタイプ〕 Aタイプは平安京を中心に出土している、いわゆる「て」字状口縁の小皿である。口径は9.0～10.0cm、器高は1.0～2.0cmと幅がある。形態は口縁が屈曲し、断面形が平仮名の「て」に似ることから名付けられた。胎土は精製され、色調は褐色を呈するA1は器壁が薄く、屈曲度が強く、A2からA3になるにしたがい屈曲度は弱くなる。A3は口縁の屈曲が最終的にナデによる段が形成されるところからC2に類似することになる。また対中遺跡では「て」字状口縁の大皿は出土していない。「て」字の大皿は平安京の編年上、11世紀中頃に途絶えてしまっている。このことから対中遺跡の「て」字状口縁の小皿は11世紀末から12世紀初頭にかけて存在するものであろう。

第4表 土師器分類表-I

| 分類 | 例 | 手 法 | 土 器 | 数 |
|----|---|--------------------------------|---|----|
| A1 |  | 小皿「て」字状口縁 口縁凹曲し外反 器壁薄い | 160-163-166-407 | 4 |
| A2 |  | 小皿「て」字状口縁 口縁強く外反 | 154-156-158-162-164-167-168 404-406-523-545 | 13 |
| A3 |  | 小皿「て」字状口縁 口縁弱く外反 | 157-159-161-165 | 4 |
| B1 |  | 小皿 2段ナデ 口縁内彎し器壁薄い | 18-30-36-52-58-60-62-65-66-383 384-408-432-461-462-470-538-557 | 23 |
| B2 |  | 大皿 2段ナデ 口縁僅かに外反 器壁薄く端部丸い | 194 | 1 |
| B3 |  | 大皿 2段ナデ 口縁内彎し端部丸い | 173-179-182-185-186-188 190-193-410-439 | 14 |
| B4 |  | 大皿 2段ナデ やや扁平で口縁僅かに内彎 | 183-184-187-189 | 4 |
| C1 |  | 小皿 1段ナデ 体部凹曲し、口縁端部丸い | 5-45-51 | 8 |
| C2 |  | 小皿 1段ナデ 僅かに内彎し、口縁端部丸い | 4-7-14-15-17-22-23-27-29 31-35-37-39-44-59-61-63-64-67 464-466-469-473-619 | 34 |
| C3 |  | 小皿 1段ナデ 口縁は内彎し、端部は丸い | 1-3-8-13-16-21-24-25-38-457 463-558-560-561-564-565-567 570-574-579-581-582-586-588-620 | 31 |
| C4 |  | 小皿 1段ナデ 口縁は内彎し、端部に面取り | 6-19-20-26-559-562-563-566 568-569-571-573-575-578 580-583-585 | 21 |
| C5 |  | 大皿 1段ナデ 体部凹曲し、口縁外反し端部尖る | 175-176-195-198-546 | 7 |
| C6 |  | 大皿 1段ナデ 僅かに内彎し、口縁端部丸い | 170-172-174-487-489 | 7 |
| C7 |  | 大皿 1段ナデ 直線的で口縁端部面取り | 177-178-590-594-621 | 8 |

土器分類表-II

| 分類 | 例 | 手 法 | 土 器 | 数 |
|----|---|---------------------------------------|---|----|
| D1 |  | 小皿 糸切 口縁強く外反し 底部丸い | 93・109・110・123・129・152・153 403・484・589 | 10 |
| D2 |  | 小皿 糸切 口縁外反し尖い | 136～151・387～397・401・543 | 29 |
| D3 |  | 小皿 糸切 口縁外反し底厚 い | 88～78・80～87・90～92・96・97・101～106・188 111～113・116～119・121・398・399・402・431 465・471・479・539・541・542・544・553 | 51 |
| D4 |  | 小皿 糸切 口縁は外反 器壁均一 | 88・89・94・95・100・120・434～436 472・474・476・480・481 | 14 |
| D5 |  | 小皿 糸切 口縁若干内彎 底厚い | 79・98・99・107・114・115・122・133～135 400・437・475・477・478・486・521 522・554・556 | 20 |
| D6 |  | 小皿 糸切 口縁強く外反 器壁厚い | 124～128・130～132・433・482・483・485 622～624 | 15 |
| E1 |  | 杯 口縁外反 し、底部丸い 体部で稍曲し、 器壁薄い | 215・411 | 2 |
| E2 |  | 杯 口縁外反 体部と底部環状 い、糸切底、体 部中央に横 | 207・208・214・216・217・412～415 440～442・547 | 13 |
| E3 |  | 杯 口縁外反し 大型、体部と底 部境域ならぬ 底部糸切 | 203・205・206・209～213・445 492・494・524～526 | 14 |
| E4 |  | 杯 口縁大きく 開く、器壁低い 糸切底 | 199～202・204・443・444・446 490・491・493・555 | 12 |
| F |  | 杯 高台状糸切 底、口縁外反 内面底をえぐる | 218～227・416・495・548 | 13 |
| G |  | 托状皿 口縁は広がり 糸切高台 | 229～231・438 | 4 |
| H |  | 受皿 口縁環状 器高低く扁平 | 232 | 1 |

兵庫県内の「て」字状口縁の皿の分布は、尼崎市金楽寺貝塚⁽¹⁾、神戸市滝ノ奥遺跡⁽²⁾、三田市井ノ方遺跡⁽³⁾、川西市下加茂遺跡⁽⁴⁾などの摂津地方で出土している。播磨地方でも同時期の遺跡が調査されているが、出土しておらず、播磨にはおよんでいないのかも知れない。

〔Bタイプ〕 BタイプはAタイプ同様、平安京を中心に出土している小皿、大皿である。口縁部は2段にナデにより整形されている。小皿の口径は9.0cm、器高1.8cmで、大皿は口径16cm、器高2.8cmで他に比べて器高が高い。胎土は精製されており、堅緻で色調は褐色を呈する。B1の小皿は新しくなるにつれて、上段のナデが弱くなり、Cタイプの1段ナデの小皿と同化してゆく。B2の大皿は器壁が薄く、口縁が外傾或るいは外反しており先端が細く丸くおさまる。これは2段ナデでも古いタイプのもので、11世紀後半に位置づけられる。果下では尼崎市金楽寺貝塚で出土している。B3は上・下のナデが明確でありB4に変化する。これは口縁上段ナデが弱くなってゆき、器高も低くなる。

2段ナデの皿、B2は11世紀後半、B1・B3は12世紀初頭からはじまり、B4に移りかわって、12世紀末でなくなる。

〔Cタイプ〕 Cタイプは平安京を中心に広く地方においてもみられ、1段ナデを有する小皿である。口径は9.2cm、器高1.4cmで扁平なものである。A3やB1の系統を含むものだが、口縁のナデが弱く、C1からC4まで僅かな変化が見られるだけである。C1は体部で屈曲部をもち、直線或は外反ぎみの口縁をもつ。C2は1段ナデの典型で、体部中央付近にナデによる段が明瞭につくものである。C3はナデが弱くなり段がはっきりしない。C4はさらに口縁端部に面取りがなされ、上方に尖っている。これら小皿Cの変化は少なく、これ以降の時期の変化も微妙なものだろう。また時期的には、II-b期、12世紀中頃から出現し、III期、鎌倉時代に続く。

大皿Cタイプは1段ナデで、C5は口縁が外反する。C6は口縁が内彎し、段が明瞭である。C7はナデが弱く、段が不明瞭になり、口縁端部に面取りがある。器形も僅かに体部と底部の境が角をもち、鋭角的である。大皿CタイプはI期、11世紀代からIII期、13世紀までは続くと考えられるが、II-a期の資料が見当たらない。

〔Dタイプ〕 Dタイプは糸切り底をもつ小皿である。口径は9.2cm、器高1.4~2.0cmと、器高に差がある。また胎土中に赤グサリ礫が多く、砂粒もあらい。色調は赤褐色を呈している。D1は器壁が薄く、口縁が外反する。D2は底部が高台状に残り、口縁が大きく外傾し端部が細く丸い。D3は底が厚く、口縁は外傾する。D4は底部から口縁までゆるやかにカーブし全体に丸い。D5は底部は厚く、口縁は内彎する。D6は器壁が厚く、口縁が外反する。この小皿DタイプもI期、11世紀後半からII-c期まで見られる資料である。

〔Eタイプ〕 Eタイプは糸切り底をもつ杯である。口径は14.8~16.4cm、器高は4.0cmである。胎土はDタイプ同様、赤グサリ礫が混じるもので、色調は赤褐色を呈する。

E1は体部が屈曲し、口縁が外反する。E2は体部と底部の境が明確で、体部に弱い屈曲があり、稜をもつ。口縁は外反し、器壁は均一である。E3は口縁が大きく直線的に開き、やや大型化する。E4は器高が低く、口縁は直線的に開く。これらのEタイプもI期からII-c期までは続いている。

〔Fタイプ〕 Fタイプは底部糸切りで、口縁が外反する。外見は高台風に見えるが、内面底がえぐられている杯である。口径13.0~14.7cm、器高4.6cmで、胎土はD・Eタイプ同様、赤グサリ礫を含み、色調は赤褐色を呈する。このFタイプは12点と少なく、しかも完形になるものは僅か3点である。遺構出土のものも少なくタイプとしては第5表のような3つの形式になる可能性がある。これは古いタイプは内面の屈曲が著しく、また口縁は若干内彎がみで、新しくなるにつれて、内面の段がなくなり、単なるカーブになる。また口縁も大きく外反するものと考えられる。

このFタイプは平安京では見られず、果下では摂津から播磨地方に見られる。果下の例として、三田市平井遺跡⁽⁹⁹⁾、神戸市北神第4地点⁽¹⁰⁰⁾、神戸市神出遺跡⁽¹⁰¹⁾、姫路市本町遺跡⁽¹⁰²⁾、同丁・柳ヶ瀬遺跡⁽¹⁰³⁾、龍野市小犬丸遺跡⁽¹⁰⁴⁾、揖保川町宝林寺北遺跡⁽¹⁰⁵⁾、相生市下土井遺跡などで出土している。ただこの形態は須恵器を模倣しており、形態差や時期差もかなりあると考えられる。古いものは11世紀代のものがあるが、当遺跡ではII-a期~II-c期に入る資料と考えている。

〔Gタイプ〕 Gタイプは糸切り底をもち皿部が非常に扁平な托状皿である。口径8.8~10.0cm、器高2.3cmで高台部が高い。胎土は糸切り底をもつ土器特有の赤グサリ礫を多く含み、色調も赤褐色を呈する。この遺物も数量が僅かで、分類が難しいが、口縁端部がつまみ上げられているものが斬くなるのかも知れない。

このGタイプは平安京では僅かではあるが出土し、果下でも、神戸市宅原遺跡⁽¹⁰⁶⁾、同神出遺跡⁽¹⁰⁷⁾、姫路市本町遺跡⁽¹⁰⁸⁾、龍野市小犬丸遺跡⁽¹⁰⁹⁾、揖保川町宝林寺北遺跡⁽¹¹⁰⁾、相生市下土井遺跡⁽¹¹¹⁾、但馬の関宮町山崎A遺跡⁽¹¹²⁾、出石町宮内遺跡⁽¹¹³⁾で出土している。また神出遺跡では老ノ口地点の集落跡を発掘した際に出土しており時期は11世紀末であった。この例などから、Gタイプは11世紀~13世紀の資料で、大まかには、当遺跡と合致する時期である。

〔Hタイプ〕 Hタイプは平安京でよく出土している受皿である。最大径9.8cm、器高1.1cmで扁平なもので、器体の屈曲度は強い。胎土は精製されたもので、色調は褐色を呈する。当遺跡では1点のみの出土である。果下では、西宮市西宮神社境内遺跡⁽¹¹⁴⁾、神戸市玉津田中遺跡⁽¹¹⁵⁾、揖保川町宝林寺北遺跡⁽¹¹⁶⁾で出土している。量的には非常に少ない。

以上、皿・杯類の分類と大まかな時期的な変化を概説した。前述したように、この分類は編年を示したのではなく、あくまで形態などがあうものをグルーピングしたものである。またA~Dタイプの精製された胎土をもつ土器は平安京からのものとは言えないだろ

うが、少なくとも摂津中央部付近からもたらされた可能性が高い。しかし、これらのタイプの内にも赤クサリ磁が目立つものも若干あり、中央の影響を受けて地方製作されたことを証明するものかも知れない。これに対して糸切り底を有する、D～Gタイプの土器は須恵器の影響を強く受けており、須恵器生産地で製作された可能性が高い。その一例としては神戸市神出窟跡から出土している²⁰。しかしこの生産地が単一に限定できるものか、広域的に考えることも必要であろう。

(2)土師器の編年

土師器の編年はここ10年の間に平安京を中心として多く試みられている。またそれらは細部で違いはあるものの大略的な編年についてはほぼ同じであり、確立されたものと理解してよいようである。しかし、当時の土器様式は各地方でめまぐるしく変化していることが判明し、その相互関係などを明らかにすべく、中世土器研究会などの研究グループによって勢力的に各地の編年作業が進行しつつある。今回の試案も平安京の編年や、研究会の積み上げられた資料を基にして考えたものであり、前記の成果に負うところが大きい。

対中遺跡の古代末～中世初頭の土師器は第4表の分類にあるように、皿・杯を中心として甕や高杯などがある。ここでは、遺構から出土した一括資料を基準として編年を試みた。しかし、一部柱穴や包含層出土遺物で補ったところもある。また資料数の少ない杯F、托状皿G、受皿H、高杯、甕については、おおまかな位置づけしかできず、今後の資料増加を待ち、検討したい。

編年を試みた器種は小皿・大皿・杯類である。これは図示できた土師器のうち、小皿が多いことが判る。

それでは各期毎に説明を行う。

I期は遺構出土の一括遺物はなく、掘立柱建物の柱穴出土の遺物や、包含層出土のものを扱っている。この時期には小皿A1・D1・大皿B2・C5・杯E1があげられる。これらはいずれも器壁が薄く均一で、しかも口縁が外反していることが共通している。D1とE1は地方産の土器であり、平安京の編年には登場しないが、II-a期のセットに存在するD2・E2に先行する型式として考えられることからこの時期に位置づけた。しかしD1については鎌倉時代に形態的に類似する資料があり、新しくなる可能性を含んでいる。小皿A1は「て」字状口縁の皿でも屈曲が強くシャープな感じで、古いタイプである。また平安京ではこの小皿にはB1・C1などの若干外反する大皿が同期にある。

泉下では尼崎市金栗寺貝塚で同時期のものが出土している。特に報文中の図版1-3の口縁が外反し、体部が大きく屈曲する杯は当遺跡の197に酷似する。

これらのI期の時期は11世紀後半に位置づけられよう。

II-a期は溝4・16の土器が一括性を帯びている。小皿Aは「て」字状口縁の屈曲が弱

くなり、京都では大皿の「て」字状はなくなっている。そして小皿B1が出現する。B1は2段ナデで調整され口縁は内彎するが、本来前段階には外反する小皿が存在した可能性があり、それが発展したものと考えられる。小皿Dは口縁がシャープに外傾する。大皿Bは内彎し丸みをおびる。杯Eは均整のとれたしっかりした器形で、体部が内彎しながら口縁端部で外反する。杯FはII-a期に位置づけたが、前後する可能性がある。これらの土器のうち2段ナデをもつB類は内彎傾向を示し、全体的に丁寧な作りである。

県下でのこれらの資料は川西市下加茂遺跡の土壘一括土器があるにすぎない。時期的には「て」字状口縁の小皿A2を11世紀末～12世紀初頭と考えているものもある。ここでは中央との多少の時間差を考慮し、11世紀末を含み、その主体は12世紀初と考えたい。

II-b期は溝3・10・11・13・23など多くの遺構から遺物が出土している。小皿Aの「て」字状口縁の皿はすでに退化し、「て」字がくずれており、口縁端部内面には屈曲がない。この皿は口縁の屈曲が強いナデへと変化したため、Cタイプの小皿と区別しにくい状態にある。Cタイプは古くから存在すると考えられるが、当遺跡ではこの時期に出現している。C2はナデが明瞭で、ナデの上下に稜がつくことから、2段ナデ手法と見間違えることがある。小皿Dは底が厚くなり、口縁は内彎傾向にある。大皿Bは器高が低く上段のナデは弱くなっている。また1段ナデの大皿Cも内彎した状態で再度現れる。杯Eは器高が低く、口縁が開く、杯Fは内面の稜が弱くなる。またこの時期を中心に、受皿Hが存在する。外面の屈曲が強くて古いタイプになる。この他、器種が増え、多様化する。この時期は最も遺物量が多く、遺跡の全盛期を示しているのかもしれない。時期としては12世紀中頃を想定している。県下の遺跡ではこの時期の土師器皿が出土する所が多く、特にここ数年間に遺跡数が増加している。

II-c期は溝22や土壘1・2などの遺構から遺物が出土している。しかしいずれも土器が少量で各遺構や柱穴・包含層から代表的なものを抽出した。小皿Cはナデが弱くなり稜があまりつかない。小皿Dは口縁が外反し器壁が厚い。大皿Bは僅かに残るかも知れないが形態差は不明。大皿Cははナデ幅が広く稜も明瞭である。杯Eは器高が低くなり口縁も開く。杯Fも口縁が大きく開き、内面の稜はなくなる。托状皿Gはこの時期を含めて押さえられよう。これらII-c期の土器は僅かではあるが扁平化しており、皿の一部に口縁端部の面取りがみられるものがある。時期としては12世紀末を想定している。

この時期はII-b期同様、最近の発掘資料に多い。これまでの主な報告例としては西宮市西宮神社境内遺跡や摂保川町宝林寺北遺跡などがある。

III期は井戸1、溝9、木棺墓から遺物が出土している。特に井戸1は保存状態が良好なため調整痕も明確に残っている。また一括性の高い遺物であるが、土師器は皿類のみの資料である。小皿Cはさらにナデがよわまり、僅かな調整痕のみとなる。そして口縁端部が

第5表 土師器編年表-I

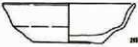

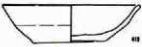
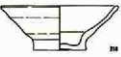
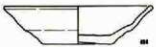



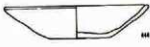


| 時代 | 時期区分 | 小皿 A・B・C | 小皿 D | 大皿 B・C |
|--------|--------|----------|------|--------|
| 1100 | 平 期 | | | |
| | | | | |
| | 安 期 | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| 時 期 | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| 代 期 | | | | |
| | | | | |
| 1200 | 鎌倉時代 | | | |

面取りされるものが多い。大皿Cはナデが弱くなり、器形は底が扁平で、体部との境が明瞭になる。また小皿C 4同様、口縁端部が面取りされる。小皿DはIII期には存続しない可能性がある。しかし他の器種については、何らかの要因で井戸内に投棄されなかったことも考えられ、資料増加を待ちたい。時期としては平安京の編年では、皿の口縁面取りや大皿の口径が減少する段階にあることから13世紀初頭に位置づけられており、当資料もほぼ

| | | | |
|----------------|----------|-------------|--------|
| | | | |
| 手づくね 小皿 38% | 大皿 11.5% | 糸切 小皿 9% | 大皿 16% |

第6表 土師器 手づくね・糸切り土器百分比

土師器編年表-II

| 杯 E | 杯 F | 托状皿 G | 受皿 H |
|---|---|---|---|
|  | | |  |
|  |  | | |
|  |  |  |  |
|  |  |  | |

同時期が想定されよう。

県下では一括資料として西宮神社の他、和田山町秋葉山1号墳からの祭祠遺物がある。また最近の大規模な発掘資料中にも数多くある。神戸市宅原遺跡豊浦地区の井戸はこのⅢ期及び直後の一括資料である。その井戸からは杯Eが明らかに存在した他、土釜・甕・須恵器・瓦器など豊富な資料が出土しており、今後13世紀の編年において欠くことのできない資料になろう。

以上、対中遺跡出土の土師器をもとにⅠ期～Ⅲ期までの編年を説明した。なお今回の編年試案は摂津でも旧の有馬郡（北神戸・三田）地方にあてはめることが可能であろう。しかし細部については、各遺跡の性格等から若干変化していることも考えられる。また今回







の編年は一括遺物のみで組立てられなかったことや、須恵器など多種の土器と総合的に編年することが困難な状況にあることは一部不安要素として残る。しかし平安京の編年が一部合致することや、胎土・形態が異なる土器がその編年に合わせることができた。このことは、地方産の土器を主体とする遺物群に大まかな時期を与えられることが重要となった。

今後、一括遺物を中心に、須恵器・陶磁器などを合わせ、充実した編年が必要である。

2. 瓦器・黒色土器について

瓦器・黒色土器は、溝4・溝10・溝11・井戸1・ピット3・ピット34の各遺構および包含層より約10個体出土している。瓦器碗については、特に体部および高台の形態から井戸

第7表 瓦器・黒色土器編年表

| 時代 | 時期区分 | 瓦器碗 | 瓦器碗(平高台) | 黒色土器 |
|------|-------|---|---|---|
| 平安時代 | I期 | | | |
| | II-a期 |  | | |
| | II-b期 |  |  |  |
| | II-c期 |  | | |
| 鎌倉時代 | III期 |  | | |

1 出土のものとしてそれ以外の遺構出土のものとの2つに大きく分類できる。黒色土器については、溝11での瓦器碗527との共伴例より、後者の瓦器群と時期を同じくするものと考えられる。そこで、当前においては、それぞれの瓦器・黒色土器の時期について検討していくことにしたい。なお、瓦器、黒色土器の時期的検討にあたっては、瓦器・黒色土器そのものの編年的検討方法と共伴遺物との比較方法との2通りが考えられるが、ここではまず前者の方法で検討を始めていくことにする。なかでもその研究が盛んな瓦器碗を中心に時期の検討をおこなっていくことにしたい。

瓦器碗の編年的研究については、古くは稲垣氏以来おこなわれてきているが、橋本氏⁽³⁴⁾が上牧遺跡の報告において楠葉型・和泉型・大和型といった地域性を明らかにして以来、各地域単位での研究が盛んになりつつある。したがって、対中遺跡

| |
|---------|
| 瓦 器 小 皿 |
|---------|

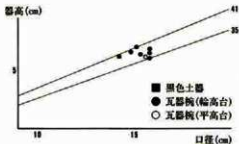


出土の瓦器碗の時期的検討を行うにあたっては、この地域性を考慮に入れる必要がある。しかし、対中遺跡の所在する三田盆地においては、近年ようやく瓦器碗の出土資料の増加がみられる段階である。加えて、時期的にも鎌倉時代初頭と考えられるものが大半である。そこでまず、形式的にやや新しいと考えられる井戸1を除く対中遺跡出土の遺構にともなう資料に共通して認められる瓦器碗の特徴を明らかにしておきたい。

- ① 体部は深い椀形を呈し、器高指数は35～41をしめす。
- ② 口縁部に指1腹分の横ナテ調整が施され、外面には明瞭な段が認められる。また、端部内面には、沈線は施されない。
- ③ 器壁は約0.5～0.6cmと比較的厚く仕上げられている。
- ④ 高台は、断面方形の重厚なつくりで、高台高0.5～0.7cmと器高全体に占める割合が高い。
- ⑤ 体部内外面とも横方向のミガキ調整により仕上げられているが、内面の方が比較的密に施されている。内面のミガキ調整は、全面に施されているが、むらが認められる。
- ⑥ 内面見込みにも一定方向のミガキ調整が施されているが、格子状・螺旋状のミガキは認められない。

以上の特徴は、楠葉型・和泉型などのものとは異なるものである。ところで当地域は、橋本氏の考察によると、「丹波型」の分布圏にあたり丹波型の特徴についていくつかの指摘がされている。その中で、口径に比べて大きい高台が付くこと、口縁部端部内面に

沈線を施さないこと、体部が内帯気味にたちあがり端部付近を強く横ナゲ調整していることなどの特徴をあげている。これらの特徴は、先に指摘した対中遺跡出土の瓦器碗と共通するものである。ただし、当遺跡の資料は内外面に暗文を施すなど、时期的に若干古い要素を備えていることは、考慮に入れる必要がある。



第8表 瓦器・黒色土器器高指数表

以上のことから、対中遺跡出土の瓦器碗は、概ね「丹波型」の瓦器碗の特徴を示しているものと考えたい。この、「丹波型」の瓦器碗については、大内城(京都府福知山市)の報告において編年・考察がなされている(以下、大内城編年)。それによると、器壁が厚めである点については対中遺跡例とも一致するが、口縁部内面に一条の沈線をもつこと、内面見込みに格子状の暗文を施すといった特徴とは明らかに異なる。また、多利遺跡群出土の瓦器碗の考察において、同じ「丹波型」圏内においても、地域差さらには遺跡単位の差の存在が明らかにされている。

しかし、瓦器碗そのものの时期的な大きな流れについては、概ね一致しているようである。そこで、大内城の編年および亀岡盆地における瓦器碗の編年(以下、亀岡編年)を参考に時期を検討していきたい。

対中遺跡出土の瓦器碗のなかで、高台が断面方形を呈し、その高さが器高全体のなかでかなりの比率を占めている点、内外面にミガキ調整が施されている点において、古式に属することは確実である。大内城編年のⅡ期の瓦器碗において、外面のミガキ調整が粗雑である点を考慮に入れると、Ⅰ期に近い特徴をもつものと考えられる。また、亀岡編年においても、Ⅰ-Ⅰ段階の特徴に最も近いものである。

ところで、対中遺跡において、瓦器碗と相伴した土師器・須恵器の編年(第5表)を参考にすると、大きく同時期と考えてきた瓦器群について若干の細分が可能と考えられる。つまり、419については、器高指数および高台の形態からこれらの一群のなかでも古い要素を持つものと考えられる(Ⅱ-a期)。さらに包含層出土の240については、419と同様の理由から逆に新しい要素を持つものと考えられる(Ⅱ-c期)。

以上の大内城編年・亀岡編年との比較および対中遺跡における相伴土器との比較の両作業の結果、両者のもつ年代観には若干の差が生じてくる。しかし、本報告においては、対中遺跡から量的にまとまって出土しており、しかも編年作業が比較的すすんでいる土師器・須恵器との相伴関係を重視して、後者の年代観をとりたい。つまり、Ⅱ-a期を12世紀前半に、Ⅱ-b期を12世紀中葉に位置付けたい。なお、大内城編年・亀岡編年との年代観の相違については、今後検討しなければならない問題である。

次に、井戸1出土の瓦器碗についてであるが、底部の一部しか残存していないため、高台の形態を主な検討対象とせざるをえない。この瓦器碗は、高台がかなり退化しているが、13世紀前半と考えられる。

最後に、対中遺跡出土の瓦器碗・黒色土器について気付いた点を若干述べておきたい。それは、瓦器碗238に認められる黒色土器528との形態上・技法上の共通性である。つまり、高台が糸切りにより平高台であること、体部が深い椀形を呈し、器高指数もほぼ同じであること、ミガキ調整法が黒色土器に似ていること、などの点である。

平高台を有する瓦器碗については、対中遺跡を除いては東奥1号墳⁽³⁾(兵庫県水上郡柏原町)・丹波三ツ塚遺跡⁽⁴⁾(岡山市町)とその分布が水上郡に限られていた。対中遺跡出土の瓦器碗については胎土分析を行わなかったため、水上地域からの搬入されたものなのか、対中遺跡周辺で製作されたのかについては明確にできないが、今後、当タイプの瓦器碗についてはその分布域について検討の余地がある。

ところで、黒色土器528のような底部糸切りによる平高台を有するものは、丹波・丹後地方に分布が認められている。そこで238の瓦器碗については、528に代表される丹波・丹後型黒色土器の模倣の可能性も考えられる。このような意味において平高台を有する瓦器碗については、広義の「丹波型」とは別の「丹波型」として捉えることも可能である。

ただしこれらの瓦器碗は、現在のところ、いづれも12世紀前半～中葉を中心とする時期のものとして限定的に限定されている。

つまり対中遺跡の黒色土器と瓦器は、溝11での共存事実および器高指数の類似性などから、黒色土器からの瓦器への転換を示す資料といえる。したがって、少なくとも前者から後者への転換は、丹波地域のなかで、独自におこなわれたものと考えられる。しかも、瓦器製作集団と黒色土器製作集団とは、少なくとも一時期は技術的なことを含めた接触があったことをしめしている。そして、238の黒色土器と528の瓦器碗はその過程を示すものであり、しかもその時期が対中遺跡出土瓦器・黒色土器編年試案II-b期つまり12世紀中葉にあたる。すくなくとも、平高台を有する瓦器碗の分布域においては、12世紀中葉までは黒色土器が存在し、この時期を境に瓦器碗への転換がなされたものと考えられる。

以上の検討から、対中遺跡出土の瓦器碗・黒色土器はその個体数は少ないものの、黒色土器の消長期および「丹波型」瓦器碗出現期つまり、当地域における黒色土器から瓦器への移行期の工人集団の様相を探る上での良好な資料と考えられる。今後の資料の増加をまわって、検討を加えていきたい。

3. 須恵器について

出土土器の須恵器について、神出窟産と考えられるものが見られることから、神出窟跡

の資料を使った編年に照らせて、少し触れて見る。当遺跡で最も多い碗では、大きく3期区分が可能であろう。①底部の突出する時期、②底部の突出が見られなくなり、体部と底部の境が明瞭な様となる時期、③底部から体部にかけて、丸く立ち上がる時期であり、①を11世紀末から12世紀前半頃に、②を12世紀中頃に、③を12世紀後半から末期頃に想定したい。

ただ、数点ではあるが、この範囲に入らなく、少し古いもの、少し新しいものも見られる。

各遺構で見ていくと、井戸出土土器は、12世紀前半から中頃に、溝4は11世紀末から12世紀前半頃が考えられる。

溝9は12世紀後半頃が、溝10は12世紀中頃が想定できる。溝11は混入品を除けば、11世紀の中で考えられそうである。

小皿は碗ほど変化が見られなくて、底部の突出する古いタイプの数点を除くと、12世紀前半代と考えられる。

溝10及び包含層出土品に見られる、山茶碗は、愛知県小牧の篠岡産と考えられ、⁽⁴¹⁾編年的には11世紀末から12世紀初め頃とされており、当遺跡で伴出する土器と比べ古い感があるが、伝世的な考えもあるかも知れない。

また、包含層出土品にあって、山茶碗写真的な土器も見られることが傍証となるかも知れない。

裏は数点と少なく、問題が残るが、神出産が目につく。

生産地に関すれば、12世紀代の神出窯産の口径・器高・底径の基準を参考に、当遺跡出土品を計測した結果、神出窯産の標準に合致するものは非常に少なく、バラつきが目立つ。肉眼観察による、胎土・つくりからの神出窯産品の検討では、ある程度の選別は可能であり、神出窯産とその他の割合は、神出産が3割前後と思われる。⁽⁴²⁾小皿は全て神出産ではなからう。神出産とその他の差異は、底部の周辺のつくりに顕著に見られ、その他産品はつくりが非常に粗い。その他とは、三田周辺の窯業地を考えたい。

4. 陶磁器について

村中遺跡からは、多量の国産の土師器、須恵器、瓦器と共に極く少量ではあるが、中国製の陶磁器が出土している。しかし陶磁器とはいうものの、その大部分を占めるのは白磁で青磁が僅かに3点含まれる以外、染付磁器、施釉陶器などは全く含まれていない。ここでは、⁽⁴³⁾横田・⁽⁴⁴⁾森田氏の分類及び森本氏の分類を参考にして、村中遺跡出土の白磁の概要について触れ、併せてその所属年代についても考えてみたい。

今回出土した胎載磁器は、溝・井戸・ピット内及び黒色・灰色包含層から出土したもの

を併せて図化しえたものは、32点を数える。

内、青磁には、越州窯系青磁碗Ⅱ類に分類されると考えられるものが1点、及び森本分類の龍泉窯系青磁碗Ⅳ類相当のものが1点及び体部外面にへう描きで蓮弁文を施文した後、帯描き文を施す龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6類に相当するものが1点の計3点含まれている。出土遺物の大半を占める白磁は、大きく碗と皿に区別され、他の器種は含まれない。

碗は全体で16点図化しえたが、その内、口縁部を小さな玉縁状に成形するⅡ類相当のものは5点含まれる。高台部を浅く削り出し、口縁部を大きく玉縁状に成形するⅣ類の碗は同じく5点含まれている。細く高い高台をもち、口縁部を外反させるⅤ類及び同様のプロポーションを呈し、底部内面に帯描施文するⅥ類の碗は、それぞれ1点ずつ含まれる。やや幅広く、中程度の高さの輪高台をもち、底部内面の軸を蛇ノ目状にカキ取るⅦ類の碗は1点含まれている。

皿については高台を有するものと平底のものに区分する森本分類に従って分類する。

先づ低く器肉の厚い削り出し高台を有する高台付皿Ⅰ類相当のものが2点含まれる。

又、底部をわずかに高台状に削り出し、全体的に薄く成形する平底皿Ⅱ類相当のものは2点含まれる。

また、平底で内面の底部と体部の界に沈凹線を廻らす平底皿Ⅳ類が1点、口縁部のみの残存で厳密な分類は不可能であるが、口縁部の形態から平底皿Ⅳ類に相当すると考えられるものが1点それぞれ抽出出来る。

以上をまとめると村中遺跡出土の船載磁器は以下のようにとまとめることが出来る。

| | | | | | |
|------|------------|------------------|------------|------------------|------------|
| 船載磁器 | 青磁—碗 | 龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6類…………… | 1点 | | |
| | | 越州窯系青磁碗Ⅱ類…………… | 1点 | | |
| | | 龍泉窯系青磁碗Ⅳ類…………… | 1点 | | |
| | 白磁 | 碗 | 白磁碗Ⅱ類…………… | 5点 | |
| | | | 白磁碗Ⅳ類…………… | 5点 | |
| | | | 白磁碗Ⅴ類…………… | 1点 | |
| | | | 白磁碗Ⅵ類…………… | 1点 | |
| | | | 白磁碗Ⅶ類…………… | 1点 | |
| | | | 皿 | 高台付皿—高台付皿Ⅰ類…………… | 2点 |
| | | | | 平底皿 | 平底皿Ⅱ類…………… |
| | 平底皿Ⅳ類…………… | 2点 | | | |
| | 平底皿Ⅵ類…………… | 1点 | | | |

次に各遺構及び包含層中からどの様な形で磁器が出土しているか見てみたい。

| | |
|--------|---|
| 溝11 | 白磁碗Ⅱ類 |
| 溝13 | 龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6類 |
| 溝3 | 白磁平底皿Ⅳ類 |
| 溝16 | 越州窯系青磁碗Ⅱ類 |
| 井戸1 | 白磁碗Ⅳ-1・b類 白磁碗Ⅷ-2類 |
| Pit 5 | 白磁碗Ⅳ類 白磁高台付皿Ⅰ-1類 |
| Pit 14 | 白磁平底皿Ⅳ類 |
| Pit 20 | 白磁皿Ⅴ類 |
| 包含層中 | 白磁碗Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類 白磁皿 高台付皿Ⅰ類 平底皿Ⅱ類 龍泉窯系青磁碗Ⅳ類 |

以上をふまえた上で、各遺物の所屬年代について考えてみたい。当遺跡では、非常に少量ではあるが、井戸、溝、Pit内などの遺構に伴って出土した遺物が認められる。本来、舶載磁器は地域を異にする他遺跡との時期比較をする場合、非常に有用であるが、遺跡内での時期決定には、大まかな幅のある時期しか与える事が出来ない。むしろ30年単位の時期決定には、共伴する土師器、須恵器、瓦器等の在地の土器について、分類、編年し、その結果から逆に磁器に遺構内に埋設された時期を与えるのが本来の方法である。しかし北摂地域に於ける土師器、須恵器の編年的研究は未だ確立しておらず、遺構内での一括遺物に確実な絶対年代を与える事は現在の所不可能であると言わざるを得ない。従ってここでは、横田・森田氏及び森本氏の研究の成果から、各類型の磁器に与えられている時期を参考にすると、白磁碗Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅷ類のみで形成される時期—11世紀中葉から12世紀前半に最も近い様相を呈していることが分る。従って上記の年代観に従えば、本遺跡で出土する磁器については、青磁が極端に少なく大部分が白磁で占められ、かつⅡ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅷのみで構成される事から、各遺構の埋設時期は、大まかに11世紀中葉から12世紀前半迄の時期に求める事が可能となる。

但し、この年代観は、大宰府における白磁の年代観をそのまま踏襲したに過ぎず、当該地域における、貿易陶磁の年代観については共伴する、土師器、瓦器、須恵器などの在地の土器の年代観が優先する事は言う迄もない。

5. 対中地区の墨書土器・呪符木簡

対中地区から出土した墨書土器はすべてが平安時代末～鎌倉時代に属する遺構や包含層から出土した。

墨書土器は36点出土しており、その内、須恵器が35点、磁器が1点で、須恵器がほとんどであり、土師器にはなかった。特に須恵器でも椀の体部外面に書かれたものが圧倒的に多い。

墨書は土器の外面に、口縁に沿った状態で縦書きされており、唯一の例外は600の椀である。これは内面に口縁から底部方向の縦書きされた「上料」が対称的に2ヶ所、墨書されている。また小皿では底部の内・外面に墨書がみえる。磁器については底部外面の高台内にある。

これらの墨書土器は遺構出土のものが多く、各々で文字に傾向が現れている。

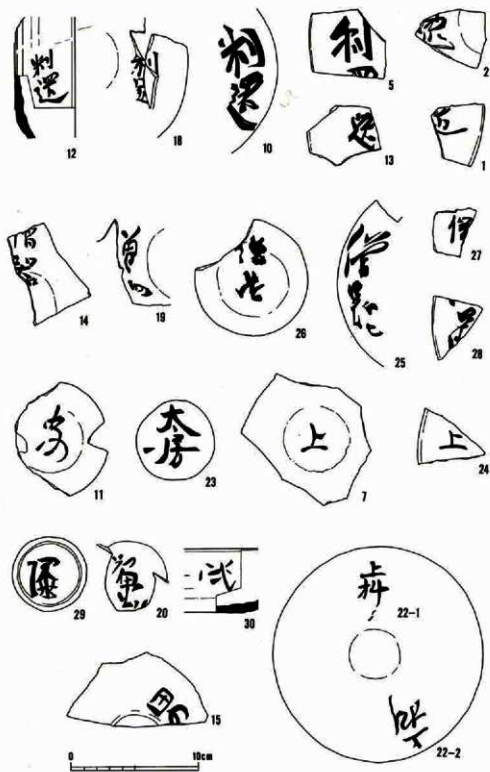
包含層及び柱穴出土の墨書土器はいずれも須恵器の椀には、「疋」や利・上などが見える。この程度の資料であれば、事実を押さえる上には乏しい。

文字については36点のうち、墨痕のみで全く判読不可能なものが半数の18点である。残り18点のうち、明確なものとしては井戸出土の「上料」600である。これは前述のように1個体に2ヶ所書かれ、保存状態が良好である。「料」とはひしゃくやはかりの意味であり、井戸内出土ということから、清水を汲んだ水をさらに分けるための、杓がわりの椀であったことが考えられる。

また井戸1からは「大房」598が出土している。これは寺院の僧房などの建物の種類をあらわすものであろう。また僧侶の名前を記したと考えられるもの「僧□」が井戸1から4個体599・596・No27・602、溝10から1個体511が出土している。溝10の例は「僧器」と読める可能性があり、僧の使用する椀をあらわしているものかも知れない。この他、「上」を記した椀が井戸1と包含層から出土した。井戸1出土の磁器碗底部外面に「漆」と読める可能性のあるものが出土しているが、杯部内面には漆と考えられるような物質は付着していないことや、貴重な磁器碗を漆の容器として使用することには疑問が残る。

溝や包含層から多数出土した墨書土器に「利送」あるいはそれに類する土器が多い。利或るいは疋（岡の古字体）などと考えられるものは9点あり、井戸からは出土していない。この他、溝10から出土した小皿の底面には「家」のくずし字と考えられるものがある。また「田□」の墨書も見える。特に「利送」の文字解釈については不明である。

これらの墨書土器から、井戸については寺院と深く関係するものかも知れない。またその周辺の遺構である溝などは寺院と関係ないとは言え切れず、むしろ何らかの関係があると言わざるをえない。しかし、「利」或は「送」や「疋」などの意味が判明すれば、より確定的な意味がみいだせるかも知れない。



第53图 对中区地区黑陶土器集成图

第8表 対中地区土器一覽表

| No. | 土器 | 出土最・土層 | 文 字 | 土 器 | 器種 | 記載位置 | 備 考 |
|------|-----|-------------------|----------------|-----|----|------|------------|
| 1 | 338 | D-15区 ピット12掘方 | (疋カ) □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 2 | 337 | P-25区 獨立4 ピット9 | (疋カ) □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 3 | | P-25区 包含層 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 4 | | P-25区 包含層 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 5 | | J-5区 包含層 | 利□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 6 | | J-5区 包含層 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 7 | | J-25区 包含層 | 上 | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 8 | | D-15 木棺墓1 | □□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 9 | | D-20区 溝9 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 10 | 456 | 溝8 | (透カ) 利□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 11 | 509 | P-25区 溝10 | (家カ) □ | 須恵器 | 小皿 | 底部外面 | |
| 12 | 513 | J-25区 溝10 | 利透 | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 13 | 514 | J-25区 溝10 | □疋 | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 14 | 511 | J-25区 溝10 | (僧カ)(器カ) □□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 15 | 516 | P-25区 溝10 | 田□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 16 | | V-30区 溝10 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 17 | | V-30区 溝10 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 18 | 532 | V-25区 溝11 | (利カ)(疋カ) □□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 19 | 531 | P-25区 溝11 | (僧カ) □□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 20 | 533 | J-20区 溝11 | □□ | 須恵器 | 碗 | 底部外面 | |
| 21 | | V-25区 溝11 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 22-1 | 600 | 井戸1 | 上料 | 須恵器 | 碗 | 体部内面 | 22-2と同一個体中 |
| 22-2 | 600 | 井戸1 | 上料 | 須恵器 | 碗 | 体部内面 | 22-1と同一個体中 |
| 23 | 598 | 井戸1 | 大房 | 須恵器 | 碗 | 底部外面 | |
| 24 | 601 | 井戸1 | 上 | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 25 | 599 | 井戸1 | (器カ) 僧□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 26 | 596 | 井戸1 | (器カ) 僧□ | 須恵器 | 小皿 | 底部内面 | |
| 27 | | 井戸1 | (僧カ) □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 28 | 602 | 井戸1 | (僧カ)(器カ) □□ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 29 | 618 | 井戸1 | (透カ) □ | 磁 器 | 碗 | 底部外面 | |
| 30 | 597 | 井戸1 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | |
| 31 | | 井戸1 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 32 | | 井戸1 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 33 | | 井戸1 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 34 | | 井戸1 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 35 | | 井戸1 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |
| 36 | | 井戸1 | □ | 須恵器 | 碗 | 体部外面 | 図なし |

当地方出土の黒書土器の例は三田市貴志遺跡⁴⁶³で「向」「久安」や記号などが出土し、宅原遺跡⁴⁶⁴豊浦地区では「有田」「中西」の人名或は地名と考えられる土器が出土しており、平安末～鎌倉時代初の資料は今後増加するものと考えられ遺跡の性格を推定しうる資料として重要なものと言える。

呪符木簡は井戸1から出土した。これは多量の土器や木器などと出土したものである。この木簡は前述したように、扁平なヒノキ材を札状にしたもので、その表面には「南□奈□化□大□□□蘇民^(表)□□子孫也□[]」と書かれており、古代末からみられる呪いなどの蘇民将来の呪符木簡であることが判明した。

古代末～中世の呪符木簡については今や、全国的に見えられつつある。兵庫県下においては、「蘇民将来」木簡は現在のところ、対中遺跡の1点のみである。同時期の代表的な呪いの木簡である急々如律令の木簡は別表のように6遺跡9点⁴⁶⁷が出土している。古代末ごろから使用されはじめたこれらの木簡などの札は形態・質・意味など若干変化しながら現在でも長野県上田市の国分寺で蘇民将来の札が発行されているほどで、中世の民間信仰が現代まで根強く生きついている資料である。

8. 遺構の考察

古代末～中世初頭の遺構を主体とする対中地区では前述したように掘立柱建物跡9棟が想定され、溝の数も23を数える。建物跡については、柱の切り合い関係が激しかったことから、調査者にも不明な点が多い。そういう状況では溝がどの遺構の雨落ち溝になるのかまた、区画溝になるのか確実に押さえることは非常に困難な状況であった。また、建物跡に伴う遺物についても一括資料として扱えるものはなく、柱穴出土の遺物についても切り

第10表 兵庫県下の呪符木簡出土遺跡一覧表

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 出土時期 | 出土数量 | 出土遺構 | 備考 |
|-----|-----------|-------------|-------------|-----------------|--------|---------------------------------|
| 1 | 対中遺跡 | 三田市対中町 | S58.11 13c初 | 蘇民将来 1点 | 井戸 | 土器・木製品・鹿角件出土 |
| 2 | 宅原遺跡豊浦地区 | 神戸市北区兵衛町 | S62 | 鎌倉 嘸味尼急々如律令 2点 | 井戸・溝 | 土器・木製品・鹿角件出土 出灰委1点、砂見山麓調査区1点 |
| 3 | 初田館跡 | 多紀郡丹南初田 | S61 | 16c前 急々如律令 3点 | 井戸 | 呪符木簡? 他2点有り |
| 4 | 板井・寺ヶ谷遺跡 | 多紀郡西紀郡板井 | S59.7 12c後 | 急々如律令 2点 | 井戸・包含層 | |
| 5 | 長田神社境内遺跡 | 神戸市長田区 | S62 | 14c 嘸味尼・ 1点 | 井戸 | |
| 6 | 新方遺跡高ナギ地区 | 神戸市西区玉津町高津藤 | S59.8 14c | 急々如律令 2点 | 井戸 | |
| 7 | 玉津田中遺跡 | 神戸市西区玉津町田中 | S59 | 12～13c 急々如律令 1点 | 土庫 | 火焙杉木製品・平瓦・土器件出土 |
| 8 | 赤市久森遺跡 | 姫崎郡日高町赤市 | S61 | 9c 急々如律令 1点 | 流路 | 人形等木製模造品と伴出 |
| 9 | 但馬国府横立地 | 姫崎郡日高町水上字国田 | S61.12 9c | 急々如律令 1点 | 包含層 | 木骨・歯物等木製品多数出土 |

合っている柱との混入も充分考えられることから、ここでは溝や井戸などを中心に考察を試みた。その結果、11世紀の後半から、13世紀にかけての遺物が連続的に出土していることから、建物についても同時期に存在したものと考えられる。但し、掘立柱建物では不明なので、溝からその時期を考えた。(第11表)

I期については遺物は柱穴から出土していることから建物が存在したことは予想されるが、柱穴の構成が不明なため、確実なところはわからない。

II-a期にいたって溝4・16が該当する。これらの溝と関連する建物としては掘立柱建物跡3がある。

II-b期には遺跡の最盛期になり溝3・10・11・13・23など数が増す。この中で溝と遺構の関連が考えられるものは溝3と13である。溝3・2・12に囲まれる掘立柱建物跡2は対中地区の東部に位置する。これに対し溝13と23に区画されたものは掘立柱建物跡4である。この建物は地区の中央及び西に位置し、地区内でも最大であり掘立柱建物跡2がすぐ東に位置している。しかし両建物は平面的に僅かに切り合っており、僅かな時間差があるのかもしれない。

II-c期に該当する遺構に関連する建物は不明である。またIII期についても直接に建物との関連がつかめなかった。これらのように建物の変遷については断片的にしか判らず、不明と言わざるをえない。

木棺墓は今回唯一の墓の例であるが、位置としては、掘立柱建物に隣接するか或いは建物下にあると言ってよいであろう。こういう例として、神戸市玉津田中遺跡⁽⁴⁹⁾や神戸市山田小学校内遺跡⁽⁵⁰⁾などがあげられる。これらは根本領主制の影響を受けたものであろう。

以上の平安時代後期～鎌倉時代初頭に位置付けられる建物群は規模が大きいことや、木簡などの遺物を伴う木組み井戸、その他多くの黒書土器中にも「大房」や「僧」「家」の文

第11表 出土遺物からみた対中地区遺構の年代

| 1100年 | | | | 1300年 |
|---------|-------|-----------|-------|---------|
| 平 安 時 代 | | | | 鎌 倉 時 代 |
| I 期 | II-a期 | II-b期 | II-c期 | III 期 |
| | | 掘 立 柱 建 物 | | |
| | 溝 4 | 溝 3 | 溝 22 | 井 戸 1 |
| | 溝 16 | 溝 23 | 土 壇 1 | 溝 9 |
| | | 溝 13 | 土 壇 2 | 木 棺 墓 |
| | | 溝 10 | | |
| | | 溝 11 | | |
| | | 溝 8 | | |

字から寺院の可能性はあるが、地方官衙や荘園に関連する遺跡である可能性もあり、結論づけることは避けた。

奈良時代の建物群については、小規模な建物から3棟検出したのみで、土器も少なかった。しかし、奈良時代と考えられる青銅容器片が出土していることや、付近から金心寺と同范の軒瓦が採集され、さらに、広畑地区で井戸が存在したことなど、これもまた寺院に関連する建物等の性格を考える必要もあろう。

弥生後期の土壌群については、顕著な生活跡がみられないことから、集落の中心ではないことが想像できる。

このように各時期にわたって、様々な性格の遺構が検出されたのである。今後、周辺の調査を進めてゆき、その各時期の遺構の性格に迫ってゆく必要がある。

〔註〕

- (1) 京都府教育委員会、京都市埋蔵文化財研究所、京都大学、同志社大学など各機関で势力的に研究が進められている。
 - a 平良泰久・奥村清一郎・伊野近富他 「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財調査概要1980—3』 京都府教育委員会1980
 - b 岡田保良・宇野隆夫・泉拓良・五十川伸矢 「京都大学埋蔵文化財調査報告II」 京都大学埋蔵文化財センター
 - c 横田洋三 「出土土師器Ⅲ編年試案」『平安京跡研究調査報告 第5輯 平安京左京五条三坊十五町』 縄古代学協会1982
 - d 横田洋三 「土師器Ⅲの分類と編年観」『平安京跡研究報告 第11輯 平安京左京四条三坊十三町』 縄古代学協会1984
 - e 鈴木重治・松澤和人 「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」 同志社大学校地学術委員会1978
 - f 伊野近富 「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集 第1集』 京都府埋蔵文化財調査研究センター1987
- (2) 藤原保明・橋爪康至・岡田務 「尼崎市金楽寺貝塚Ⅰ」 尼崎市教育委員会1976
- (3) 森田 聡 「瀬ノ奥遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会1983
- (4) 中川 渉他 「井ノ方遺跡」『青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(2)』 兵庫県教育委員会1988
- (5) 昭和59年兵庫県教育委員会が確認調査を実施し、11トレンチにて土壌内一掃土器中に存在した。
- (6) 現在のところ、兵庫県下では旧の摂津国しか出土していない。
- (7) 註2に同じ
- (8) 岡田章一・深井明比古 「平井遺跡」『青野ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 兵庫県教育委員会1987
- (9) 丸山 徹 「北神ニュータウン内遺跡 北神第4地点遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会1987
- (10) 山仲達・神崎勝・徳原多喜雄 「神出」 妙見山麓遺跡調査会1985
- (11) 山本博利・秋枝 芳 「本町遺跡」 姫路市教育委員会1984

- 02 岡崎正雄他『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会1985
- 03 森内秀造他『小犬丸遺跡』兵庫県教育委員会1987
- 04 渡辺昇他『宝林寺北遺跡』兵庫県教育委員会1987
- 05 松岡秀夫他『相生市下土井遺跡発掘調査報告書』相生市教育委員会1984
- 06 昭和62年度神戸市教育委員会が発掘調査を行った。安田 滋氏に御教示いただいた。
- 07 註10に同じ
- 08 註11に同じ
- 09 註13に同じ
- 00 註14に同じ
- 01 註15に同じ
- 02 昭和53年度美父郡岡宮町の山崎A遺跡で出土した。大平茂氏に御教示いただいた。
- 03 昭和55年出石町教育委員会の調査で出土した。森内秀造氏に御教示いただいた。
- 04 神戸市立博物館森田 稔氏の御教示による。
- 05 古川久雄『西宮神社境内地発掘調査報告書』西宮市教育委員会1983
- 06 兵庫県教育委員会が昭和59年辻ヶ内地区の池状遺構の発掘時に出土した。中川渉氏の御教示による。
- 07 註14に同じ
- 08 註24に同じ
- 09 本来は連続していたものであろうが、当遺跡の資料中にはⅡ-a期のものは抽出できなかった。
- 00 受け皿は当遺跡では細かな時期は決定できず、他遺跡の出土例を参考にし、大まかに12世紀頃と考えた。
- 01 藤井裕介・高島信之他『秋葉山墳墓群』和田山町教育委員会1978
- 02 昭和62年度神戸市教育委員会が発掘調査を行った。実見に際して、安田 滋氏にお世話になり、御教示いただいた。
- 03 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』（高槻市文化財調査報告書 第13冊）高槻市教育委員会1980年
- 04 橋本久和 前掲注33
- 05 伊野近高『京都府遺跡調査報告書 第3冊 大内城』京都府埋蔵文化財調査研究センター1984年
- 06 加古千恵子・平田博幸『多利遺跡群発掘調査報告—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(VII)—』（兵庫県埋蔵文化財調査報告書第46冊）兵庫県教育委員会1987年
- 07 石井清司・引原茂治・伊野近高『亀岡盆地出土の瓦器について』『京都考古』第37号1985年
- 08 喜谷美直・真野修『柏原町東第1号墳・拳田古墳発掘調査報告書』（兵庫県文化財調査報告書第10冊）兵庫県教育委員会1973年
- 09 丹波三ツ塚遺跡発掘調査団『丹波三ツ塚遺跡Ⅱ』兵庫県水上市市島町1975年
- 00 森田 稔『東播磨中世須恵器生産の成立と展開』神戸市立博物館研究紀要第3号1986年
- 01 註24に同じ
- 02 註24に同じ
- 03 横田賢次郎・森田 勉 1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—』『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
- 04 森本朝子 1984『博多出土貿易陶磁分類表』『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』福岡市教育委員会

- 99 高島信之・山崎敏昭他【武庫川下土地改良区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録'81~'87】
三田市教育委員会1988
- 99 『第2回長尾町埋蔵文化財展資料』神戸市教育委員会1987
- 99a 「初田館跡現地説明会資料」兵庫県教育委員会1986
- b 「兵庫・初田館跡」【木簡研究 第9号】木簡学会1987
- c 「板井・寺ヶ谷遺跡」【兵庫埋蔵文化財調査年報 昭和59年】兵庫県教育委員会
- d 丹治康明「兵庫・新方遺跡」【木簡研究 第7号】木簡学会1985
- e 山本三郎「兵庫・玉津田中遺跡」【木簡研究 第8号】木簡学会1986
- f 加賀見省一「兵庫・袴布ヶ森遺跡」【木簡研究 第9号】木簡学会1987
- 99 兵庫県教育委員会が昭和58年度、徳政地区の発掘調査で掘立柱建物跡に隣接して木棺墓を検出した。
- 99 「山田小学校内遺跡」【昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報】1987
- 99 根本領主とは開発領主とも言い、平安時代以来の開発によって本領を確立し伝領した中世在地領主の典型。本格的な在地領主の成立は平安時代中期で、出身階層は在地の上層で、根本領主(開発領主)には郡・郷司や荘官級の領主と、国司・五位官人数の領主との二階層があり、身分上では百姓に属する土豪から中央貴族の子弟までを含み、また職能では武士を主としながらも、中下級官人・神職・寺僧などの開発者も伴っていた。

第4章 広畑地区・森下地区

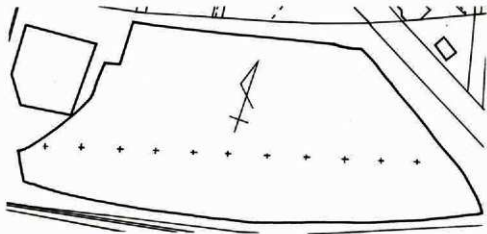
第1節 広畑地区の調査

1. 概要

広畑地区は対中地区の東方約75mの距離にある。調査区の西端には大きく落ちる段丘崖があり、対中地区との比高差は約2mある。調査では西の段丘崖下にも調査区を設定したがここからは遺構・遺物とも検出されなかった。調査区の東側は現道によって制約されているが、道を挟んだ北側にグリッドを設定して調査したところ、本調査区に続く溝が検出されたことから、現道下にも同様の遺構が残されていると思われる。但し、森下地区の調査では本調査区から続くような遺構は確認されていないことから、本調査区で検出された溝等の遺構は現道下を通過して北側の調査区外に抜けるものと考えられる。調査区内では東端にも段丘崖があり、それ以下は沖積地の地形となる。段丘面上には弥生時代後期から近世・現代に至る遺構が残されていたが、それは同一面で検出され、かなり削平されている。調査区東端の段丘崖下から沖積地にかけては何面もの遺構面が確認され、調査では部分的なものを合わせて8面以上の面を検出した。

本報告ではある程度まとまった時期を考慮したうえで計5のステージを設定し、上層から順にステージ1-近世以降、ステージ2-奈良時代から平安時代前半、ステージ3-古墳時代後期、ステージ4-弥生時代後期から古墳時代前期、ステージ5-弥生時代前期、ステージ6-弥生時代前期以前としている。

基本的土層地積の状況であるが、最上層は当地に民家や鶏舎を建てる際に盛られた碎石

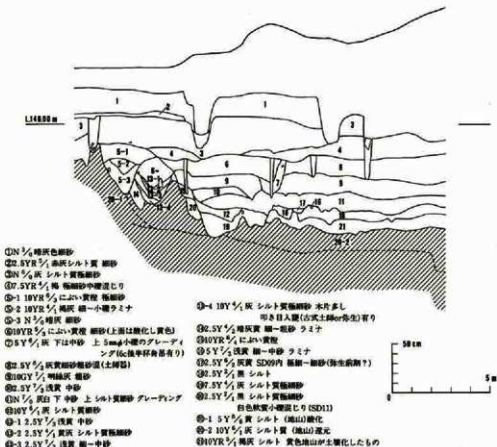


第54図 広畑地区 調査区設定図 (S=1:500)

混じりの盛り土である。この盛り土がなされる際に旧境界溝に塩ビのパイプやコンクリートを埋め込んでいる。盛り土下は旧耕土・床土となり、耕作地であったことがわかる。床土の下面から瓦を利用した暗渠排水が掘られている。調査区の西半はベース面となるが、東半ではその下は土壌化した土層であり、おそらく、4層程度に分層することが可能である。中・近世頃の耕土であろう。その下層には部分的に奈良時代から平安時代にかけての包含層が堆積しており、この段階で下位の段丘崖はほぼ埋没する。これより下層ではこの段丘崖に沿った形で何度も溝が作り変えられており、下層にいくにつれ、つまり段丘が本来の高さを持つにつれ、溝は東へと移動する。この東半でのベース面は段丘を形成する礫層ではなく、灰色粘土層と考えている。

2. ステージ1 近世以降の遺構

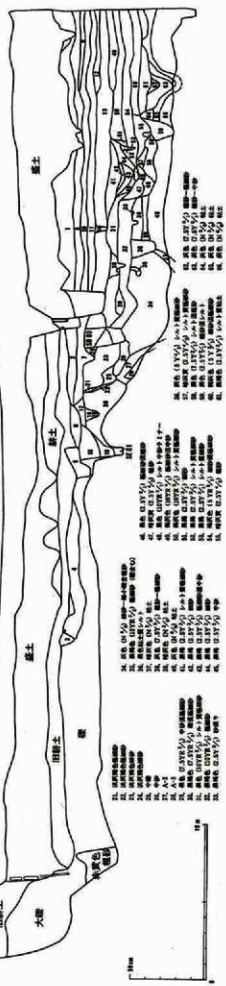
重機を使ってコンクリート基礎・盛り土・旧表土を除去すると、調査区の西半では基盤層である細礫層が既に現れ、平坦地となっている。これは明らかに削平を受けたためであり、そのため検出された遺構はわずかしか残っていないか、削平を受けた後のものである。



第55図 広畑地区 東壁基本土層図

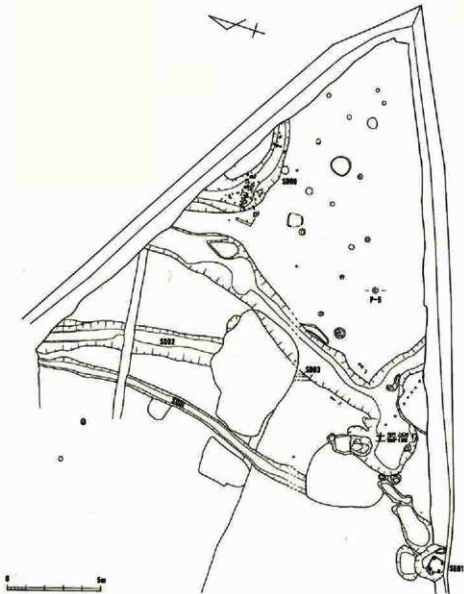


1. 講堂 (27.5%) 特別講堂 (2.5%)
2. 大禮堂 (35.0%)
3. 講義室 (10.0%)
4. 特別講堂 (2.5%)
5. 特別講堂 (2.5%)
6. 特別講堂 (2.5%)
7. 特別講堂 (2.5%)
8. 特別講堂 (2.5%)
9. 特別講堂 (2.5%)
10. 特別講堂 (2.5%)
11. 特別講堂 (2.5%)
12. 特別講堂 (2.5%)
13. 特別講堂 (2.5%)
14. 特別講堂 (2.5%)
15. 特別講堂 (2.5%)
16. 特別講堂 (2.5%)
17. 特別講堂 (2.5%)
18. 特別講堂 (2.5%)
19. 特別講堂 (2.5%)
20. 特別講堂 (2.5%)

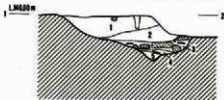


1. 特別講堂 (2.5%)
2. 特別講堂 (2.5%)
3. 特別講堂 (2.5%)
4. 特別講堂 (2.5%)
5. 特別講堂 (2.5%)
6. 特別講堂 (2.5%)
7. 特別講堂 (2.5%)
8. 特別講堂 (2.5%)
9. 特別講堂 (2.5%)
10. 特別講堂 (2.5%)
11. 特別講堂 (2.5%)
12. 特別講堂 (2.5%)
13. 特別講堂 (2.5%)
14. 特別講堂 (2.5%)
15. 特別講堂 (2.5%)
16. 特別講堂 (2.5%)
17. 特別講堂 (2.5%)
18. 特別講堂 (2.5%)
19. 特別講堂 (2.5%)
20. 特別講堂 (2.5%)

第4章 広域地区・地下地区



第57図 ステージ2・3 遺構図



1. 褐色極細砂
2. 褐色細砂混り極細砂
3. 灰褐色粗砂
4. 暗褐色極細砂
5. 黒灰色シルト質極細砂

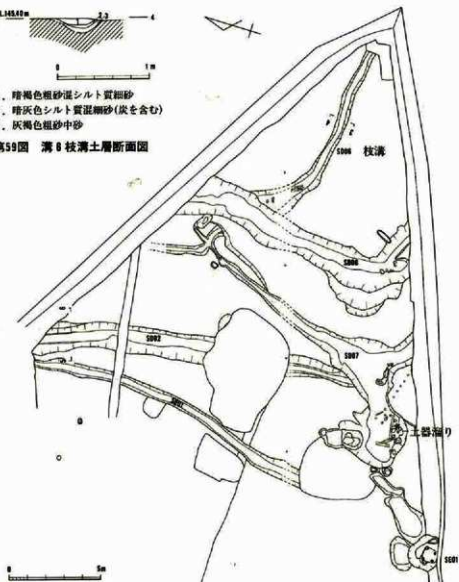
第58図 溝3 土層断面図



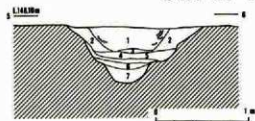


1. 暗褐色粗砂混シルト質細砂
2. 暗灰色シルト質混細砂(炭を含む)
3. 灰褐色粗砂中砂

第59図 溝8枝溝土層断面図

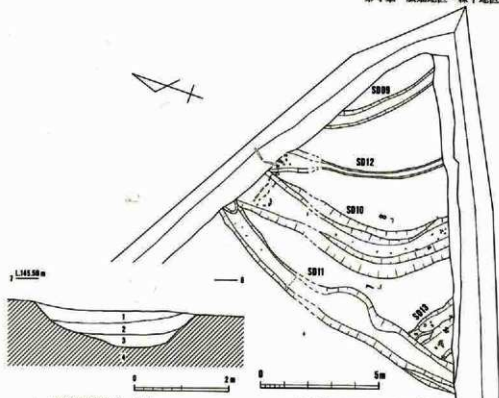


第60図 ステージ4 遺構図



1. 黒褐色細砂(ベースブロック含)
2. 黒褐色極細砂
3. 淡黄褐色極細砂
4. 黒褐色シルト質極細砂
5. 白灰色シルト質極細砂(ベース類似)
6. 黒褐色シルト質極細砂
7. 5、6層ブロック

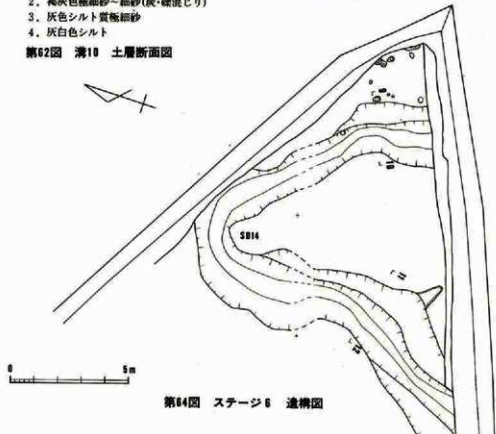
第61図 溝2 土層断面図



第63図 ステージ5 遺構図

1. 灰黄褐色極細砂～中砂
2. 褐灰色極細砂～細砂(炭・礫混じり)
3. 灰色シルト質極細砂
4. 灰白色シルト

第62図 溝10 土層断面図



第64図 ステージ6 遺構図

検出された遺構は溝・土壌・溜池状遺構・耕作痕であり、家が建つ以前にはここは畑あるいは水田であったようだ。調査区を区切るように溝・杭列・段落ちが見られ、それから見ると調査区内には5～6枚の畑あるいは水田が営まれていたことがわかる。これらの溝は幅50cm程度、深さ20cm以下の小規模のもので埋土は土壌化している。杭列は調査区の中央を東西に走る溝に沿って打たれており、全て丸太杭である。この他に暗渠排水と考えられる溝が2条検出されており、幅約15cm、深さ約15cmの規模をもつ。一方は溝底の両側に沿って直径5cm程の丸太を置き、板石で蓋をするものである。この板石は近辺で採取される凝灰岩質砂岩である。この暗渠排水は一枚の畑あるいは水田のなかに周溝状に廻らされている。もう一方の暗渠排水は先のものに付設するもので、瓦を利用して蓋としている。この暗渠排水は東方に流れている。これらの暗渠排水は調査区内のこの箇所には見られないが、これはこの部分が細礫層ではなく、非常に堅く締まった極細砂質シルト層である故に排水が必要となるためであろう。この他にも調査区の西端では段丘壁と並行に溝4が走る。この溝も深さ5cm程度のものだが、幅は約2mほどあり他のものとは規模が異なる。丹波焼甕破片などが出土しており18世紀後半以降のものと考えている。

調査地の西半では、幅約30cm、深さ約3cmの小溝が南北方向に十数条列をなして検出された。この地点では小礫層の直上に旧耕土が覆っており、これらの小溝内の埋土も旧耕土に類似するため、耕作痕あるいは畑などの畝の最下部のみが残されたものと考えた。ここからは陶器片を利用した土面子が出土している。

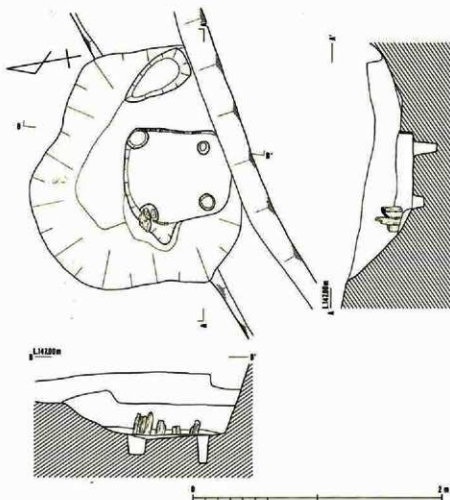
溜池状遺構は、約5.8m×4.5m、深さ1.5mの規模を持ち、西側には約2.2m×2.8m、深さ約0.8mの段を持つ。池底には粘土質のシルトが堆積しており、小枝・竹などの植物遺体が含まれていた。それより上方は拳大の礫を充填しており、人為的に埋められたことが判る。この溜池状遺構は溝や杭との切り合いから、溝・暗渠排水・耕作痕より古い時期のものと考えているが、やはり近世以降のものであろう。

この他、性格不明の方形土壌などがあるが、ほぼ同時期のものと考えている。

3. ステージ2 奈良時代から平安時代前半にかけての遺構

検出された遺構の中でこの時期に属するものには、井戸1・溝5・溝3・土器溜まり・柱穴がある。

井戸 (SE01) は土層観察用のトレンチ掘削時に検出された。平面約1.8m×1.6mの隅丸方形の土壇を約0.5m岩盤を掘り込んでつくられている。井戸枠は一辺約0.8mの方形で四隅に直径10cmほどの丸太材や角材を打ち込み、その間に幅10cmほどの縦板を組むものである。横板は見つかっていない。削平を受けているため本来はもう少し深さを持っていたものであろうが、対中地区で検出されたものと比較しても小規模のものである。地下水の



第65図 井戸1

水みちをあてているものではなく、岩盤上を覆う礫層中の水を溜める構造のものであろう。この井戸と不定形の窪みを挟んでつながる土器溜まりからは同時期の遺物も見つかっており、さらに溝3につながっていた可能性もあるが調査では確認できなかった。出土した遺物はわずかに数点ではあるが、奈良時代に限定されており墨書土器1点を含んでいる。

溝5は表土直下で検出されており、幅は1～3mと南に行くほど広がっているが、深さは10cm弱しか残っていなかった。埋土は単一層で、近世の遺構のものとは異なっている。遺物も上面近くでは表土直下のため近代にいたる様々な細片を含んでいたが、溝底から出土したものを取り上げて同時期のものと考えた。

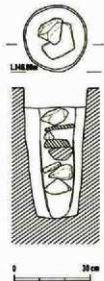
溝3は段丘の落ちを斜めに横切って走る溝で、その南端で溝2・溝7と合流し土器溜まりを作っている。幅1.3m、深さ25cmを測り、埋土中には土器と共に多くの礫を含んでいる。出土する遺物は弥生時代後期から古墳時代前期のもの、古墳時代後期のもの、奈良時

代から平安時代のものである。

土器溜まりは溝2・溝3・溝7が合流する調査区の南端で検出されたが、明確な形を持ったものではない。溝に直行する形で数本の枕が並んでおり、これは分水施設に伴う護岸あるいは井堰のために打たれた可能性が高い。溝はここで二本に分かれ、一方は南流し、もう一方がこの土器溜まりとなる。ここからは大小の礫が多く出土し、それに混じって、板材、自然木や縄文時代晩期・弥生時代前期から奈良時代にかけての土器、銅製丸柄、耳環なども出土している。この土器溜まりは平面的には溝によって井戸1に流れ込むように思われたが、底のレベルが一定しておらず、大小の土塊が混ざった形となるため、この両者が関連する遺構であるとは判定できなかった。

柱穴 調査区の西端で数ヶ所検出しているが、各々の対応関係は不明である。このうち柱穴5は直径約35cm、深さ約65cmの円形の掘り方をもち、その中央に直径約20cmの柱痕跡を確認した。柱自身は抜き取られていたが、丸太材を使用していたらしく樹皮だけが残存していた。柱抜き取り後、大小の石を詰め込んで埋められていた。これらの柱穴からはほとんど遺物が出土していないため、時期を決定することが不可能であるが、土層関係からこのステージの時期あるいはそれ以降のものと考えた。

井戸1は奈良時代に属するものであるが、他の遺構は時期を明確に特定することに難がある。



第66図 柱穴5

4. ステージ3 古墳時代後期の遺構

この時期の遺物を出土する遺構は溝1・溝3・溝8・土器溜まりがある。このうち溝3・土器溜まりについては前代・後代の遺物を含んでおり、その詳細についてはステージ2で述べている。

溝1は幅約0.5m、深さ約15cmの小規模のもので南端は後世の落ち込みに切られている。出土した遺物は土師器等の小片と古墳時代後期と考えられる須恵器片であるが、図化できるものはない。

溝8は段丘の落ちの下で検出されたが、おそらく他の溝と同様北側の調査区外で段丘上に延びるものと考えている。ただ他の溝と異なることは弧状を描いて東に向かうことである。幅は1.8mから0.8mと徐々に狭くなる。深さは約20cmで底付近に多くの礫が混じる。溝内に10数本の枕が下層の溝6との交点に溝8をふさぐ形で打たれているが、井堰の可能性を考えているが、下層の溝6の護岸に伴うものであるかもしれない。出土した遺物には

縄文時代晩期から古墳時代後期にかけてのものが混在している。

5. ステージ4 弥生時代後期～古墳時代前期

この時期の遺物を出土している遺構は多くあるが、同時期に比定される遺構は溝2・溝6・溝6枝溝・溝7である。

溝2は昭和60年度に武庫川流域下水No2 発進立杭建設に伴う調査で確認された遺構で、ほぼ南北方向に流れる溝である。断面形が「V」字形を呈しており、一部では二段掘りになっている。幅約1.4m、深さ0.5mを測る。遺物は上層最下部から多く出土しており、他の溝に比べて単純な様相を示し、弥生時代末にはほぼ埋没しており、溝上面直上の包含層からは小型丸底壺が出土している。

溝6は段丘の落ちの下をほぼ南北方向に流れる溝で、南端で西に方向を変える。幅約1.8m、深さ約0.3mの規模を持つ。この溝6と直交する形で溝6枝溝が南西方向に流れているが、溝6枝溝は幅約0.6m、深さ約0.3mと溝6に比較して小規模のものである。溝6に溝6枝溝が交わるやや下流に溝6と直交して3本の杭が打たれている。これも井堰である可能性が高い。溝6枝溝からは長さ80cm、厚さ1cmほどの板材等が出土している。土器の細片から溝6と同時期のものと考えられるため溝6の枝溝とする。

溝7は段丘の落ちの部分に作られており、北側は段丘の上面に伸びている。その部分は南側に比べて細く、十字に枝分かれしている。溝3の直下で検出され、当初溝3が二段になっていると考えていたが、堆積状況や出土する土器に須恵器が含まれていないことから別の溝とした。深さは約10cmを測る。南側では徐々に幅を拡げて溝3・溝2と合流して土器溜まりとなる。この溝からはコンテナ2箱分の土器が出土しているが、細片ばかりであり須恵器は一点も含まれていない。

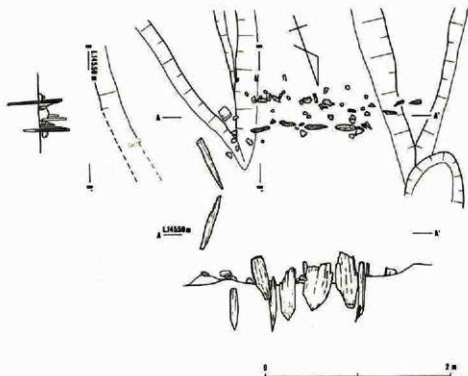
6. ステージ5 弥生時代前期

調査区の東端部をさらに掘り下げると溝9・溝10・溝12・溝11の4条の溝が検出され、北から南へと扇形に広がっている。このうち、溝9のみ他の溝より約10cm上面の黒色シルト層から切り込んでいる。

溝9は調査区の東端で検出されているが、遺構検出面は他のものより上面になる。幅約55cm、深さ約5cmの小溝でやや東に湾曲しながら南流する。遺物はほとんど出土していないため、時期を決定することができないが、便宜的にここで述べる。

溝10は幅約1.80m、深さ約50cmの溝で、南流するが南端でやや東に方向を振る。部分的に二段掘りになる。この溝からは弥生時代前期の土器や石庖丁が出土している。

溝12は溝10から分流すると考えられる溝で幅約80cm、深さ約15cmの小溝である。やや東に湾曲しながら南流する。



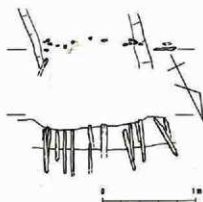
第87図 溝10井堰

溝10から溝12が分流する部分には井堰が構築されている。井堰は溝と直交する方向に枕・矢板を打ち込んでいるものである。枕は合計50本検出できたが、板材の先を尖らせたもの、丸太を蜜柑割りにした割り木材の先を尖らせたもの、直径5cm弱の丸太材の先を尖らせたものに分類できる。これらのうち、板材や割り木材のものは溝の上面近くで確認されたが、丸太材のものほとんどが断ち割りのさいに検出されており、溝10の底よりも深い位置にしか残っていなかった。丸太材を使用したものは直径3～5cmの広葉樹と思われる丸太の先端を尖らせて使用しており、26本を約15cm間隔で三列に打ち込んでいる。

板材を使ったものは丸太材を使ったものや北側に重複して作られており、約25cm間隔で二列に打たれている。各列の板材は10cmから15cm間隔で溝と直交する方向に長軸をおいており、大きいもので幅約50cmの矢板を使用している。北側の列には5枚の板材と6本の割り木材が使用されており、割り木材は板材と板材の間に打たれている。南側の列には8枚の板材と5本の割り木材を使用している。枕列の北側つまり上流側および周辺には拳大の礫が敷かれている。土層観察用のトレンチにかかっていたため、記録を残すことができなかったが、取り上げ後個々の礫を観察すると、河原石を用いたそのほとんどが割られていることがわかった。このことから意図的に置かれたものであることは間違いないであろう。溝12が溝10に接続する部分には部分的に火を受けて焼け焦げた2本の丸太を置いて

いる。更に溝10の井堰下流6mの地点から以南には14本の丸太杭・割り木杭が溝底に点々と打たれている。

溝11は溝10の西側で検出され、溝10に切られている。幅は約40cm~70cm、深さは約15cmを測る。溝10と同様溝と直交する方向に杭を打って井堰としている。これらの杭は直径約



第8図 溝11井堰

5cmの割り木材と丸太材を使用しており、約20cmの幅の中に20本を、東側の肩部に3本を合計23本打たれている。この東側の肩部の内の2本と西側の肩部の2本は斜め向きに打たれている。また、井堰より北の上流側には溝底に4本の丸太杭が散在的に打たれている。この溝からは弥生時代前期に属すると考えられる土器片が出土しているが、図化出来るものはない。

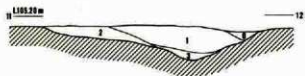
溝13は溝11に切られた形で検出されているが調査区内ではわずかしか残っていないため、溝になるのかさえ判別できない。溝であるならば溝11の分流とするのが妥当であろう。溝内からは図化できる遺物は出土していないが、弥生時代前期に属する土器片中に生駒西麓産の胎土を持つものが一点含まれている。

7. ステージ6 弥生時代前期以前

更に面を掘り下げると灰色シルトの土層を切って、粗砂から中砂によって埋没した溝14が検出された。当初上層の溝と同様2本の溝が南流するものと考えていたが、掘削した結果、一本の溝が蛇行して流れていることがわかった。幅約2.2m、深さ約35cmを測る。堆積している土質は東側の南端が一番粗く、西側の南端が細くなる。堆積の状況から一時に埋没したものと思われ、洪水が逆流して埋没したのではないかと考えている。遺物は全く出土していない。

その他に調査区の東端でいくつかの小穴と不定形の窪みを検出しているが、遺物の出土もなく性格は不明である。これらの遺構の埋土は溝14とは異なり黒色シルトである。

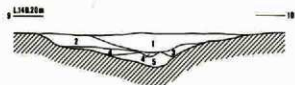
このステージ6より下層の状況は調査区周囲に設定したトレンチで土層堆積状況を確認したところ、シルトから中砂の互層となっており、遺物の出土も皆無であった。また土壌化した土層も確認されなかった。



- 0. 灰色中砂混りシルト質細砂
- 1. 灰色粗砂～中砂
- 2. 赤灰色中砂混りシルト
- 3. 灰色中砂～細砂



第69図 溝14土層断面図1



- 1. 灰色粗砂～中砂
- 2. 赤灰色中砂混りシルト
- 3. 灰色中砂～細砂
- 4. 灰色シルト
- 5. 赤灰色中砂～粗砂



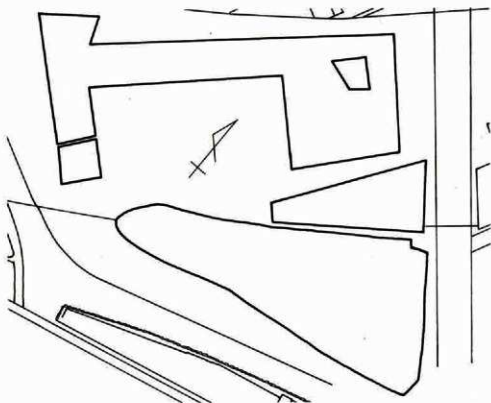
第70図 溝14土層断面図2

第2節 森下地区の調査

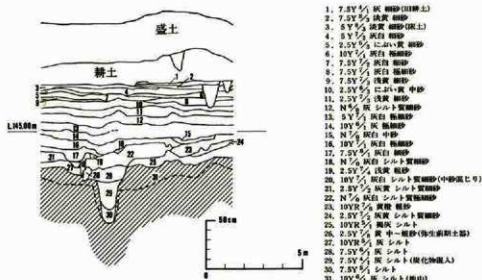
1. 概要

広畑地区とは現道を挟んで接しているが、二度の坪掘りによる確認調査の結果、調査区の西側は旧河道が通っており遺構が乗るベースは東側でのみ確認された。続いて土層堆積状況の確認と水田遺構の有無を確認するためにL字形のトレンチを設定した。水田遺構と思われる土層層は西側でも確認できたが、平面的な調査は不可能と判断し、遺構面の確認できた東側について全面調査を行った。全面調査は道路本体工事及び駅前広場整備工事の進捗状況に応じて実施したため3回に分断して行わざるを得なかった。

調査区内の基本的土層堆積状況は広畑地区の段丘下の土層堆積状況と同じで、上からまず盛り土、旧耕土、旧床土と続きそれ以下では4面程の土壌層が見られる。それ以下約30cm程はあまり土壌化していないが、古墳時代や奈良時代の須恵器が稀に含まれる包含層になる。この土層以上はほぼ水平に堆積しているが、以下では偏った堆積状況が見られる。1～2層の間層の後、細砂から粗砂が限られた範囲を覆っており、大別して2種類に分けることが出来る。まず上層の細砂は調査区の北半部を覆う。その下層では南半部を粗砂が



第71図 森下地区 調査区設定図 (S=1:500)



第72図 森下地区 基本土層図

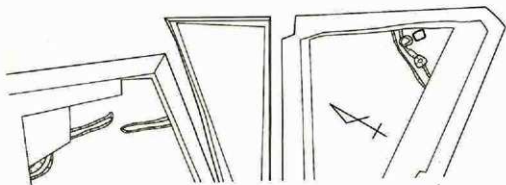
覆っている。これらの砂は本流性の氾濫堆積層で粗砂は南から、細砂は北側からの堆積物と考えられる。これらの砂層の下は水田面を形成する褐灰色シルト層となり、灰色シルト層に続く。前者は後者の土壌化したものと考えられるが、この層から切り込んでいる溝2の埋土上面も土壌化している。

土層観察の結果、調査区は連軸と水田が営まれていたと思われる土壌層が何面も確認できたが、この中で面的に調査できるのは砂をかぶった2面と判断した。更にベース面と考えていた灰色シルト層を切り込んだ遺構が確認されたため、合計3面の遺構面を調査した。

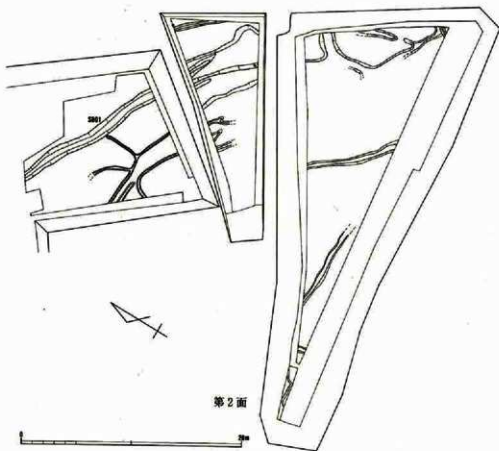
2. 遺構

第1面の遺構は調査区の南東部に検出した近世以降と考えられる土壌3基、及び畦畔状高まりである。土壌は遺構検出面よりも更に上面から切り込まれている。内一基は草本類の植物繊維を敷き詰めてあった。畦畔は4本検出しているが内一本は他のものと直交する方向にある。この畦畔は下幅約120cm、高さ約20cmと一般の畦畔と比べて規模が大きく、大畦畔とよんで差し支えないものである。その他の畦畔も下幅約80cm、高さ約6cmと下層で検出したものと比べても規模が大きい。

第2面の遺構は溝1条と畦畔状高まりである。溝1は、粗砂を充填した深さ約10cmの比較的浅いもので、幅は約1.1mである。この溝の底や周辺、特に北側には溝を充填しているのと同じ粗砂で埋没した足跡が多く残されていた。足跡は人のものと獣のものが確認されたが、いずれも歩行状態や員数が推測できるような規則性をもって残されている訳ではない。おそらく溝周辺の柔らかい土の部分だけに偶然残されていたものであろう。深いものでは5cm以上踏み込んだものもある。人の足跡は素足で親指が内方へ突出している。長さ

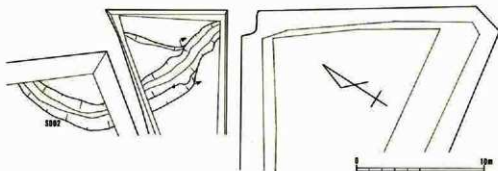


第1面

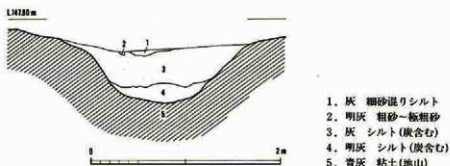


第2面

第73図 森下地区 第1・2面透構図



第74図 第3面遺構図

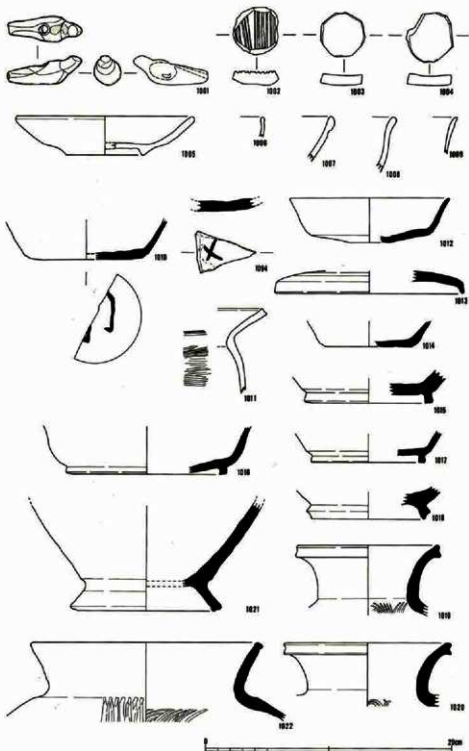


第75図 溝2土層断面図

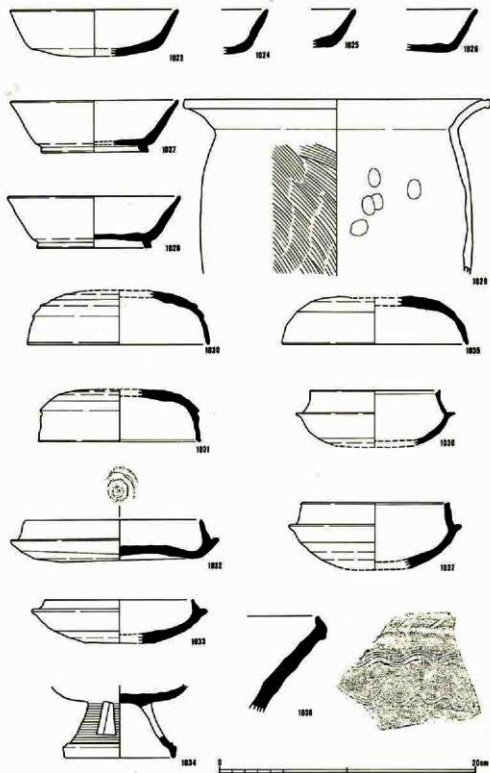
は19.5~22.2cm、指付け根の幅は11.1~13.1cm、踵部の幅は6.5~7.1cmと比較的小さいものであるが土圧等で本来の足の大きさをそのまま残しているとは考えがたい。獣足は長さ平均約8cm、幅約6cmで先が二股に分かれており、猪や鹿等の偶蹄目に類する。

畦畔状高まりは北側は砂を被っていたため検出が容易であったが、南側は不鮮明であった。規模は第1面のものに比べて小さく、下幅約25cm、高さ約4cm程度である。基本的には溝1と平行して伸びるものと、それから直交してのびるものに分類できる。水田の区画、枚数は明確ではないが所謂不定形小区画の範疇にはいる。水田面検出中に土器小片や石器、先の焼け焦げた棒状の木片が出土している。

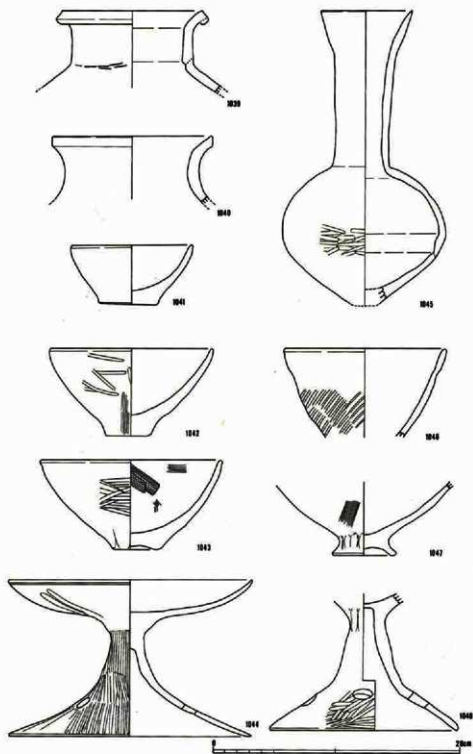
第3面の遺構は溝1条だけである。この溝2は、調査区の北東端を弧状に横切って調査区外に出ていく。溝は一部で二段になっているが、上幅約2m、底幅約1m、深さ約1mの規模を持つ。堆積状況から見て徐々に埋没しており、水田跡のように洪水で一時に埋まったものではない。溝内下層の堆積土中には自然木や細い板状の木切れが見られる。溝底に近い位置からはチャート製の石器が1点出土している。土器は小片が一、二点出土しているだけで時期を決定できる資料とはならない。



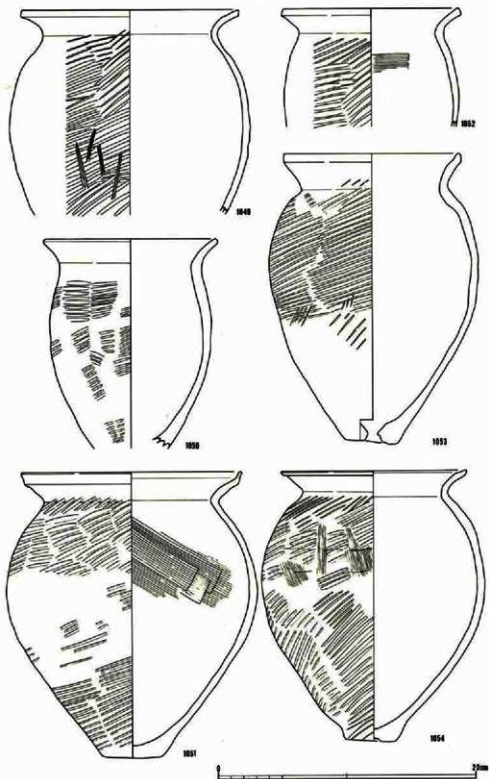
第76図 遺物1 (近世から奈良時代の土器・土製品)



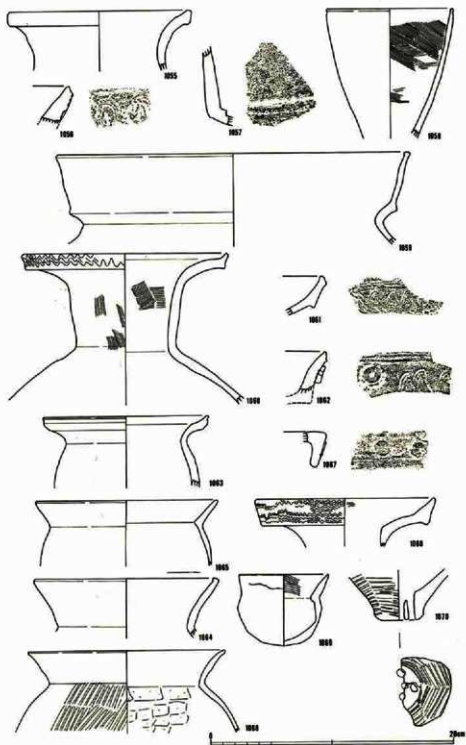
第77図 遺物2 (奈良時代から古墳時代後期の土器)



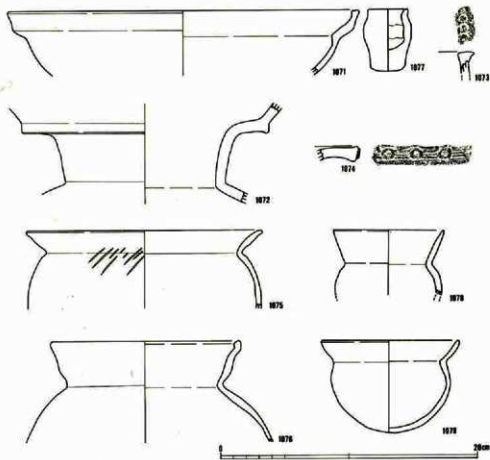
第78図 遺物3 (弥生時代後期から古墳時代初頭の土器-I)



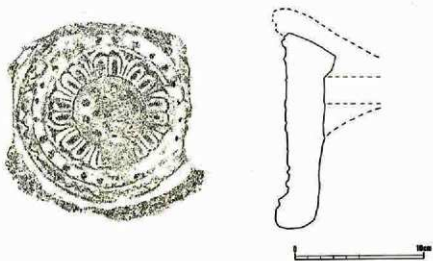
第79図 遺物4（弥生時代後期から古墳時代初頭の土器-II）



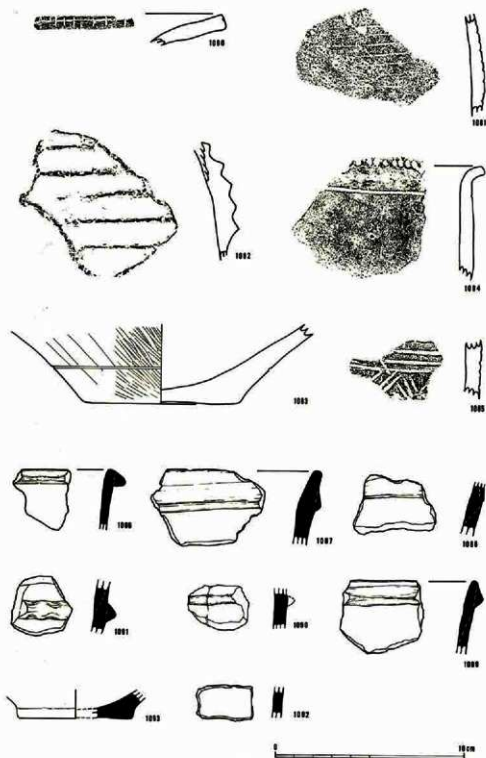
第10図 遺物5 (弥生時代後期から古墳時代初頭の土器-III)



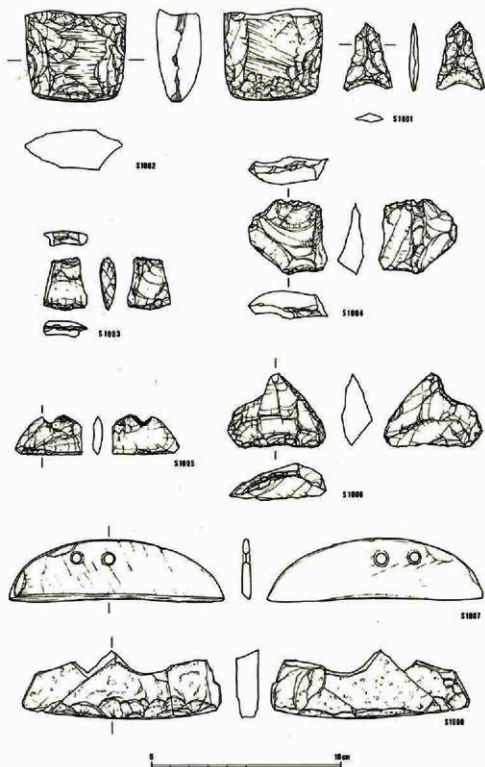
第81図 遺物 6 (弥生時代後期から古墳時代初頭の土器-IV)



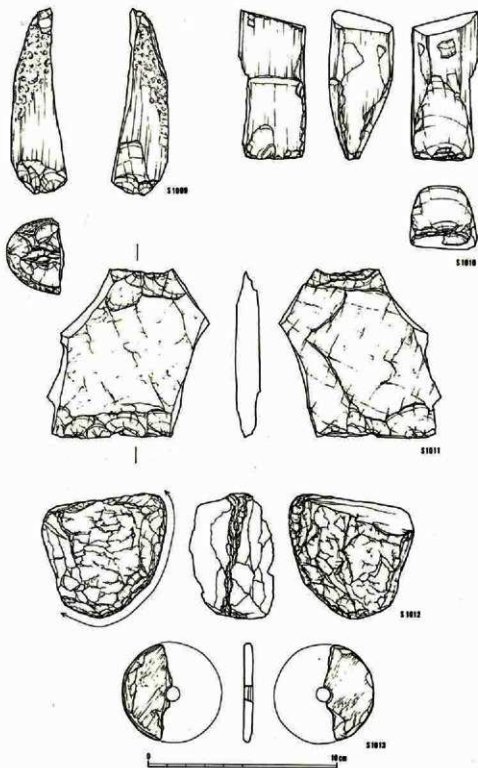
第82図 遺物 7 軒丸瓦



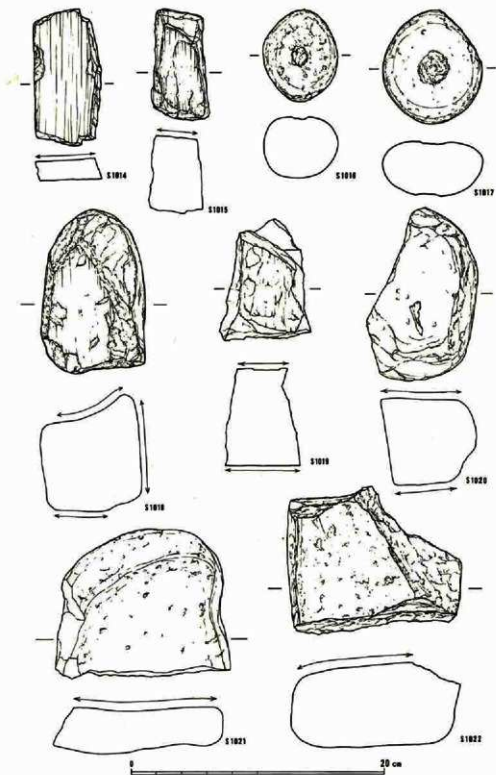
第93図 遺物 8 (弥生時代前期・縄文時代の土器)



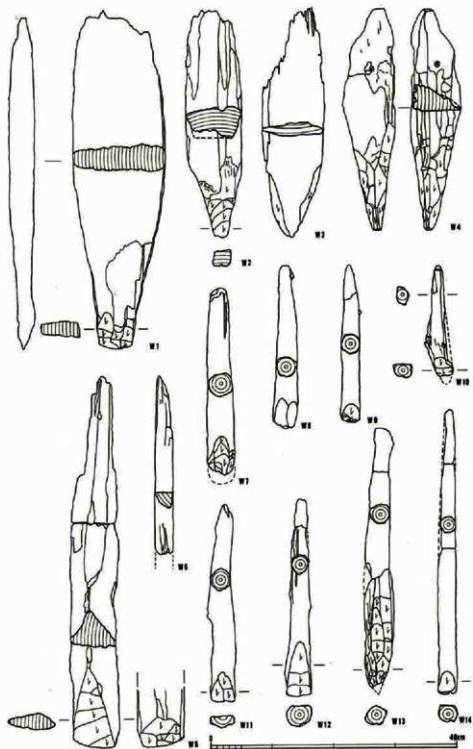
第84図 遺物9 (石器-I) S1001~1003は原寸大



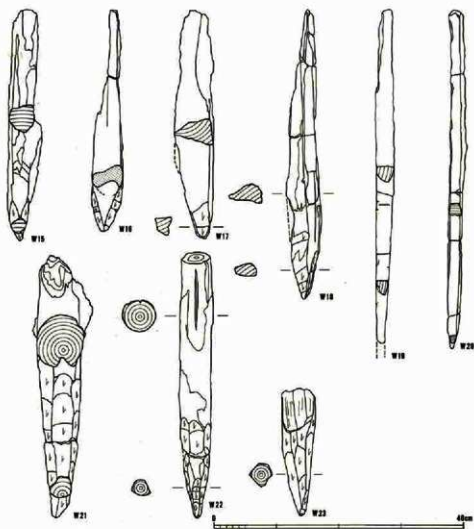
第05図 遺物10 (石器-II)



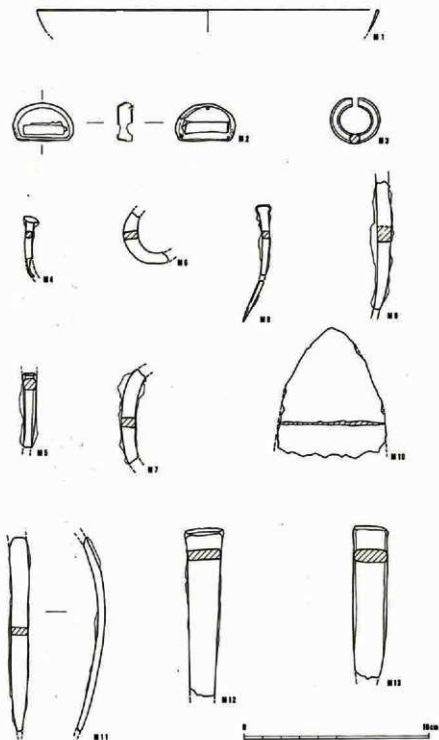
第86図 遺物11 (石器-III)



第87図 遺物12 (木製品-1)



第88図 遺物13 (木製品-II)



第89图 遺物14 (金属製品)

第3節 広畑地区・森下地区の遺物

1. 中・近世の遺物 (第76図)

中近世の遺物のほとんどが包含層中の出土であり、遺構から出土したものはない。土製品は全て広畑地区耕作痕周辺の旧耕土中から出土している。その他のものも広畑地区出土のものである。1006は更に古い時期のものであるが便宜上ここに含める。

陶磁器

1006は緑釉陶器である。細片の為、器種については断定は出来ないが、おそらく体部の張る碗であろうと思われる。内・外面共施釉されるが、外面の体部下半以下は露胎である。色調は暗黄緑色を呈する。

1007は白磁碗の口縁部である。口縁部は小さな玉縁状に成形する。内・外面共施釉され、色調は黄色味を帯びた白色を呈する。器面には細かい貫入が認められる。形態からみて、横田・森田分類白磁碗Ⅱ類相当するものと考えられる。(森本分類Ⅴ-1類)

1008は白磁碗口縁部である。口縁部は1007に比べ大きな玉縁状に成形されている。内・外面とも施釉され、色調は灰色を帯びた白色に発色する。器面には貫入及び気泡が認められる。形態及び技法上の特徴から見て、横田・森田分類白磁碗Ⅳ類に相当するものと考えられる。(森本分類白磁碗Ⅳ類)

1009は青磁碗である。体部はやや内彎気味に立ち上がり口縁部は外反する。内・外面とも施釉され、色調はややくすんだ暗黄緑色に発色する。形態及び技法上の特徴から、森本分類龍泉窯系青磁碗Ⅳ類に相当するものと考えられる。

1005は青磁皿である。細く低い高台をもち、体部は直線的な斜め上方に立ち上がる。口縁部は輪花状に成形し、体部内・外面は型押しで斜方向の凹線を施し蓮弁状に成形する。内・外面共施釉されるが、高台壘付の釉はカキ取られている。色調は暗黄緑色を呈する。形態及び技法上の特徴から、近世後半の国産の青磁おそらく三田系青磁と考えられる。

土製品

1001は土製の埴当である。手づくね成形で中は中空になっており、土玉が一つ入れられている。体部外面はナデ調整が施されている。

現在は殆ど剥落しているが、元来は彩色されていたものと見え、体部の上面には、わずかに緑色の顔料が付着している。尾部は吹き口となり、体部上面は共鳴部となって空気の吹出孔があげられている。

1002・1003・1004はいづれも陶片の周囲を打ち欠いて作られたメンコである。1002は丹

波橋鉢、1003・1004は丹波系の裏ないしは壺の破片を転用している。

2. 奈良時代の遺物 (第76・77・82図)

須恵器

溝3出土土器

壺 (1013) 杯Bの壺。頂部はやや丸みをもつ。ヘラケズリの方向は逆時計回りである。

口径15.1cm。

杯A (1014) 平底の杯を杯Aとする。口径は不明だが、ややこぶりである。底部外面はヘラ切りののち、ナデ調整を行っている。

杯B (1017・1016) 高台をもつ杯を杯Bとする。1017は垂直な高台をもち、その端面は水平である。1016の高台端面はやや内傾し、口縁は緩く外反する。底部中央は若干下方に張り出す。

壺 (1018) 外方に強く踏ん張る高台をもち、その端面は内傾する。

溝5出土の土器

杯A (1012) 底部中央は若干下方に張り。口径は12.8cm。

井戸1出土の土器

杯A (1010) 底部外面は、ヘラ切りののち、ナデ調整を行っている。

図化できなかったが、この他に裏胴部の破片がある。

包含層出土土器

杯A (1023～1026) 口縁部は直線的に外傾する。平底の1024・1026と下方に張る底部をもつ1023との二者がある。1023は、底部をヘラ切りののち、ナデ調整を行っている。

杯B (1027・1028) 底部はヘラ切りののち、ナデ調整を行っている。

壺 (1019～1021) 1019・1020はゆるく外反する口縁部をもつ。端部は面をなし、ナデによるくぼみがある。体部内面には同心円タタキ目がある。口径は1019が11.2cm、1020が13.2cm、1021は外方に強く踏ん張る高台をもつ壺である。

壺 (1022) 直線的に外傾する口縁部をもつ。端部はやや肥厚する。内外面にそれぞれ同心円・平行線のタタキ目をもつ。口径18.2cm。

土師器

溝3出土土器

甕(1029) 長手の体部に、斜め上方にひらく口縁部をもつ。口縁端部は面をなす。外面は左上がりのハケメ、体部内面には指押さえの痕跡が残る。器壁は薄い。口径23.8cm。

溝5出土土器

甕(1011) 外面の調整は不明だが、内面には横方向のハケメを施している。

軒丸瓦(第82図)

調査中に現場事務所前で採集された。二次的に持ち込まれたものであろう。但し、対中地区・広畑地区で同時期の遺構があること、対中地区・森下地区で布目瓦片が1～2点出土していることから、あながち無関係と断定するわけにはいかない。同文の瓦は金心寺跡遺跡(屋敷町594)で出土したことが伝えられているが、同遺跡はその範囲・性格ともはつきりしていない。

瓦の胎土は径1～3mmの砂粒を多く含む粗いもので、焼成は良好でオリーブ灰色を呈している。瓦当部しか残っておらず、丸瓦部は痕跡を残すだけである。瓦当部と丸瓦部との接合は、直径17.2cmの瓦当に厚さ2cmの丸瓦端面をあて、内・外面共厚い接合粘土を施して行っている。瓦当面文様は複弁8葉蓮華文で、比較的大きな中房を持つが、やや短めの弁を持つのが特徴である。径5.6cmの中房には蓮子を中心に1個置き、その周囲を二重に5+9と回している。弁区径は9.5cmで弁数は複弁の8弁、弁間には「T」字形の弁間文を入れている。外区内縁は幅1.1cmで珠文を24個巡らせている。外区外縁は0.8cmの高さで内傾しており、線鋸歯文を施している。

3. 古墳時代の土器(第77図)

須恵器

溝2出土土器

甕(1035) 口径14.4cm、器高3.7cm。天井部と体部の境には明確な稜をもたず、口縁部端面は丸くおさめる。回転ヘラケズリの方向は逆時計回り。TK43型式併行。

溝6出土土器

甕(1030) 口径14.2cm、器高4.2cm。天井部と体部をわける稜線はにぶく、口縁部端面は丸くおさめている。回転ヘラケズリの方向は逆時計回りである。TK10型式併行か。

土器溜まり出土土器

杯(1032) 口径13.8cm、器高3.1cm。たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。底部の

回転ヘラケズリは逆時計回り。内面中央に同心円文スタンプが残る。TK10型式併行か。

包含層出土土器

杯 (1033・1036・1037) 1033はたちあがりが低く、強く内傾する。回転ヘラケズリの方向は逆時計回りである。口径11.4cm。TK43型式併行。1036は、他の杯に比べて、胎土に砂粒が少なく、また器壁も薄い点の特徴である。口径10.2cm、器高は4.2cm。たちあがりの端面は内側に傾斜し、浅くくぼんでいる。受部は水平にのびる。回転ヘラケズリの方向は時計回り。MT15型式併行か。1037は口径11.4cm、器高5.1cm。たちあがりの端面は内側に傾斜し、浅くくぼむ。回転ヘラケズリは時計回りに施される。TK47型式併行。

蓋 (1031) 口径12.5cm、器高4.1cm。回転ヘラケズリの方向は時計回りである。MT15型式併行。

甕 (1038) 大型の甕である。肥厚した端部に刺突文をもち、その下には2条の櫛描き波状文を施す。

高杯 (1034) 有蓋高杯の破片である。短い脚部に3方向の長方形の透しがある。杯部内面には同心円文スタンプがわずかに残る。この他に、図化できなかったが、無蓋の高杯が数点出土している。

土師器

溝3出土土器

甕 (1059) いわゆる山陰系の複合口縁の甕である。端部は肥厚しており、布留式土器の影響がみられる。口径28.2cm。

溝6出土土器

甕 (1064) 口唇部はやや内側につまみあげられ、端面をもつ。口径14.4cm。布留式の範疇に含まれる甕か。

包含層出土土器

小型丸底壺 (1078) 口径8.5cm、胴部最大径8.4cmと両者はほぼ等しい数値を示す。口縁部は直線的にのび、端部は丸くおさめる。調整は不明。

小型丸底鉢 (1079) 口径10.5cm、器高7.1cm、胴部最大径9.3cm。ゆるく内彎する口縁部をもつ丸底の鉢である。

甕 (1076) 口径14.6cm。口縁はわずかに内彎しながら、複合口縁ふうゆるい段をもつ。口唇部は内傾し、かつ肥厚する。内面は体部上半までヘラケズリがなされている。

壺 (1072) 複合口縁壺。外傾する頸部に、直角に近く外反する受部をもつ。口縁部と受部との接合部分は若干垂下する。

4. 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器 (第78～81図)

溝2出土土器

広口壺 (1039・1040) 1039は口径11.4cmで、頸部はほぼ直立し、口縁端部を外方に折り返して面を作る。1040は口径12.8cmで、口頸部がゆるやかに外反し端部は面をもっている。

細頸壺 (1045) 口径7.4cm、胴部最大径13.6cm、器高は現高で23.3cmを測る。頸部は細長く直立し、口縁近くに至って外方へ開き、口縁端部は面をもたずに終わっている。体部は算盤玉形で、外面には横方向のミガキが加えられている。器高に対して胴部の張りが弱い。ため、不安定なプロポーションを呈する。

鉢 (1041～1043・1046) 1041は口径9.8cm、器高4.8cm、1042は口径13.2cm、器高7.0cm、1043は口径14.6cm、器高7.1cm。1041～1043はほぼ同型の鉢で、平底から内彎した体部が立ち上がる。1042は内外面ともミガキで仕上げ、1043は外面と底部内面がミガキ、体部内面はハケメである。1046は口径13.0cm、タタキ調整の鉢である。

高杯 (1044・1048) 1044は口径・底径とも20.0cm、器高12.5cm、非常に浅い皿状の杯部にラッパ状の脚部が付き、脚部には3個の穿孔をもつ。口縁下には1条の沈線を施す。精選した胎土を用い、外面は縦方向のミガキで丁寧に仕上げる。1048は脚部のみ残存している。底径15.2cm、ラッパ状に開き、裾部は若干内彎気味に膨らむ。4個の穿孔をもち、外面にはミガキを施す。

甕 (1049～1054) 1049は口径16.8cm、1050は口径12.4cm、器高15.8cm、1051は口径17.0cm、器高22.0cm、1052は口径13.6cm、1053は口径13.6cm、器高22.2cm、1054は口径14.4cm、器高20.8cm。甕はしっかりした底部をもち、外面は左下がりのタタキ、内面はハケメで調整するものがほとんどである。1054はタタキの上から縦方向にハケメを施す。胴部最大径は中位よりも若干上にある。口縁形態は以下の三形態に分かれる。1049・1050・1052はくの字に外反してそのままおわる。1053・1054は端部を強くナデて面をもたす。1051は短く立ち上がる。このうち1053・1054と1051は時期差を示す可能性がある。

底部 (1047) 高台状の脚部が付く。鉢の底部とも思われるが、不明である。

溝2出土の土器は若干の時期差は感じられるものの、概ね後期中頃に収まるものである。また該期の器種構成を示す良好なセットであるといえよう。中でも高杯1044は特徴的な形状を呈しており、類例の報告がまたれるところである。

溝3出土土器

広口壺 (1055-1057・1059) 1055は口径14.5cm、口縁はゆるやかに外反し、端部には面をもつ。胎土には粗砂粒を含む。1059は口径29.4cm、鋭く屈曲した頸部から口縁が段をもって立ち上がる、所謂有段口縁をもつ大型の壺である。口縁端部は強いナデで若干肥厚させている。1056・1057は全体の器形は不明だが、それぞれ文様が施される。1056は口縁外面に3条の櫛で、上向きの半円文を右から左へ重ねて描き、円の中心に刻みを入れる。1057は頸部突帯の外面に、径2mm程度の管状の原体で刺突を行う。胎土には砂粒を多く含む。焼成は悪く、茶褐色を呈す。

細頸壺 (1058) 口径10.2cm、口頸部は内彎気味に開き、体部形態は不明だが算盤玉型になるものと思われる。外面はミガキ、内面はハケメで仕上げる。胎土には微砂粒を含む。

溝3では弥生時代末～古墳時代初頭の土器が混在した状況で出土しており、2次堆積によるものと考えられる。

溝6出土土器

広口壺 (1060-1062) 1060は口径16.6cm、1061・1062は小片のため不明である。1060は筒状に立ち上がる頸部から口縁が大きく開き、肩部はそれほど張らない。頸部内外面はハケメ、体部外面はミガキで仕上げる。胎土には粗砂粒を若干含む。口縁形態は1060-1062とも端部を上方へ拡張してその外面を文様帯とする。1060は3条の櫛描波状文、1061は2条の波状文、1062は4条の櫛描波状文の上に円形浮文を貼付し、浮文には刺突を施す。1061・1062は広口壺に分類したが器台の可能性もある。

甕 (1063・1064) 1063は口径13.4cm、頸部はゆるく屈曲し、端部はナデているがはっきりした面をもたず、肩部もあまり張らない。1064は口径14.4cm、頸部は鋭く屈曲し、上外方に開く。口縁端部は内面肥厚し、所謂布留式の甕の特徴をもつ。

甕1064が布留期である以外は若干古い土器も混じっており、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が混在する状況である。

溝7出土土器

甕 (1065・1066) 口径は1065が14.8cm、1066が15.8cm、頸部は鋭く屈曲し、口縁部は直線的に開く。胴部内面はヘラケズリ、外面は1066が左下がりのタタキ、1065は不明である。時期は甕の形態からみて庄内期に属するものである。

土器溜まり出土土器

広口壺 (1067・1068) 1068は口径14.6cm、大きく開いた口縁の端部を上方へ拡張し、そ

の外面には3～5条の櫛描波状文を上下2段に施し、内面にも4条以上の櫛描波状文を施す。1067は口縁端部を下方に拡張し、その外面に2条以上の櫛描直線文と円形浮文を施す。色調は茶褐色を呈し、焼成は悪い。

小型丸底壺 (1069) 口径7.3cm、器高5.7cm、口縁外面ヨコナデ、内面ハケメ、胴部内外面未調整、胎土は砂粒を多く含み、全体に粗雑な作りである。

底部 (1070) 甕の底部であるが、底面に穿孔を有している。孔の数は4箇所が残存しているが、本来は5箇所であったと思われる。外面はタタキ、内面はハケメで調整する。

時期は細片が多いためはつきりしないが、古墳時代初頭の土器が主体を占める状況である。

包含層出土土器

広口壺 (1072・1074) 1072は口縁端部を欠損しているが、二重口縁の壺である。外面の調整はミガキで、胎土には石英粒を含む。1074は口縁端部の3条の櫛描直線文の上に円形浮文を貼付し、浮文の上を竹管でスタンプする。

無頸壺 (1073) 口縁上端部に竹管で連続的にスタンプする。無頸壺に分類したが、手培り形土器の蓋い部の可能性もある。

小型丸底壺 (1078・1079) 1078は口径8.5cm、口縁長は器高のほぼ近くに達する。胎土には砂粒を多く含む。1079は口径10.5cm、器高7.1cm、口縁は短く内彎気味に開く。火にかけられたらしく、器壁の剝離が激しい。胎土には粗砂粒を含む。

鉢 (1071) 口径27.0cm、口縁は有段状に屈曲し、上端はヨコナデで面をつくる。内面はヘラミガキで仕上げる。体部の浅い鉢であるが、これに脚がついて高杯となる可能性もある。

甕 (1075・1076) 口径は1075が18.0cm、1076が14.6cm、1075は口縁がくの字に外反する。口縁外面はヨコナデ、胴部外面は左下がりのタタキで調整する。1076は口縁がくの字に屈曲したあと上外方に立ち上がる。口縁の内外面は強いナデで調整し、端部の内面が肥厚する。胎土には粗砂粒を含み、焼成は不良である。

ミニチュア土器 (1077) 口径は2.9cm、器高は4.7cm、甕を模した土器である。

包含層には弥生時代末～古墳時代初頭の土器が混在しているが、古墳時代のものが主体を占めている。

5. 弥生時代前期の土器 (第83図)

広畑地区の弥生前期遺構は前述のとおりであり、それらの遺構から僅かではあるが、土器や石器が出土した。弥生時代前期の土器は20点近く出土したが、図示しえるものは6点

のみである。

1080は溝10から出土した壺の口縁部である。大きくラップ状に開いた口縁端部にヘラガキ沈線1条ひいた後、タテ方向に刻みを入れるものである。1081は壺の胴部最大径付近の破片である。胴部外面にはヘラガキ沈線が8条以上あり、最下端には小型の竹管の列点文が施されている。1082は溝3・7の柱状木製品付近から出土したもので、器形は壺胴部中央から上半に至る部分である。器壁は厚く、文様として断面三角形の貼付凸帯が5条以上ある。1083は溝10から出土したものである。器形は壺の底部で外面は斜め方向に丁寧にヘラミガキを施したものである。底部に至る付近にヘラガキ沈線が1条施されている。

以上が壺破片である。甕の破片は2点ある。

1084は溝10の下層から出土した甕の口縁部である。口縁端部は小さく、ヘラにより刻まれ、体部にはヘラガキ沈線が1条施されている。1085は溝10から出土している甕の体部破片である。口縁は欠失しており不明だが、体部にはヘラガキ沈線が3条めぐられ、その下位に3条単位で斜線文が施されている。

以上の弥生時代前期の土器は、壺については器形がある程度推定できる、1080から口縁が開くことが判り、新しい要素がある。また文様については貼付凸帯が使用され、しかも多条化している。ヘラガキ沈線についても8条と多条化している。

甕については、1084はヘラガキ沈線が1条あるが、新・旧の要素がうかがえる。1085は前期のほぼ全般にわたり、使用されるもので、細かな時期は限定できない。以上のことから対中遺跡広畑地区の弥生前期土器は弥生時代Ⅰ様式後半（d段階）の時期と考えられる。また甕についても、この時期を大きく離れることはないと考えられる。

三田地方ではこれまで弥生前期の遺跡として北台遺跡⁽⁴⁾、深田遺跡⁽⁵⁾、三輪耕田遺跡⁽⁶⁾が知られているがいずれも小規模でしかも遺物も少なく、Ⅰ様式後半（d～e段階）である。また三田のすぐ南にあたる神戸市北区の塩田遺跡⁽⁷⁾でもⅠ様式後半の土器が若干出土しているにすぎない。

今回対中遺跡で高度な灌漑施設が検出され、その遺構から弥生前期の遺物が出土した。このことは、弥生前期後半の段階には、完成された水田耕作が営まれていたことが予想される。また同時に出土した縄文晩期終末の凸帯文土器の時期には他の遺跡で多くの土器に靱痕など水田耕作を考えるに十分な資料が増加しつつある状況を見ると、内陸部にあたる三田地方ではあるが、長原式土器そのものの搬入を考えると、当地方の稲作の伝播は弥生前期後半よりは以前に伝わった可能性が高いと考えられる。

6. 縄文時代の土器（第83図）

当遺跡の縄文時代の明確な遺構はなかったが、弥生時代の溝などから土器・石器が出土

した。縄文時代の土器として、晩期凸帯文の深鉢形土器がある。図示しえた破片は8点で文様としては凸帯文のみである。

1086は深鉢口縁部で、溝11から出土した。面取りした口縁端部に沿って断面 ∇ 型の凸帯を有し刻目はない。胎土中に角閃石の砂粒を含んでおり、河内産と考えられる。1089は深鉢口縁部で溝3から出土した。丸い口縁端部から下がったところに低い ∇ 型の凸帯がめぐらされており、刻目はない。胎土中に石英・長石・赤グサリ礫などの砂粒がある。1088は深鉢口縁部付近で、溝6から出土した。口縁端部は欠損しているが、端部から下がったところに低い ∇ 型の凸帯が付き、刻目はない。胎土中に長石・石英の砂粒が目立つ。1089は深鉢の口縁部で溝10の底から出土した。やや丸みを帯びた口縁端部をもち、僅かな間隔をおいて、断面 ∇ 型の凸帯を有する。また刻目はなく、凸帯の接合痕は明瞭である。胎土中に長石・石英の砂粒を含む。1090は深鉢口縁部付近で溝6から出土した。口縁端部及び凸帯上が欠損している。胎土中に長石・石英の砂粒がある。1091は深鉢胴部凸帯であり、溝10から出土した。胴部凸帯は断面 ∇ 型を呈し、凸帯上にはO字の刻み目がある。胎土中には角閃石を含んでおり、河内産と考えられる。1092は器種不明であるが、胎土中に角閃石を含んでおり、河内産と考えられる。1093は器種不明の底部破片で、溝8から出土した。この底部は粘土の継目がうかがえ、円盤貼付底状を呈している。また胎土中に角閃石を含むことから河内産と考えられる。

これらの縄文土器のうち、1086・1091・1092・1093は角閃石が含まれることから河内産である可能性が高く、長原式土器⁽⁹⁾と考えられる。その他は、長石・石英を中心に含んでおり、西摂から播磨地方にかけても見受けられるもので、産地は不明であるが、在地の土器も含まれているのだろう。

三田から丹波地方にかけて、長原式土器の出土は今までなく、これまで、川西市下加茂⁽¹⁰⁾遺跡や神戸市宇治川南遺跡⁽¹¹⁾などの六甲山系南麓や東部で出土しているにすぎなかった。今回の長原式土器の出土はプライマリーなかたちとはいえませんが、弥生前期の土器の問題と共に稲作の開始を考えるうえで、武庫川沿いに伝播するなどを想起させる資料である。

7. 石器 (第84～86図)

対中遺跡から出土した石器は、縄文・弥生時代のものが大半であるが時期不明のものもある。遺物総数は22点出土しており、そのうちの多くは溝などの遺構出土のものが大半を占める。また特にB地区では遺構が重複しており、遺構の時期と遺物が合わないことが多い。以下、一覧表を掲載し、種類別に説明する。

石鏃(S1001)石鏃は凹基式1点のみの出土である。全体の調整は雑で稜線は低い。表面は風化により若干白色を呈し、二上山産の可能性がある。

短剣 (S1002) 短剣は従来石槍と呼ばれていたものである。この石器は石庖丁未製品と共にC地区弥生中期の水田面から出土したものである。この石器は短剣の基部で、厚さは1 cmある。両面及び側面、基部に磨製を施し、B面の一部には自然面を残している。表面は僅かに風化し、白色を呈するが、二上山産の可能性がある。

楔形石器 (S1003・S1004) S1004は両端共幅広く、中央は厚い。また一部に自然面を残すものでチャート製である。S1003は両端はやや狭く、平面形は台形を呈する。

削器 (S1005・S1006・S1011) S1005はサヌカイト製の小型のもので、下面のみ刃部を作り出している。S1006はチャート製で、片面の周縁部を調整した不定形な削器である。S1011は堆積岩系の石材で、両面加工された大型の削器である。

石庖丁及び未製品 (S1007・S1008) S1007は黒色の粘板岩製で全体に丁寧な作りである。刃部は使用のため僅かに凹んでいる。また孔にはひもずれが認められる。S1008は堆積岩の石庖丁未製品である。下辺に刺離痕があるが、厚みは1.1cmあり、工程的には初段階のものであろう。

石斧 (S1009・S1010) S1009は硬質砂岩製の大型蛤刃石斧の破片である。石斧が破損した後、敲石として使用されたようで、刃部に敲打痕が残っている。S1010は頁岩製の柱状片刃石斧の破片である。この石斧も破損してからの使用痕と考えられる敲打痕が存在するところから敲石として使用されたと考えられる。

紡錘車 (S1013) 復元すれば直径約5 cmの円形であるが半分以下の破損品である。中央に径約8 mmの穿孔があり両側からあけられている。また断面は5 mmと扁平なもので、粘板岩製のものである。

敲石 (S1012) 周縁に敲打痕があり、石器の厚さも6.5cmと厚いものである。石材はチャート製である。

砥石 (S1014・S1015・S1018・S1019) 砥石は3点で、台石を兼用しているものS1019が1点ある。S1014は粘板岩製の扁平なもので、扁平な両面が砥石として使用されている。S1015・S1018・S1019は厚みがあり、砂岩製のものはほぼ完形に近いものであろう。

凹石 (S1016・S1017) これらの凹石はいずれも花崗岩で作られているものでS1017は大型で両面凹面があり、S1016は片面にしか存在しない。また一般的に凹石はスリ石として使用された例が多いが、当資料も前述のようである。

台石 (S1019～S1022) 台石は4点あり、石材も流紋岩製と花崗岩系に分かれ大型品が多い。しかしこれらは皿状になったものではなく、作業台や調理台的に使用されたものだろう。

第12表 石器一覧表

| No | 種 類 | 出土地及び層位 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 石 材 | 備 考 |
|-------|---------|---------------|---------|--------|---------|--------|----------------|------------------|
| S1001 | 石 錐 | 広畑 溝6 西添込み | 1.8 | 1.3 | 0.2 | 0.45 | サヌカイト | 円錐式 |
| S1002 | 打 製 短 剣 | 広畑C地区 中層水田 | 2.3 | 2.7 | 1.2 | 11.04 | サヌカイト 二上山産? | 基部及両面に 磨製発生前期 |
| S1003 | 楔 形 石 器 | 広畑B地区 溝8 | 2.7 | 2.3 | 0.8 | 5.23 | サヌカイト | |
| S1004 | 楔 形 石 器 | 広畑C地区 最終面 | 3.9 | 4.1 | 1.4 | 19.14 | チャート | 一部に自然面 |
| S1005 | 削 器 | 広畑C地区 ベース | 2.1 | 3.5 | 0.5 | 4.58 | サヌカイト | 二上山産? |
| S1006 | 削 器 | 広畑A地区 表面採集 | 3.9 | 5.1 | 1.7 | 25.4 | チャート | 刃部片面 |
| S1007 | 石 瓦 丁 | 広畑B地区 溝10 | 11.3 | 3.1 | 0.5 | 24.9 | 粘板岩 | 完形発生前期 |
| S1008 | 石瓦丁未製品 | 広畑C地区 中層水田 | 10.4 | 3.5 | 1.1 | 56.2 | 粘板岩? | 刃部調整後 発生中期 |
| S1009 | 石 斧 | 広畑B地区 溝6 薪部 | 9.7 | 2.8 | 4.0 | 120 | 硬質砂岩 | 大型輪刀片 |
| S1010 | 石 斧 | 広畑B地区 溝3・7 | 7.8 | 3.5 | 3.3 | 134 | 頁 岩? | 敲石に転用 |
| S1011 | 削 器? | 広畑B地区 溝3・7 | 8.5 | 8.8 | 1.3 | 146 | 堆積物系 | 微型石器? |
| S1012 | 敲 石 | 広畑C地区 溝2 | 6.5 | 6.5 | 4.5 | 195 | チャート | |
| S1013 | 紡 錘 車 | 広畑B地区 溝10 | 5.0 | — | 0.5 | 9.3 | 粘板岩 | 発生前期 |
| S1014 | 砥 石 | 広畑B地区 灰色細砂層 | 14.4 | 7.0 | 2.2 | 390 | 粘板岩 | 2面使用 |
| S1015 | 砥 石 | 広畑B地区 溝10 | 11.6 | 6.2 | 8.0 | 750 | 砂 岩 | 発生前期 |
| S1016 | 凹 石 | 広畑B地区 溝1 or 2 | 9.6 | 7.8 | 6.4 | 600 | 砂 岩 | |
| S1017 | 凹 石 | 広畑B地区 溝3・7 | 11.9 | 10.3 | 5.5 | 940 | 花崗岩系 | 2面に凹み |
| S1018 | 砥 石 | 広畑B地区 溝10 | 17.2 | 10.9 | 12.2 | 2600 | 砂 岩 | 3面使用 発生前期 |
| S1019 | 台石兼砥石 | 広畑B地区 溝6 | 12.5 | 9.7 | 10.1 | 1650 | 流紋岩 | 1面のみ使用 |
| S1020 | 台 石 | 広畑B地区 溝3・7 | 17.8 | 11.5 | 9.0 | 2600 | 流紋岩 | 2面使用 |
| S1021 | 台 石 | 広畑B地区 溝8 | 15.7 | 18.3 | 4.8 | 2500 | 花崗岩系 | 上面のみ使用 |
| S1022 | 台 石 | 広畑B地区 溝3・7 | 15.2 | 18.2 | 8.7 | 3560 | 花崗岩 | 一部に擦面 |

8. 木製品 (第87・88図)

ここに掲載する矢板・枕類は広畑地区の溝10及び溝11の井堰を構成するものである。W1～W14は溝10に伴う井堰に使用されていた矢板・枕の一部である。W1はコウヤマキの柁目材の先端を4方向から削って尖らせている。(この材は奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏にお願いして年輪年代法によって年代測定を試みたが、標準パターンと一致しなかった。) W2・W3は板目材を使用しており、やはり先端の4方向から削りを入れている。W4・W6は丸太を蜜柑割りにした割り木材を使用している。W4は先端を全周から削って尖らせている。W5は先端を2方向から削ってくさび状に尖らせている。W7～W14は溝底下から検出したもので、全て丸太枕を使用している。W14が例外的に広い面積を全周にわたって削っているのに対して、ほとんどのものが対峙する2方向を2～3回削ってくさび状にしている。

W15～W23は溝11に伴う井堰に使用されていた枕である。W15～W20は割り木材、W21～W23は丸太材を使用している。溝10に伴う井堰に使用されているものと異なる点は丸太材がやや大きいものを使用していることと、先端の削り方がくさび状のものが無く、4～6方向から削って尖らせていることである。

9. 金属製品 (第89図)

金属製品は便宜上、対中地区木棺墓から出土した釘以外は全地区のものをここに掲載している。この中でM1～3は銅製品、M4～13は鉄製品である。

M1は銅製容器、対中地区V-15区溝4出土。断片であるため完形を復元できるものではないが、内外面とも丁寧に削っていることから、容器と考えた。推定復元すると口径約18cmの碗状のものを考えることができる。口縁端はやや丸みを帯びて肥厚しており、1.4mmの厚みを持つ。体部の厚みは0.3mmと極めて薄く作られており、容器としてはそれ程大きなものは考えられない。内外面とも平滑に仕上げられており、光沢のある暗緑色を呈する。

M2は銅製丸柄、広畑地区土器溜まり出土。横3.2cm、縦1.9cm、厚さ0.8cm、表金具高さ0.6cm、表透かし穴2.3×0.5cm、表金具、裏金具とも非常に薄い銅板を使用している。裏側から径1mmの釘で留めている。

M3は耳環、広畑地区奈良時代から平安時代包含層出土。外径2.7×2.4cm、直径0.5cmのほぼ円形の断面を持つ。表面は摩滅しており、箔などは残っておらず、黒っぽい色を呈している。銅心のみが残ったものであろう。

M4・5・8・9は対中地区出土の釘でM8が溝8から出土した以外は包含層出土である。M5・8・9は所謂角釘で、全容のわかるM8で全長約5.8cm、断面は約0.4cmから徐々に細くなっている。頭は直径0.7cmの円形で頭巻である。M9は先端を欠損しているが、残

存長6.7cm、やはり角釘で頭部近くで0.7×0.8cmを測る。頭部はやや細くなって終わる。

M6・7は用途不明の鉄製品である。M6は幅約0.6cm、厚さ約0.4cmの板状のものを環状に成形したものである。

M11は村中地区V-30区包含層出土。幅約1.0cm、厚さ約0.4cmの扁平な板状のもので先細りとなる。M12・13と異なってやや細く、曲がった状態で出土している。

M12は村中地区P-30区ベース直上出土。M13は広畑地区旧耕土直下砂礫ベース直上出土。模様の扁平で先端の尖った形態を持つ。M12は頭部が逆L字形に叩かれている。

第4節 小 結

広畑地区は段丘末端に立地しており、部分的に河川による堆積が幾度も重なるため、複数の遺構面が存在している。段丘上には弥生時代後期から近世に至るまでの遺構が同一面に残されている。段丘下ではステージ1からステージ6までの面を想定して検出を試みた。各々のステージには出土した遺物のうち最も新しいものの時期を当てている。以下各ステージ毎に簡単に考察を加えてまとめる。

ステージ6は遺物が全く出土していないために時期を決定することができないが、上層との関係から弥生時代前期以前の地表面である。灰色～暗灰色粘土層の面で検出された遺構は溝が一条と柱穴状の掘り込みである。溝は大きく蛇行して流れており、堆積物も洪水砂のみであるため、自然流路である可能性を持つ。柱穴状の掘り込みは溝とは異なった黒褐色シルト質の土で充填されており人為的な掘り込みであろう。この面が極細砂～細砂で覆われた上面がステージ5となる。

ステージ5は弥生時代前期に属する。検出された遺構は溝5条であるが、内1条(溝9)は遺構検出面がやや上にある。溝10と溝12は北側で一本となっており、その部分の溝10側に溝と直交して溝の全幅にわたって杭列が打たれていた。杭には柾目の板状の材(板材)を使用したもの、丸太を蜜柑割りにした材(割り木材)を使用したもの、丸太をそのまま使ったもの(丸太材)があり、これらのうち、板材や割り木材のものは溝の上面近くでほとんどが確認されたが、丸太材のものほとんどが断ち割りのさいに検出されており、溝10の底よりも深い位置にしか残っていなかった。これは板材がコウヤマキ等の針葉樹を使用しているのに対して、丸太材が広葉樹を使用しているがために遺存の度合いが異なることに起因するのかもしれないが、両者は機能の差、或いは時期差として捉えた方が妥当であろう。機能の差として考えた場合は、両者が同時併存しており、前者つまり板材のものが井堰本体であり、後者つまり丸太材のものは井堰本体と重複してやや南側に作られていることからその補強或いは溝底が水流によって抉れるのを防ぐ機能を持つものと捉えるこ

とができる。時期差として考えた場合は、丸太材を使用したものを第一期、板材を使用したものを第二期のものとして捉えることができる。丸太材を使用したものは直径3～5cmの広葉樹と思われる丸太の先端を尖らせて使用しており、26本を約15cm間隔で三列に打ち込んでいる。板材を使用したものは第一期のものや北側に重複して作られており、約25cm間隔で二列に打たれている。調査では丸太材が板材よりも古いものであるのか、板材に伴うものであるのか明らかにすることができなかつたため、以下では板材を使用した井堰についてのみ述べることにする。

これらの構造を持つ井堰は本流から引いてきた水を分水する役割を持つものであろう。二列の杭は互い違いになるように打たれており、水流はここで勢いを止められ、嵩を増す。その際に溝底が水流で挟れないように礫を敷き詰めている。矢板列は遺存しているだけでも溝底から約35cmの高さを持っており、溝上面よりも高い。更に二列の間に板を挟めば、水は完全に堰き止められダムアップし、溢れた水は溝12に流れ込む。溝10と溝12の溝底のレベル差は井堰下で約10cmであるが、溝12はその後細く浅くなっていくため、ダムアップが必要となる。この井堰が埋没した時には、水は溝10側を流れていたものと思われるから、溝12に置かれた丸太はこの溝を堰き止める為に置かれたものと考えるのが妥当であろう。溝10の下流の溝底に打たれている杭は秩序を持って打たれたものではない。溝底が水流で挟られるのを防ぐ河床固定の目的で打たれたものであろう。

溝11は先の溝10や溝12より古い時期に掘削されている。この溝にも杭列が打たれており、やはり溝と直交し溝の全幅に設けられているが、これは一列のみである。丸太枕あるいは割り木枕を使っており、矢板は使っていない。この井堰はその構造から分水機能よりも水の塞ぎ上げとしての機能を多く有していると考えられる。

弥生時代前期の遺物は三田盆地では青野ダム建設の際の調査で若干出土しているが、その他ではつい最近、封中遺跡と武庫川を挟んだ対岸の扇状地上に立地する三輪餅田遺跡⁽⁴⁾で出土しているだけである。また、神戸市側では塩田遺跡⁽⁵⁾が知られている。いずれにしても新段階以降のものである。封中遺跡でも新段階の時期に限られているが、同時に縄文時代晩期の土器も出土している。その中に生駒西麓産の角閃石を含む胎土の土器が含まれている。また弥生時代前期に属する土器の中にも生駒西麓産の胎土を持つものが含まれている。おそらく三田盆地に稲作文化が流入するのは武庫川を遡ったルートを通じて雨から入ってきており、その時期も弥生時代前期新段階であろう。

ステージ4は弥生時代後期から古墳時代前期に属する。三田盆地周辺での弥生時代遺跡の立地は時期毎に大きく変化しており、封中遺跡で弥生時代中期の遺構・遺物が全く出土していないこともそれを裏付けている。このステージではそれまでの遺構が全て段丘下で検出されたのに対して、初めて段丘上を走る溝が作られる。段丘崖が堆積物によって埋没

していったことがその要因であろう。

ステージ3は古墳時代後期に属する。検出された遺構は溝だけであるが、ステージ2と重なっており、作り替えはあるものの後代まで継続して使用されていたものであろう。土器の他に耳環が出土している。

ステージ2は奈良時代から平安時代に属する。検出された遺構には、溝・柱穴・井戸状遺構等がある。溝は段丘上面を走るものと下面を走るものがあり、双方とも南北に流れる。段丘下面を走るものには直行する方向に杭が打たれており、井堰と考えられる。井戸状遺構は小規模のもので、溜池施設と考えられる。同時期の遺物には、墨書土器・緑釉陶器・銅製丸鋸が含まれており、一般の農村集落の様相とは異なる。対中地区で主体を占める平安時代から鎌倉時代の遺物は殆ど出土していない。この時期以降になると段丘盛はほぼ埋没し、沖積平野へと続くようになる。

ステージ1は近世以降に属する。盛り土・耕土・床土をはずした下面で検出された面で確認された。検出された遺構には、溝・溜池状遺構・土壇・柱穴・耕作痕・杭列・暗渠排水等がある。暗渠排水の存在はそれまで用水路によって水を引いてこなければ耕作できなかったこの地が、堆積物によって次第に段丘が埋没したために今度は排水が必要となったことを示している。溜池状遺構は段丘の末端に位置するところなど関東や大阪の泉南地方で検出された同様の遺構と類似する。これが溜池だとすると、それ以前の用水路による流動性灌漑から貯溜性灌漑様式への転換が考えられる。また反対に暗渠排水と同様の水田の排水を行う施設とも考えられる。但しこの溜池状遺構はあまり長期間にわたって使用されていたとは思えない。これらの遺構は全て水田等の耕作に関するものであるが遺物量は少なく、内容的には土面子・鳩笛と言った玩具類が目立つ。

本流から段丘縁辺をまわして引いてきた水を分水する井堰は、弥生時代前期、古墳時代後期、奈良時代から平安時代と連続とこの狭い調査区内で作られている。井堰は時代と共に段丘が埋没してくるため、徐々に段丘の高い位置にそして下流側に移動している。

調査地は段丘の末端部にあたり、また武庫川本流の旧河道が数十メートルまで迫っていることから、人々はこの低位の段丘上を何とか可耕地として利用するために古くから努力してきたようである。但し、調査地より上の中位段丘面の水田は現在では多くの溜池を利用して耕作している。

三田米で有名な三田は、この様な営々とした水との戦いの上に成り立ったと言えよう。

森下地区は対中地区・広畑地区が段丘上に立地するのに対して、段丘下の沖積層に立地する。平面的に検出できた遺構面は3面であり、内2面は洪水砂に覆われた水田跡である。この氾濫堆積物は北側から供給されたものと南から供給されたものが確認できたが、北か

らのものは河川の流れと同一方向の一般的なものであるが、南からのものは盆地地形特有の逆流する氾濫によるもの或いは谷から流れ出る支流によるものと考えられる。

水田跡はその位置関係から広畑地区で検出された用水施設に伴うものではなく、調査区の北側に別の施設の存在が予想できる。

検出された遺構はその時期を決定できるような資料に恵まれなかった。土層的には広畑地区で検出した弥生時代前期の面と相対的につながると考えていたが、確実なものではない。水田面を覆う土層中からは、砂粒を多く含む胎土の土器小片が検出されたが、時期を特定しがたい。またサヌカイト製の打製石剣(短剣)或いは石槍と思われる基部も出土しているが、これも弥生時代前期に遡る例は少なく、中期以降に一般的になるようである。

〔註〕

- (1) 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
- (2) 岡田章一・長谷川 真 1985 『特別史跡総路城跡—兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告』兵庫県立歴史博物館
- (3) 深井明比古・堂江秀典他 『播磨における前期弥生式土器の様相』『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1985年に詳しい。I様式をa-dまで5期区分しており、d段階は4期目にあたる。
- (4) 昭和52年、藤井祐介氏が青野ダム建設予定地内で発掘調査を実施し、壘などが少量出土した。
- (5) 高島信之他 『武庫川下土地改良区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録 '81-'87』三田市教育委員会 1988
- (6) 昭和62年度に三田市教育委員会が発掘調査を実施し、弥生前期末—中期にかけての遺構・遺物が出土した。
- (7) 丸山薫氏の御教示による。
- (8) 家根祥多氏に御教示いただいた。
- (9) 田中清美・家根祥多他 『長原遺跡発掘調査報告II』財団法人大阪市文化財協会 1982
- (10) 昭和60年、兵庫県教育委員会が発掘調査し、土壘から長原式土器が出土した。
- (11) 丹治康明 『宇治川南遺跡』『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986
- (12) 高橋 学氏に御教示いただいた。

第5章 ま と め

第1節 対中遺跡の性格

対中遺跡は三田幹線の工事中、不時発見されたもので、今まで知られていなかった遺跡である。当時は北神戸～三田地方においては古代末～鎌倉時代の遺跡は小規模でしかも断片的にしか発掘されておらず、不明な時期であった。ところがこの対中遺跡が発掘され、偶然ではあるが、この時期の遺跡が次々と発掘されつつある。これは当地方において、住宅などの開発事業が活発に行われるに至ったことが大きな原因であり、大規模な発掘は今まで点的にしか判らなかつた古代～中世の集落を面的におさえることができた。このことは遺物を多量に含む井戸などの発見を招き、不明であったこの時期の土器様相を明確に示してくれた。

土器については各地区の説明にみられるように縄文晩期から近世にまでおよぶ幅広い時期のものが出土し、特に平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺物は当地方の編年資料の一つとして活用されるものであろう。しかし、混在遺物も多く各土器の編年的相互関係の究明について充分でなかつた。また遺構についても何回も建て直された掘立柱建物は規模と遺物からみても一般的な村落として考えるよりも寺院や官衙的な施設の一角を想起させるものである。

対中遺跡の位置する有馬郡に関する史料は少なく、対中遺跡の性格を想定しうものはない。また対中遺跡と同様な時期の遺跡として、最近、特に神戸市北区長尾町宅原や塩田など、武庫川支流域での発掘が相次いでいる。それらの遺跡の遺構や遺物量からみても対中遺跡と同様な状態を示していることから広範囲な遺跡を対象に、その性格を考える必要がある。

また広畑・森下地区を中心に発掘された水田跡や井堰は弥生時代初頭の水田耕作を裏づけるものとして、また内陸部における船作伝播を考える点において非常に重要なものである。

対中遺跡は今回の報告にあるように5回の発掘調査は行われているが、遺跡の全体像は判っておらない。これは遺跡の時期が幅広いことから、生活の場や生産の場が変化していたものと考えられ、広範囲になることが予想される。今後遺跡の範囲や性格を確定しうることが課題であり、開発行為に対して十分な調査が必要である。

第13表 対中遺跡遺構年表

| 西暦 | 時代 | 対中地区 | 広畑・森下地区 | 三田・北神の遺跡 |
|------------|----|------------------|-----------------------|--|
| B.C 500 | 原 | 先土器 ・縄文 | | 溝口 氈 裾下ヶ谷 下井沢・福島長町 |
| A.D.1 | | | | 溝14 溝11 溝10 井堰 |
| 100 | 始 | 弥生 | | 北台 堀田 三輪餅田 |
| 200 | | | 土埴群 | 広畑 水田 |
| 300 | 古 | 墳 | | 溝2 溝6 溝7 |
| 400 | | | | 桑原・下宅原 川除藩の木 奈良山1・2号墳 |
| 500 | 古 | 墳 | | 墓山古墳 西山古墳群 奈良山古墳群 青龍寺墓山古墳群 金心寺廃寺 |
| 600 | | | | 溝1 溝8 |
| 700 | 代 | 710 | | 川端宮 番倉室 貝谷室 |
| 800 | | 奈良 | | |
| 900 | 平 | 794 | | |
| 1000 | | 安 | | |
| 1100 | | | 独立柱建物1~10 溝 井戸1 | |
| 1200 | 中 | 鎌倉 | | |
| 1300 | | 1338 1333 南北朝 | | |
| 1400 | 世 | 室町 | | |
| 1500 | | 1573 戦国 | | |
| 1600 | 近 | 安土桃山 | | |
| 1700 | | 1603 | | 三田陣屋 岡ノ谷 |
| 1800 | 江戸 | | | 溝4 溜池 耕作畝 |
| 1868 | 原 | 戸 | | |

第2節 三田盆地の地形環境分析 I

立命館大学 地理 高橋 学

はじめに

地形環境分析は、「人間と地形との関わり」を明らかにするための方法である。すなわち、それは地形変遷史、災害史、土地開発史を総合的に把握するためのシステムであり、詳細については既に報告した(高橋 1986^①)。地形環境分析は地形面分析、地形帯分析、微地形分析、超微地形分析の4段階の異なったレベルの分析から構成されており、それぞれのレベルは、10⁴年、10³年、10²年、洪水ごと、といったタイムスケールにほぼ対応する。また、それぞれの精度に現在の状況の分析を行う段階と、過去の復原を行い、その中で考察をすすめる段階とがある。

今回報告するのは、武庫川中流域に位置する三田盆地の対中遺跡についてであり、分析は地形帯分析レベルにおける現状の把握まで行った。

三田盆地の概観 三田盆地は、兵庫県南東部を南にむかって流下する武庫川の中流域(河口から約25km上流)に位置している。盆地を貫流する武庫川は、現状では丹南町にある白髪岳(標高741m)付近を源流とするが、過去においても必ずしもそうであったわけではない。現在、武庫川と篠山川とは谷中分水界によって隔てられているが、野村亮太郎・田中真吾(1987^②)によれば、このような状況は、約2万2千年前の広域火山灰給良Tn(AT)降下以降に生じたと考えられている。それ以前においては、篠山川は、川代峡谷を経て加古川へ注ぐのではなく、武庫川の上流にあたったというのである。このような流路の変更は河川争奪と呼ばれ、中国山地の河川にしばしば認められる。たとえば、武庫川支流の有野川と、加古川の支流山田川は神戸電鉄有馬線の大池駅付近で谷中分水しており、ここでも河川争奪が生じたと考えられるのである。このような河川争奪の原因としては、⑤盆地をふくむ谷の形状が地質構造に支配されているため谷中分水が生じやすいこと、⑥丘陵状の低い山地が多いこと、⑦六甲変動などの地盤変動の影響等が考えられる。^{1/20万}地勢図の京都および大阪の図幅を広げてみると、三田盆地は、亀岡盆地、福知山盆地西部、あるいは水上盆地と非常に良く似た形状をしていることに気づく。他方、篠山盆地は、綾部盆地・福知山盆地と実に良く類似しているのである。これらの盆地において、河川争奪が生じるプロセスは次のように考えられている。①地盤運動あるいは土石流などの発生によって盆地の出口を堰止められる。②排水不良のため湖や湿地が生じる。③他の低い地点から溢流する。

一般に、これらの盆地にはそこがかつて湖であったとする考え方が流布している。たし

かに、現在の洪水の発生状況を見ても、下流側の峡谷部の排水能力を越えた水が逆流し、盆地の一部を水没させるといったことが多い。また、約1500万年前の第一瀬戸内海と呼ばれる時代に、海あるいは湖に堆積した地層（神戸層群と呼ばれ低い山地を形成している。）が存在すること、あるいは、約200万年以降に第二瀬戸内海と称される時代に海や湖に堆積した地層（大阪層群と名づけられ、丘陵を構成している。）の分布することが知られており、このような知識が時代を越えて混然となり、いつしか盆地全体が広大な湖であったとする「湖伝説」が生じたのである。しかしながら、最終氷期以降に限ればこれらの盆地は必ずしも湖になっていたわけではないのである。最近になるまで、このような盆地の中央部において遺跡の発見は極めて稀であり、山地・丘陵や段丘上にその密度が高かった。しかし、これは必ずしも事実を反映するものではなく、湖伝説の下、遺跡を発見しようとする努力があまりはらわれなかったことに起因すると考えられるのである。

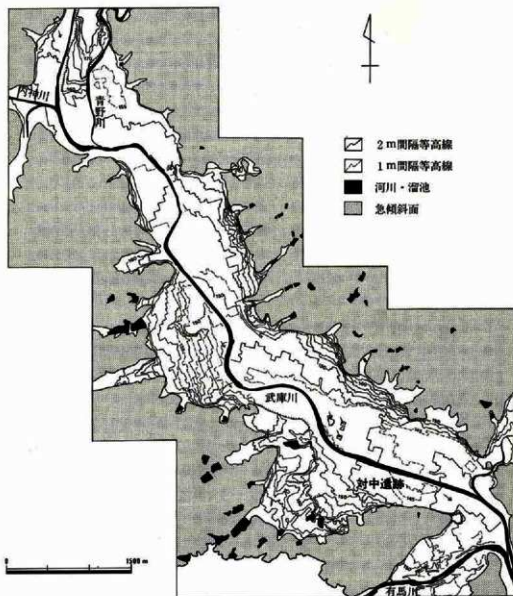
さて、三田盆地の南には、六甲山地が存在する。この山地は六甲花崗岩（約8700万年前～7500万年前頃）や布引花崗閃緑岩（約1億1000万年前～6000万年前）といった岩石で構成されているものの、盛んに隆起しはじめたのは20万年前以降の極めて新しい時期に属していることが大阪層群の研究から判明している（藤田和夫・前田保夫1974年⁽⁶⁾）。したがって、六甲山地周辺では、地盤上昇に起因する河床の相対的低下によって形成される河岸段丘（以下段丘と称する）と呼ばれる階段状の地形が非常に良く発達している。しかも、六甲山地に近づくほど段丘の高度は高くなっており、形成後に変形を受けていることが知られる。従来、三田盆地を対象とした地形学や地質学の業績のほとんどが、六甲山地の隆起もしくはそれに伴う地形の変位に注目したものであることも無理からぬことといえよう。（たとえば、守田 優1960年⁽⁹⁾、加藤環二1972年⁽¹⁰⁾など）

遺跡の立地と関連した三田盆地の地形学的業績については、管見によれば、青木哲哉（1983年）が唯一のものと思われる。ただし、この論考も段丘、丘陵に主眼がおかれているため近年の急速に進展した盆地中央部における発掘調査に対応しきれていない。

三田盆地の地形面分析 地形面分析にあたっては、昭和59年撮影の $\frac{1}{5000}$ モノクロ空中写真（対中遺跡周辺）および昭和59年撮影の $\frac{1}{17}$ モノクロ空中写真（対中遺跡周辺以外）の判読、2m等高線図の作成および現地調査を行った。第1図、第2図は以上の作業によって作成されたものである。第1図の地形分類図によれば、当地域は現氾濫面を含め8面の地形面より構成されていることが判る。このうち、更新世に形成されたことが確実な地形面は、段丘面Ⅰから段丘面Ⅳにすぎない。段丘面の発達は今回調査対象とはなっていない広野より北部において良い。ここで段丘面と呼ぶ地形は正確には河岸段丘と呼ばれるもので、かつて河川の氾濫によって形成された平坦面がその後の河床低下により氾濫がお

よばなくなってしまった地形である。

さて、段丘面Vは一般に崖線とか麓面と呼ばれる地形であり、最終水期最盛期から完新世の初期にかけて形成された地形と考えられるが、当地域での年代を決定する資料は今までのところ欠けている。段丘面VIおよび段丘面VIIは、従来であるならば、現記濫原面として同じカテゴリーに分類されていた地形である。しかし詳細にみると段丘面VIIと現記濫



第81図 三田盆地 等高線図

原面との境には0.5～2 mの低い崖が存在しており、現在も形成過程(すなわち洪水によって土砂が堆積する)にあるのは後者に限定されることが判明した。

また、段丘面Ⅶは段丘面Ⅵを開析した谷の中に分布しており、このことから段丘面Ⅶの方が段丘面Ⅵより新しい時期に形成されたと考えられる。

これらの地形面と山地・丘陵との境について注目すると、全体的には北北西-南南東あるいは北西-南東方向の直線的なものとなっており断層などの地質構造に支配されているものと判断できる。さらに、詳しくみると、三輪神社や高次八幡宮などの立地する山地本体からひょうたん状に延びた尾根が存在することに気づく。この地形のくびれた部分はケルンコル、そして先端にむかい再び幅をひろげ高さを増した小丘状の尾根をケルンバットと呼ぶ、これが連続して出現する所には活断層が存在していることが多い。すなわち、三田盆地の北縁は、活断層によって限られている可能性が高いのである。

さて、次に武庫川の南端に注目すると、武庫川は三田盆地から武庫峡谷へと流下している。つまり武庫川はいつけん平野から山へ向かって流れているのである。類似のものとして先に紹介した亀岡盆地と保津峡がある。この奇妙な地形は先行谷と呼ばれる地形である。つまり、流域の一部で地盤の隆起が発生した時、その量が河川の侵食量に比して少ないと、河川はそのまま流下しつづけ、深い峡谷を形成してしまうというのである。仮に、地盤の隆起が速度を増したり、峡谷が崖崩れなどの要因で堰き止められた場合には、盆地は湖と化してしまうわけである。三田盆地には、そのような湖は出現したのであろうか。

三田盆地の地形帯分析 次に地形帯レベルの精度で地形をみて行きたい。今回報告する地域は6地形帯に細分が可能である。地形帯分析が8面であったのに対し、段丘面Ⅰと段丘面Ⅱは残存が悪く地形帯分析を行なうことができなかった。段丘面Ⅱはおそらく、広野付近の武庫川本流性扇状地帯と、三田市街地南側の支流性扇状地帯に区分できそうである。これに対し、段丘面Ⅲ・段丘面Ⅳ・段丘面Ⅵはいずれも支流性扇状地帯として形成されたことが第91図および第92図に示した地形から判断できる。武庫川の右岸と左岸を比較して、前者に分布がかたよるのは、右岸側の方が山地・丘陵の形態が複雑であり、支流性の堆積物が本流の侵食から保護されるためである。他方、左岸では活断層の影響を受けたと考えられる直線的な山麓線となっているため、支流性堆積物の多くは、武庫川本流によって侵食されてしまったと考えられる。さらに残存している支流性堆積物の一部は断層運動により著しい変位を受けている可能性が高い。また、右岸の扇状地帯は、いずれも一時代古い扇状地を開析した土砂の再堆積によって形成されたと判断され、直接に山地・丘陵から土砂が排出されているわけではなさそうである。他方、扇状地帯Ⅴは左岸の直線的な山麓に顕著に発達している支流性堆積物が構成する扇状地帯であり、その下により古い扇状地帯

が埋積されている可能性が高い。この地形帯は直接に山地・丘陵から土砂が供給されている。

さて、扇状地帯Ⅶは右岸に良く残存している。また、幅の広い開析谷中には、この地形帯に対比される地形帯が存在している。さらに、青野川左岸において自然堤防帯Ⅶとしたもののうち一部は、この地形帯に分類した方が良いかもしれない。扇状地帯Ⅵには園場整備以前には糸里型土地割が広く展開していた。また、三田市教育委員会の発掘調査¹⁰⁾によって明らかになった貴志・下所遺跡（一部自然堤防帯Ⅶにまたがっている）、貴志・樋戸遺跡、貴志遺跡、下深田遺跡等もこの地形帯に立地していた。自然堤防帯Ⅶにまたがっている貴志・下所遺跡では古墳時代中期の竪穴住居までしか遡れないものの、他は弥生時代中期の竪穴住居が検出された遺構の最も古いものとなっている。これらが立地するのは、いずれも黄灰色シルト質砂上である。この黄灰色シルト質砂の下にはおそらく支流性の扇状地礫層が覆在しているものと思われる。対中遺跡においては、広畑地区のB区南半までがこの地形帯上に立地している。1984年に調査された井戸のたちわり調査の結果によれば現耕土下に約30～40cmの黄灰色シルト質砂を挟み、4 m50cm程の層厚をした中～大礫が認められ、その下に神戸層群と思われる岩盤が存在していた¹¹⁾。すなわち、ここでは扇状地帯Ⅵの堆積物は上面を形成する黄灰色シルト質細砂をふくめ約5 mであった。ただし、下層の礫層は中洲（微地形レベル）を構成するものと考えられ、かなりの起伏を持つものと思われる。この地形帯は播磨灘に臨む揖保川流域や市川流域などにおいて、最も良く遺跡が発見される完新世段丘面扇状地帯と類しており、今後、調査の進展が期待される。

自然堤防帯Ⅶは以上の地形帯と異なり武庫川本流の営力によって形成された地形である。現在、この地形帯上では都市化や園場整備の進展によって糸里型土地割が姿を消し微地形分析が困難になりつつある。川除・藤ノ木遺跡¹²⁾、桑原遺跡¹⁴⁾、対中遺跡・広畑地区B区北半およびC区は、この地形帯上に立地する。特に、川除・藤ノ木遺跡や桑原遺跡の住居址は自然堤防Ⅶおよびその埋没した上に立地している。また対中遺跡・広畑地区C区では、北西から南東方向に延びる埋没自然堤防が存在しており、その北側、南側の縁辺には弥生時代前期の溝や井堰それに水田が造られていた。以上のように、この自然堤防帯Ⅶでも微地形レベルで土地利用に変化が認められる可能性が高く、より精度の高い分析が必要である。類似の地形としては、明石川流域の玉津田中遺跡などが発見された完新世段丘面・自然堤防帯があげられる。なお、前述したように桑原遺跡において、弥生末～古墳時代の竪穴住居址、古墳時代中期～後期の竪穴住居址、掘立柱建物跡、そして奈良時代の掘立柱建物そして中世の柱穴や溝まで検出されており、少なくとも、このような時代には自然堤防帯Ⅶの分布範囲が水没したとは考えられない。

自然堤防帯は現在も河川の氾濫によって土砂の堆積が認められる地形面であり、明瞭な

旧河道や、比較的規模の大きな自然堤防によって特徴づけられている。ちなみに、対中遺跡の東側に位置する旧河道は、1911年測量の $\frac{1}{5万}$ 地形図には武庫川の主流として描かれているものの、1950年応急修正された $\frac{1}{5万}$ 地形図には、現在のように河川改修された河道が主流となっており、この間に流路変更の工事が行われた結果、旧河道となったと考えられる。この地形帯に関しては、段丘面VIIとの境の崖形成後に、しばしば洪水に襲われ、場合によっては極く短期間水没してしまったことがあると思われる。また、規模の大きな自然堤防は、洪水がここに集中することによって急速に成長したものであろうと判断される。

おわりに 三田盆地の地形環境分析 I として、今回は地形面分析と地形帯分析の一部を実施した。三田盆地は最近、急速に変貌をとげており、空中写真に写し出されているのは住宅と圃場整備された水田ばかりといった状況になりつつある。しかし、段丘面VIおよび段丘面VIIには未だ知られていない多くの遺跡が埋没している可能性が高く、微地形分析・超微地形分析といったより精度の高い分析を、より良いデータをもとに続けて行きたい。今回の調査において、従来、臨海平野において得られた結果が、内陸盆地においても利用できる可能性があることが判明したことは、特記に値する。

〔註〕

- (1) 高橋 学 (1986) 「志知川沖田南遺跡の地形変化と水田開発」 兵庫県教育委員会編 『談路・志知川沖田南遺跡』
- (2) 野村亮太郎・田中真吾 (1987) 「兵庫県内陸部における最終氷期以降の地形発達」 第四紀学会シンポジウム予稿集
- (3) 三田市史 上巻 (1964) では神戸層群と大阪層群の混乱が認められる。たとえば145頁
- (4) 藤田和夫・前田保夫 (1974) 「兵庫県の自然環境の変遷」 兵庫県編 『兵庫県史』 第1巻
- (5) 藤田和夫 (1968) 「六甲変動 その発生前後」 第四紀研究 7-4
- (6) 藤田和夫 (1983) 『日本の山地形成論』 蒼樹書房
- (7) 高橋 学 (1985) 「丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境」 兵庫県教育委員会編 『丁・柳ヶ瀬遺跡』
- (8) 守田 優 (1960) 「三田盆地周辺の段丘地形と六甲変動」 立命館文学 185
- (9) 加藤珠二 (1972) 「武庫川中流部の地形」 立命館文学 319
- (10) 青木智哉 (1983) 「三田盆地およびその周辺の地形」 兵庫県教育委員会編 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II』
- (11) 三田市教育委員会編 (1988) 『埋蔵文化財調査の記録 '81~'87』
- (12) 兵庫県教育委員会編 (1985) 『対中遺跡実績報告書』
- (13) 兵庫県教育委員会編 (1987) 『川除・藤ノ木遺跡現地説明会資料 I』
- (14) 兵庫県教育委員会編 (1986) 『桑原遺跡』

第5章第3節は
公開していません

写 真 图 版



1. 対中遺跡遠景 空中写真(南から)



2. 広畑地区全景 空中写真(北西から)



掘立柱建物跡群 空中写真



対中遺跡周辺 空中写真



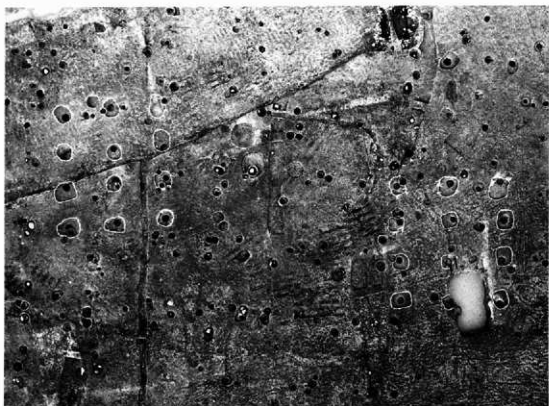
1. 対中地区全景（北東から）



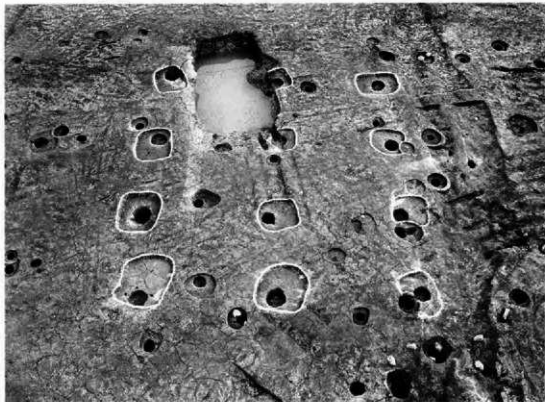
2. 対中地区調査前全景（西から）



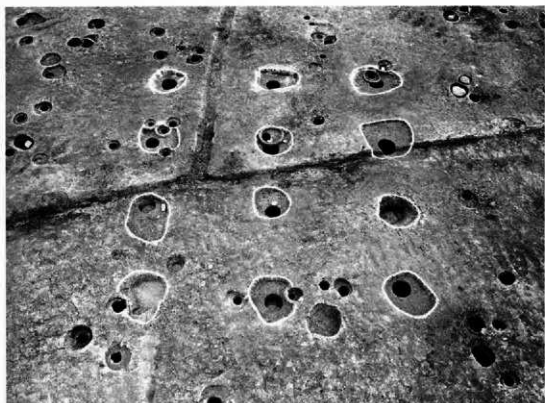
1. 掘立柱建物跡群全景 空中写真（東から）



2. 掘立柱建物跡10、11（奈良時代）空中写真



1. 掘立柱建物跡10 (北から)



2. 掘立柱建物跡11 (北から)



1. 溝 4 土器出土狀況
2. 溝 8 土器出土狀況



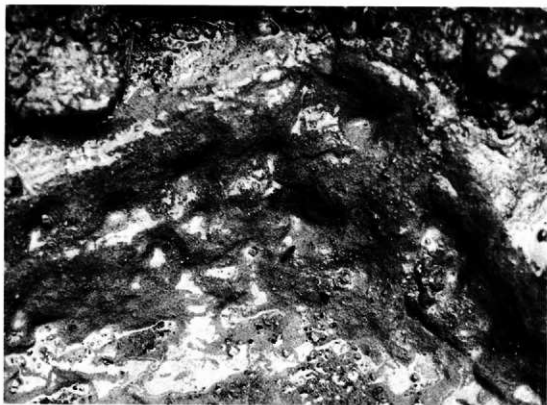
1. 井戸1 全景



2. 井戸1 細部写真



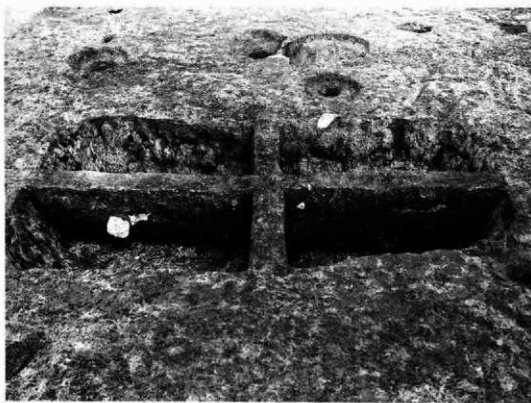
1. 井戸1 掘方



2. 井戸1 底に残るノミ痕



1. 木棺墓 1 完掘状况



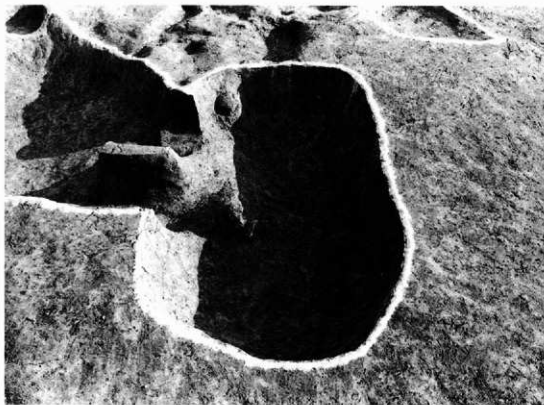
2. 木棺墓 1 断面



1. 弥生時代後期土塚群（南から）



2. 弥生時代後期の凹地と南壁



1. 土塚 2 (南から)



2. 土塚 5 (北から)



1. 広畑地区全景（東から）



2. 広畑地区全景



1. 近世以降の遺構面（西から）



2. 暗渠排水（南から）



1. 溜池状遺構（南から）



2. 耕作痕（南から）



1. 井戸1 (北から)



2. 井戸1 (西から)



1. 溝3 (南から)



2. 溝7 (南から)



3. 土器溜り (南から)



1. 溝1 (北から)



2. 溝6 (南から)



3. 溝2 (南から)



1. 弥生時代前期遺構面（東から）



2. 溝10・溝12（北から）



3. 溝11（北から）



1. 溝10井堰 (北から)



2. 溝10井堰 (西から)



1. 溝10井堰断ち割り (北から)

2. 溝11井堰断ち割り (北から)



3. 溝14 (北から)



1. 森下地区全景 (南西から)



2. 第1面水田址



3. 確認トレンチ (南から)



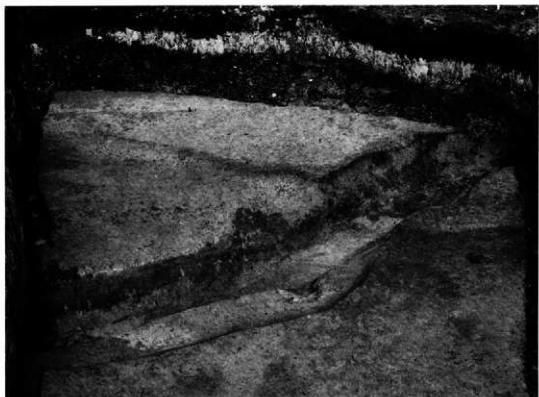
1. 第2面水田址 (南西から)



2. 第2面水田址 (北から)



1. 第3面遺構（北から）



2. 溝2（南西から）



1. 溝2 (西から)



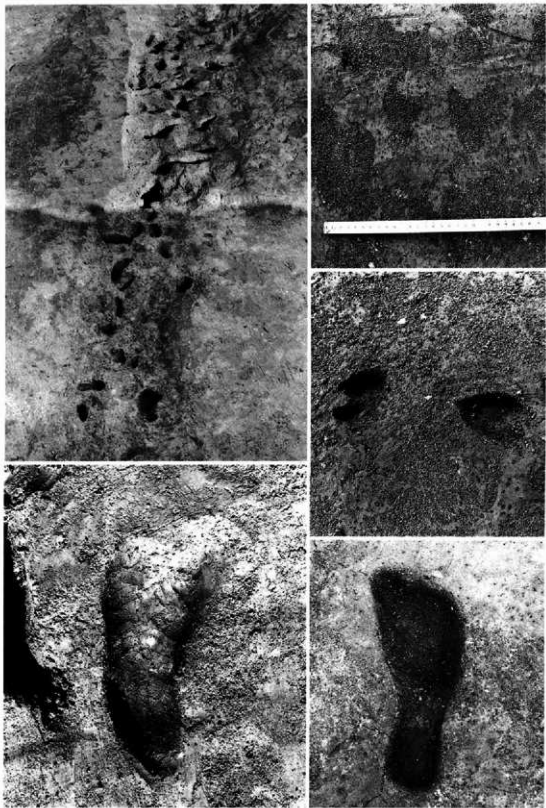
2. 溝2土層断面 (西から)



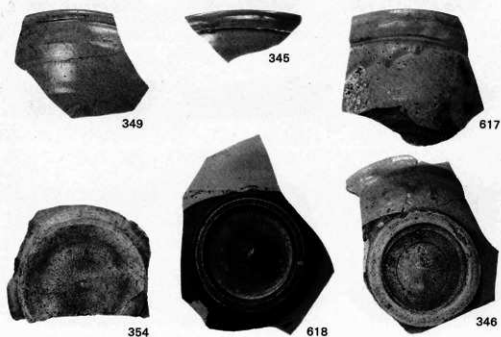
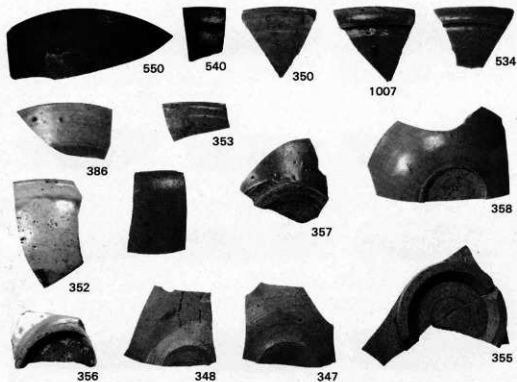
1. 第1面水田畦畔（北から）



2. 水田畦畔（南から）



水田面に残された足跡（ヒト及び偶蹄目動物）



対中地区 井戸 白磁碗(617・618) 溝16 青磁碗(550) 溝13 青磁碗(540) 溝11 白磁碗(534)
 溝3 白磁碗(386) Pit内 白磁碗(345) 皿(346・348) 包含層 白磁碗(352・356・355・
 349・354) 皿(350・357・358・347)
 広畑地区 包含層 白磁碗(1007)



160



404



405



43



35



383



467



466



468



581



574



575



586



571



560



576



569



567



93



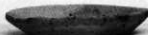
104



476



78



431



477

土師器 小皿 A 1 (160) A 2 (404·405) C 2 (35·43·383·466·467·468)
C 3 (560·567·574·581·586) C 4 (571·569·576·575)
D 1 (93) D 3 (78·104·431) D 4 (476) D 5 (477)



173



439



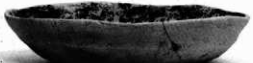
185



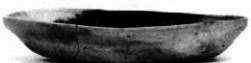
489



174



592



590



594



593



524



217



444



202



418



490

土師器 大皿 B 3 (173·185·439) C 6 (174·489) C 7 (590·592·593·594)
杯 E 2 (217) E 3 (524) E 4 (202·444·490)
瓦器 小皿 (418)



215



232



413



218



414



219



415



220



234



447

土師器 受皿(232) 杯 E 1 (215) E 2 (413~415) F (218~220) 甕(234・447)



229



230



237



231



420



527



421



239



419



528



497



238

土師器 托状皿(229~231) 瓦器 小皿(237) 椀(238・239・419~421・497・527・528)



422



423



424



426



427



429

溝4出土 須惠器 碗



510



287



512



290



519



329

溝10・包含層出土 須惠器 山茶碗(287・290・510) 碗(512・519) 片口鉢(329)



596



598



600



599



597

井戸1出土 須恵器 小皿・碗 墨書土器



607



604



611



608



813

井戸1出土 須恵器 碗



814



641



640

弥生土器 甕



362



536



363



364



417



361



535



369



381



365



360



382



551



367



371



375



370



380



374

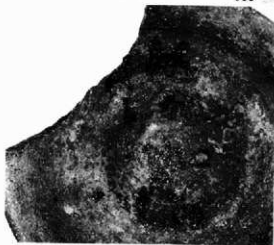


378

土錘



600



601



599

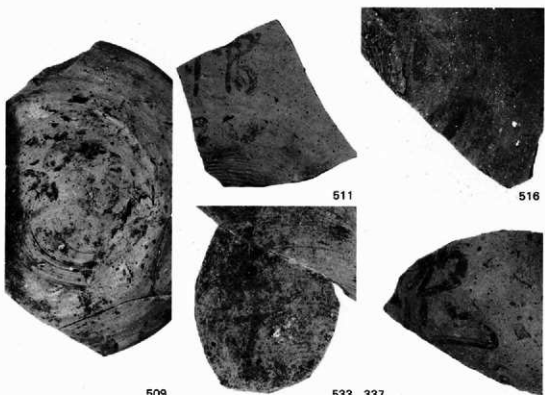
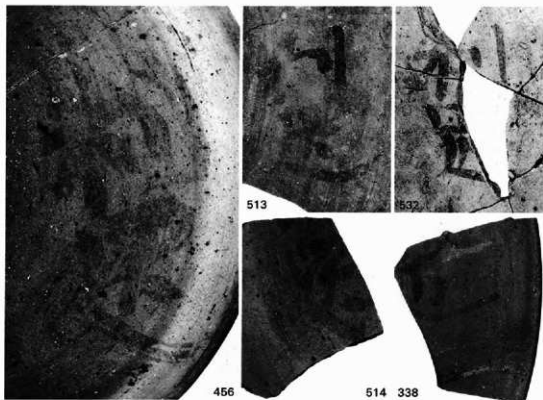


598



618

井戸1出土 須恵器 墨書土器



溝・包含層出土 須恵器 黒書土器



1002



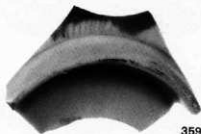
1003



1004



1001



359

近世 染付碗(359) 土笛(1001) 面子(1002~1004)



1010



1094



須恵器 墨書土器(1010・1094) 複弁蓮花文瓦



1027



1005



1030



1032



1031



1037

須恵器 高台杯(1005・1027) 杯蓋(1030・1031) 杯身(1032・1037)



1069



1079



1076

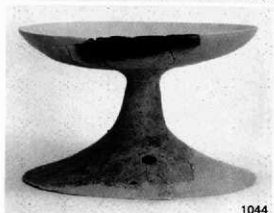


1039

弥生土器・土師器 小型丸底壺(1069・1079) 廣口壺(1039) 甕(1076)



1060



1044



1045



1067



1062



1068



1073



1074



1061



1057



1077



1070

弥生土器 細頸壺(1045) 広口壺(1057・1060～1062・1067・1068・1074) 無頸壺(1073)
高杯(1044) ミニチュア土器(1077) 底部(1070)



1042



1043



1050



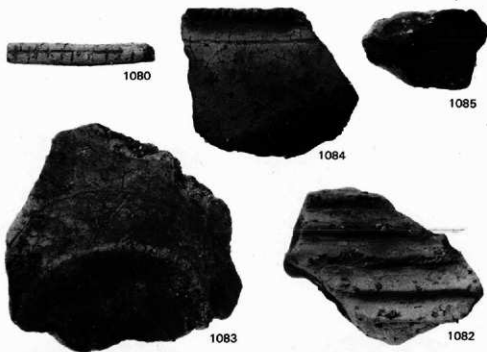
1053



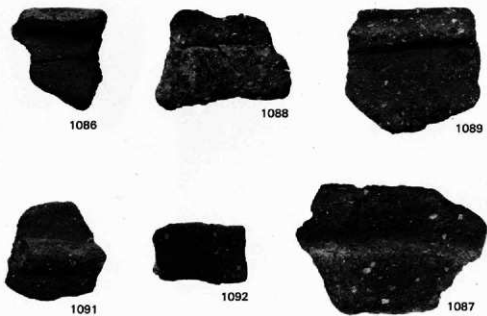
1051



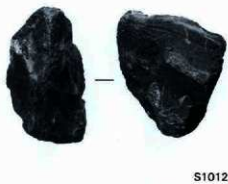
1054



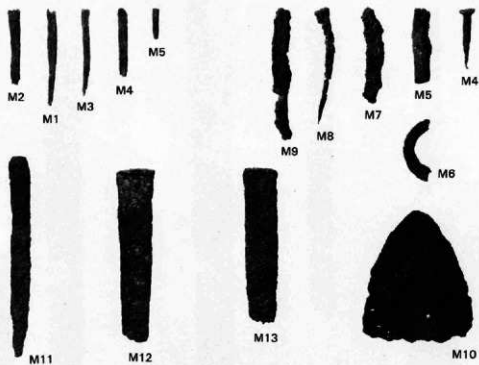
弥生前期土器 壺(1080・1082・1083) 甕(1084・1085)



縄文晩期凸帯文土器 深鉢



石器 温石(S1) 石鎌(S1001) 短剣(S1002) 石庖丁(S1007) 石庖丁未製品(S1008)
石斧(S1010) 敲石(S1012) 紡錘車(S1013) 砥石(S1014) 凹石(S1017)

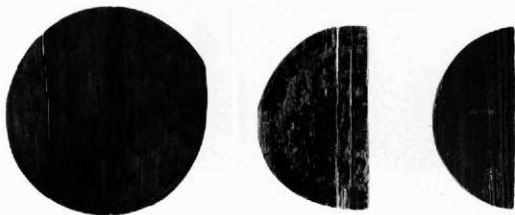


鉄器 釘(M1~5) 木棺墓出土 釘(M4・5・8・9) 用途不明鉄製品(M6・7・10~13)

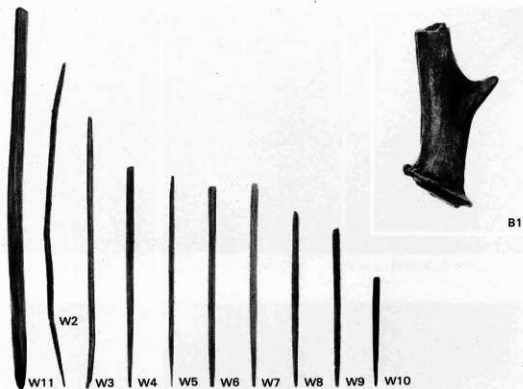


銅製容器 銅製丸柄 耳環

(赤外線写真)



木製品 木筒(W1) 赤外線写真 板材(W12・15・16) 曲物底板(W18~20)



木製品他 棒状木製品(W11) 筥状木製品(W2~10) 鹿角(B1)



W22

梶の子(W22)



W23

横槌(W23)



W24

楸(W24)

兵庫県文化財調査報告書 第60巻

対 中

昭和63年3月31日発行

発行 兵庫県教育委員会

神戸市中央区下山手通5丁目10-1

〒650 TEL 078-341-7711

編集 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

兵庫県埋蔵文化財調査事務所

神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

〒652 TEL 078-531-7011

印刷 丸山印刷株式会社

兵庫県高砂市米田町神爪57-1

〒676 TEL 0794-32-1511
